続！　キングコング対ゴジラ

マイケル社長

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球の驚異か！宇宙の神秘か！二大怪獣大復活！

迫りくる二大怪獣の脅威！日本全土に危機せまる！

電撃３人トリオの南海珍道中！撮って稼ぐか、売って稼ぐか！

特撮とドラえもんとジャック・ダニエルをこよなく愛するマイケル社長が送る世紀の決闘！

無敵のゴジラか！剛腕のコングか！

続！キングコング対ゴジラ！

続！キングコング対ゴジラ！

ご期待ください！

目次

―プロローグー ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 1
―疲れたときには、パシン！― ―――――――――――――――――――――――――――― 13
―凹んだときは、笑っとけ笑っとけ― ―――――――――――――――――――――――― 17
ー産みの親より育ての親― ―――――――――――――――――――――――――――― 26
―好きこそ物の上手なれど、好きなことが仕事なヤツって何人いるんだろか??― ―――――――――――――――――――――――――――― 31
―1日のうち、朝食が一番大事。だからしっかり食べとけ― ―――――――――――― 39
―眠れないときは羊を数えると良いらしいけど、途中で数わかんなくなってイチから数えなおすと結局眠れない― ―――――――――――――――― 45
―会議そのものより、その後の懇親会の方がタメになる話が多い― 53
―海外旅行でカッコつけて英語話すと、上手な日本語で返される― 59
―船や車に酔ったときは、事前に酔い止め飲んでても効きやしねえ― ―――――――――――――――――――――――――――――――――― 65
―ところでパシン錠ってどのくらい疲れに効くんだろう？いますぐにでも試してみてぇなオイー ―――――――――――――――――――――――― 74
ーよく怪獣っていえばゴジラって短絡的に言う人いるけど、もっとバラエティ豊かだかんねオタクなめんなー ―――――――――――――――― 82
ーちなみにゴロは、いわゆるゴロサウルスです― ―――――――――――――――― 88
ー亜麻色の髪の乙女にすみれＳｅｐｔｅｍｂｅｒ Ｌｏｖｅー 96
ー油断大敵ー ―――――――――――――――――――――――――――――――――― 105
ー壮烈、キングコング！ー ―――――――――――――――――――――――――――― 109

ー指定地域に出かける際は、予防接種を忘れずに。ｂｙ外務省ー 118
ーそういえば昔、マッドマックスって映画があってだなあ・・・ー 129
ー最近、忙しくてごめんなさいー ―――――――――――――― 138
ー怪しい者ではございません、というヤツは、１００％怪しい。間違いないー ―――――――――――――― 146
ーゴジラ復活すー ―――――――――――――― 152
ー海内無双ー ―――――――――――――― 163
ー人は過酷な体験をすると、精神安定のため記憶に鍵をかけるー 168
ー無駄な知識など、この世に存在しないー ―――――――――――――― 179
ーゴジラの猛威ー ―――――――――――――― 186
ーグアム壊滅ー ―――――――――――――― 192
ー女を拐うヤツにロクなヤツはいないー ―――――――――――――― 202
ー空軍出身者が多い航空会社は、悪天候に強いー ―――――――――――――― 209
―それにしてもキングコングって、ヘリコプターとよく戦うなあ― 216

―プロローグ―

平成１２年　８月１１日　ソロモン群島　ファロ島沖

「おーい！ファロ島だぞぉー！」

通訳兼案内人のコンノ二世が甲板から声高に叫んだ。ようやく船酔いにも慣れ、夢うつつ気分だったＴＴＶ（東亜テレビ放送）ディレクターの桜井良太郎は顔を上げ、眠気覚ましに両頬をパン！と叩くとデッキに出た。

ところどころ白波がそそり立つ紺碧の海原の向こうに、いくつかの頂をたたえた島が見えてきた。同行のテレビ局員（皆、日本での過酷なテレビ局勤務で桜井同様寝ぼけ眼である）たちも、コンノ二世が指差す先を仰いだ。

「なになに？着いたって？」

下階から、娘の真佑をあやしていた妻、桜井睦実が階段を駆け上がってきた。勢い良く足を跳ね上げたためか、ようやく泣き止んでいた真佑はまた泣き出してしまった。

「ああー、ゴメンゴメン！」

両腕を揺さぶり、どうにか真佑のご機嫌を取ろうとする睦美。

「よしよーし、もうすぐ着くからねー」

良太郎も加わり、真佑に笑顔を向ける。しかし真佑はなかなか機嫌を直してはくれず、周りのクルーもファロ島より真佑に注目してくる。

「・・・やっぱり、叔母さんたちに預けてきた方が良かったんじゃないか？」

心底弱った顔で、良太郎は睦美に言った。

「・・・でも、ファロ島のみんなと家族ぐるみで仲良くしていこうっていうのは、お義父さんの強い希望だったじゃない。叔母さんだって、そういって送り出してくれたんだから」

「それはそうだけどなあ・・・ファロ島のみんなは優しいが、やはり２

歳になるかどうかの幼子をこんな長旅に連れてくるっていうのは・・・」
「でも、このロケに局アナの誰も行きたがらなかったでしょ？だからあたしが立候補したんだから。大スポンサーと桜井家の両方顔を立てた妻の気持ちに敬意を表してほしいもんだわ」
睦実は口を尖らせ、頬を膨らませた。これは参った、娘だけでなく、妻のご機嫌も取っていかなくてはならないのは、家庭だけにしてくれよ・・・。
サンサンと照り付ける太陽だったが、ふと涼しい海風が吹いた。心地よい風はむずがる子どもの機嫌を癒してくれたのか、真佑が泣き止んだ。
「驚いたぁ、南の国でこんな気持ち良い風が流れるなんて」
一陣の優しい風は、どうやら睦実の機嫌も直してくれたようだ。
「たぶん、どっかでハリケーン起きてる。そうすると、渦巻きの周りは涼しくなーる」
コンノ二世が注釈してくれた。
「おい、それじゃあ、この辺りもハリケーンに巻き込まれるのか？」
この穏やかな風が、ロケはおろか帰りの船便予定も狂わせると一大事だ・・・そう考えた良太郎は訊いた。
「ダイジョブダイヨブ、風西から吹いてる。なら、ハリケーン東に行く。ダイジョブダイヨブ」
コンノ二世はそう言うが、突然涼しい風が強まり、コンノ二世がかぶっていた帽子が宙に舞ってしまった。
「ああーっ！シャッポ！シャッポがあ！」
ひらひらと海に舞い落ちる帽子に、コンノ二世は叫ぶ。
「シャッポって・・・コイツいつの時代の人だよ」
時代遅れの単語と慌てふためくコンノ二世の様子に、良太郎は笑いをこらえるのに難儀した。
「コンノちゃん、これで頭隠しな」
睦実はそんなコンノ二世に笑いを隠さなかったが、首に巻いていた紫色のスカーフを手渡した。

「ムツミさん、ありがとう。サンキュー、シェイ・シェイ」
　コンノ二世は別に頭が禿げているワケでもなく、くせ毛激しいワケではないが、頭部が露わになることをイヤがる節がある。なんせ、来日して熱海の温泉旅館に連れて行ったときも、風呂場で帽子を脱がず旅館とひと悶着起こしたくらいだ。
「さあ、もーすぐ着岸。準備しよ、準備」
　コンノ二世はそう言うと、船員たちにも地元の言語で同じように言った。すっかり泣き止み、近づいてくる島に興味津々の真佑を下ろすと、睦実は夏用の白いジャケットを羽織り、『世界驚異シリーズ』と描かれた襷をかけた。
「もういい加減恥ずかしいんだけど、何とかならないかなあ、この襷」
　不満気に口をすぼめる睦実。
「仕方ないだろう、スポンサーの要請だし、長い伝統だ」
　そう窘める良太郎自身も、とっくに平成になり、それどころか２１世紀を迎えようとしている時勢に、こんな昭和趣味な襷をかけて番組を作ることには大いに抵抗があった。
　だがこの『世界驚異シリーズ』スポンサーであり、ＴＴＶ他番組にもたくさんの広告出稿をしてくれるパシフィック製薬の多胡社長が昭和の頃から続けている方針なのだ。
「しょーがないよね、昭和モーレツ時代を生き抜いた人が８０過ぎても居座ってるんだもん」
　ため息をつく睦実も、その辺は理解していた。
「それにウワサじゃ、あんたとこの局アナ、この襷かけるのイヤだからこの仕事断ったって話じゃない」
「・・・ウン・・・ム・・・まあ、当たらずとも遠からず、かな」
　良太郎はじっとりと見てくる睦実から目を逸らした。
『世界驚異シリーズ』
　パシフィック製薬が昭和３６年からスタートさせた長寿番組である。最初は地球温暖化やそれに伴う海水位上昇、止まらぬ核実験によって生じた放射性物質の解説など、科学の解説を中心に据えた番組だった。

当然そんなマジメ番組など視聴者の興味を得られることはなく、視聴率はわずか５％以下。パシフィック製薬一社提供とはいえ、何度も打ち切りを検討される始末だった。

だが昭和３７年、ソロモン群島・ファロ島に眠る『巨大なる魔神』なるものを探すドキュメンタリーを番組内で放送したところ、その年に実際日本へ上陸した『巨大なる魔神』事変もあり、番組名に恥じぬ驚異的な視聴率を獲得。その後は科学の解説から地球の大自然、辺境を旅し冒険するドキュメンタリーに様変わりした。

海底２万マイルを探索する調査船への密着、南米の秘境ギアナ高地探検、南極調査に命をかける男たちへの同行取材と、毎週土曜日夜７時から１時間放送される内容は視聴者の目を引き、昭和４０年には平均視聴率３８％を記録する、ＴＴＶのドル箱番組へと成長した。

その後は昭和５５年までレギュラー放送を続けていたが、当時のドラマとコントブームにより通常放送からは撤退した。だが以後も概ね４か月に一度、番組改変期の特別番組として制作が続けられ、平成を１０年も過ぎた現在も視聴率は２０％を下らない、根強い人気を誇っている。

それほど長きにわたる番組に仕上げたのは、ＴＴＶでカメラを担ぎ精力的に世界各国をロケして回った良太郎の父であり、またパシフィック製薬現社長で、当時同社の宣伝部長を務めていた多胡氏であった。

良太郎も父の背中を追い、テレビ局に入社。撮影畑一筋だった父とは異なり、番組制作に興味があったことで、志願して特番『世界驚異シリーズ』制作に参加。いまはこうしてディレクターとなり、普段は主に警察２４時や実録！日本のお仕事、といった密着系番組制作の傍ら、年に３回放映される『世界驚異シリーズ』へも積極的に参画していた。

当時他局のアナウンサーを勤めていた妻の睦実とは、業界の交流会で親しくなった。活発でアクティブな睦実に、良太郎は１も２もなく惹かれた。３年前、夏のボーナスをすべてはたいて購入した結婚指輪と共に結婚を申し込むと、「こんなことなくても、貴方と結婚したいと

思っていた」という言葉と共に一緒になってくれたのだ。
それから睦実は勤務していた局を退社。真佑の出産を経ていまはフリーアナウンサーとして芸能事務所に所属している。娘がまだ小さいこともありレギュラー番組こそ持たないが、単発の報道番組や選挙報道、ラジオ番組の代理出演など、コンスタントに仕事が舞い込んでくる。
そんな睦実だが、『世界驚異シリーズ』のレポーターを務めるのは今回が初めてだった。普段であれば良太郎も公私混同はせず、慣例に従い局アナにレポートをしてもらうようアナウンス室に依頼を出したところ、今回は誰も出せない、という返答だった。
理由は明白だった。
1カ月前、中国が自国西方地域にて臨界前核実験を実施した。2年前のインド、パキスタンによる核兵器保有宣言後、微妙な外交関係を続けているインドへの牽制、という見方が一般的だった。
そしてどうやらそれは事実であったらしく、それから1週間後にはインドが国際社会からの非難にも関わらず臨界前核実験を実行。そのわずか2日後にはパキスタンが同じく臨界前核実験を断行した。
また同時期、ロシアによるグルジア、カザフスタンへの軍事侵攻が勃発した。ロシア連邦成立後、一向に回復しない国内経済による政権への不満をかき消すべく、酔っぱらいの大統領が軍事侵攻への同意書にサインしたためと言われている。現段階では憶測にすぎないが、両国への軍事行動が思いのほか手こずっているらしく、事態打開のために戦術核兵器の使用がささやかれている。
このような深刻さを増す国際情勢下においてはいつ緊急報道が入るかわからないため、自局アナウンサーを長い期間ロケへ帯同できない、というのが理由だった（ただし、時代遅れのダサイ襷なんかかけたくない、という声が若手アナウンサーから聞こえてきたこともたしかだった）。
「あそこの砂浜に着岸させる。でもギリギリまでムリ。ボートで行く」
上陸準備を終えると、コンノ二世が声をかけてきた。相変わらず穏

やかな風は心地よいが、本当にハリケーンはやってこないのだろうか。
　不安を呑み込み、良太郎はまず機材、そして真佑をボートに乗せると、マイク一式を持つ睦実の手を貸してボートを進めた。
　聞けば、ファロ島では常に高台で見張りがいて客人（あるいは外敵）を監視しているらしい。友好的な上陸であることを示すべく、コンノ二世は紫色の旗を立てて目立つようにグルグル回した。
　一行は砂浜に上陸し、機材を下ろしてボートの空気を抜く。ロケ期間は3日間。チャーター船が迎えにくるこの間に、良太郎たちは島民の協力を得て、島を探検し『巨大なる魔神』と再会できれば、今回のロケは大成功だ。
「おい、どうしたんだ？」
　良太郎は周囲をキョロキョロ見回し、戸惑い気味のコンノ二世に声をかけた。
「おっおかしい、誰も出てこない」
　するとコンノ二世は、どこからそんな声が出るんだというくらい甲高い雄叫びを上げた。しばらく反応を待ったが、誰かが出てきたり、何かしら合図を送ってくる様子もない。
「おかしい。サクライさん、なんかオカシイよ。ここへ来ることは伝えてあったのに」
「伝えてあったと言っても、このご時世に手紙で、だろう。日時勘違いしてるんじゃないのか？」
　ファロ島は２０００年代に突入した現在にあっても、インターネットはおろか電話も何もない。ひと月に一度、ソロモン連邦政府の連絡船が互いの書簡をやり取りしに訪れる他、接触を図る機会はない。
　メラネシア。大洋州でもニューカレドニアなどとは異なり、この辺りの島々は観光地化には消極的である上、とりわけファロ島の住民たちは文明への同化を頑なに拒んでいる。それは自分たちが信奉する『巨大なる魔神』への祈りをささげるためであり、日本風に表現すると『神聖にして、侵すべからず』といったところらしい。
　その中でも、昭和３７年の一件以来日本人には好意的だったらし

い。良太郎の父は当時の一件以降も何度かファロ島を訪れ、交流を持ったそうだ。ただひとつ、島に戻ったとされる『巨大なる魔神』には、一度も会えていないらしかった。
「仕方ナイ、集落まで行ってみよう」
日本人に好意的とはいえ、いきなり不穏な空気が漂う。番組のためとはいえ、良太郎はクルーたちとコンノ二世、何より睦実と真佑を引き揚げさせることも考えた。
「・・・ねえ、あれって？」
睦実が海上を指差した。良太郎は双眼鏡を覗いた。
「・・ホバークラフト、だなあれは。黒いのが2艘。でもなんだありゃ？」
「島から離れていくみたいだね」
良太郎から双眼鏡を借りた睦実がつぶやいた。傍らの真佑は、両親を不思議そうに見上げていた。
「コンノ、あのホバークラフトはなんだ？」
そう尋ねたが、コンノもピンと来ていないらしい。怪訝な顔をして首を傾げるばかりだ。
「なあ、ロケは中止しよう」
良太郎の言葉に、睦実もコンノ二世も、クルーたちも目を丸くした。
「何言ってるの、ここまで来て！」
睦実が声を張り上げた。
「どうもイヤな予感がするんだ。引き揚げた方が良さそうだ」
そう言って、良太郎は真佑を抱き寄せた。無垢な視線で見上げてくる。
「でも、何かの事情で誰も出てこないだけかもしれないじゃない」
「そうだが、普段いるはずの見張りがいないことといい、あの妙なホバークラフトといい、空気感が妙だ。オレたちだけなら良いが・・・」
良太郎はつないでいる真佑の手をギュッと握った。良太郎の懸念が理解できたのだろう、睦実も二の句を告がなかった。
「チョット待って、何か聴こえる・・・」
コンノ二世が口に指を当て、片方の耳に手を当てて澄ませた。

「島の誰かか?」
「イイヤ・・・なんだろうか・・・」
　すると、良太郎たちの耳にも聞こえてきた。ズン、ズン、ドン、ドン・・・。
「アレか。聞くところの太鼓の音じゃないか?」
『巨大なる魔神』が太鼓の音色に反応するというのは、父から聞かされていた。もしかしたら、魔神への祈りの時間やらで、島民が出払っているとか・・・?
「・・・違う、チガウ。もっと別な・・・・」
　そのときだった。島の奥の方から、猛獣の咆哮らしき音がした。
「まさか・・・・」
　魔神か、と言いかけたとき、コンノ二世が手のひらを向けた。
「違うナァ。別な声だと・・・」
　いよいよ、良太郎と睦実は顔を見合わせた。クルーも顔を強張らせている。
　長旅の上文明の力が及ばないこの島へ幼い娘を連れていくことに、抵抗はあった。だがファロ島の人々とは父の代から家族ぐるみの付き合いだったし、真佑には小さいころからファロ島に馴染んで、将来はもっと仲良くなってほしい・・・そんな叔母や睦実の意見もあり、今回は公私混同を避ける自身の方針を曲げて家族ごと訪れることにした。
　だが予感とはいえ危険な事態が考えられるのなら、話は別だ。相手とは連絡を取る手段がないため、状況を窺い知ることができない。万が一のため衛星電話は持ってきており、いまなら一度離れたチャーター船に連絡を取り、戻ってきてもらうこともできるだろう。
「あっ!!」
　コンノ二世が大声を出したのは、そのときだった。砂浜から先、そそり立つ絶壁のてっぺんを指差していた。
　人だった。何人かが叫びながら、頂を駆け回っている。だが様子からして、こちらには気づいていないようだ。
「オーイ!」

コンノ二世が呼びかけるが、反応がない。何やら慌ただしく、大声を上げながら頂の向こうへ走り去っていってしまった。
「いったいどうしたんだ?」
「わからナイ。様子、おかしい」
とにかく様子をうかがうことになり、良太郎は睦美や真佑たちをその場にとどまらせ、コンノ二世と絶壁の向こうへ行ってみることにした。
「いいか、あくまで様子を見るだけだ。何か危険なようだったら、すぐに戻るから。真佑を頼む」
「う、うん」
ただならぬ雰囲気に、睦実もクルーたちも喉を鳴らした。真佑だけは、遠くを見つめていた。まるで絶壁の向こうで起こっていることが、理解できているかのように・・・。
コンノ二世はライフル銃を持ち、撃鉄を起こした。これで、いつでも弾丸を放てる。もちろん人間相手でなはい。彼にとってファロ島の人々は家族も同然だ。
島には体長1メートルを軽く超えるトカゲが跋扈し、その鋭い歯は人間を骨ごと噛み砕いてしまうという。また大型の蛇や猛禽類といった野生動物も多く、そのためのライフル銃だった。
絶壁を回り込み、集落が見える辺りまで来るとコンノ二世は双眼鏡で様子をうかがった。
「ヤッパリ変。だーれもいない」
「そんなことがあるのか?あれか、魔神への祈祷とか」
「それだったら、あそこの麓の祭壇にみんな集まる。そこも、誰もいない」
「じゃあ、これはどういうことだ?」
それはコンノ二世にも見当がつかないらしく。首を横に振るばかりだった。
だがズン、ズン・・・ドン、ドンという音は島の奥地から変わらず聞こえてくる。それに加え、良太郎は足元がかすかに揺れているような感じがした。

集落の向こうには、剣のように尖った山がいくつかそびえている。この奇妙な音はそちらから聞こえてくるように思えた。
「みんな、あっちへ行ったのかな」
「あっちは魔神の住処。みんなあんまり近寄らない。そして魔神もみんなのために、あそこから出てこない。お互いさま、オタガイサマ」
だが集落に人の気配がない、ということは、住民たちは皆あの山の向こうへ行ったとしか考えられない。あるいは・・・良太郎はさっき目撃した、黒いホバークラフトを思い起こしていた。
「コンノ、せめて集落までは行ってみよう。誰かいるかもしれない」
「ウ、ウン・・・」
コンノ二世はライフル銃を握り、ゆっくり進んでいく。良太郎も息を殺して後に続く。
ふいに、地響きが強くなり、足元が大きく揺れた。
「地震か、それにしては・・・!」
突然、山のひとつが大きく崩れた。鼓膜をひどく揺らし脳髄に届かんばかりの音がして、噴火したような煙が舞って良太郎は視界を奪われた。
煙が落ち着くと、猛獣のような咆哮がより近くに聞こえた。地響きが足元を揺らし、咆哮が周囲を震わせた。
「・・・ゴジラ・・・!?」
崩れた山の向こうに鎮座する巨体。紛れもなく、昭和３７年に北極海より出現し日本・松島湾に上陸後、富士山麓での決闘を経て相模湾に沈んだはずの、原子怪獣ゴジラだった。
足元の岩を蹴散らし、こちらへ向かってくるゴジラ。そのとき岩と瓦礫が吹き飛び、中からゴジラと同程度の何かが飛び出した。
「キングコング!!」
良太郎が叫んだ。今回の『世界驚異シリーズ』の目的である巨大なる魔神・・・南海の巨神・キングコングが目の前に出現したのだ。
大きく吼えたキングコングは、ゴジラの背後から走り込んで背中に蹴りを喰らわせた。前のめりにつんのめったゴジラにまたがり、ゴジラの肩から首にかけて拳を叩きつける。

吼えるゴジラの尻尾をつかむと、そのままひきずって後ずさる。まるで集落からゴジラを遠ざけようとしているようだった。
地面に爪を立てて抵抗するゴジラは身を反転させると、瞬時に背鰭を光らせて口から青白く光る息を吐き出した。
キングコングの右腕が燃え上がり、悲鳴を上げて手を放しのたうち回る。立ち上がったゴジラは白煙を上げる右腕をさするキングコングに突進した。
弾き飛ばされたキングコングは絶壁に背中を叩きつけられ、膝をつく。ゴジラは尻尾を大きく振り、キングコングの顔面に叩きつけた。
転げ回るキングコングを追うゴジラ。すると頂の先から、島の住民たちが槍やら石やら、ゴジラに向けて投げつけているのが見えた。
「ああ、アレじゃあ・・・！」
コンノ二世が悲鳴じみた声を上げる。
「コンノ、戻ろう！」
良太郎はコンノ二世の手をつかみ、睦実たちの元に戻ろうとした。衛星電話を預けてある。一刻も早く救援を呼び、あまつさえ、近隣諸国・・まともにゴジラを張り合えそうなのはオーストラリアかニュージーランドか・・・に軍の出動を要請さすねば！
「良太郎！」
ふいに、道の先から睦実の声がした。
「なん、で・・・」
２歳にもならない真佑が、こちらに走ってきていた。それを追いかけ、睦実もやってきたようだった。
地響きは相変わらず強く、向こうではゴジラとキングコングががっぷり組み合ってもみ合っている。おぼつかない足取りでこちらへ走る娘の元へ走ろうとしたとき、ひときわ大きく地面が波打った。
真佑の身体が地面に弾かれ、宙に舞う。良太郎は怒声を上げながら真佑を救うべく足を踏ん張ったが、地面が横倒しになった。
視界の先で睦実が跳ね飛ばされ、姿が見えなくなる。
良太郎自身の視界が３６０度めぐった。ゴジラとキングコングは周囲の山が崩壊した土砂が覆いかぶされ、激しい粉塵の向こうに見え

なくなった。

「真佑！真佑――!!」

娘の名前を叫びながら、良太郎の身体は地面を転げ回る・・・・・。

―疲れたときには、パシン！―

・平成３４年　７月７日　４：４６　愛知県岡崎市　某高層マンション

『はーいみなさんおはようございます、こんばんは、こんにちはー！珠ちゃんです。登録者数、こんなにうなぎ昇ってるってマ???』

ひといき入れようとパソコンの画面を最小化し、最近人気急上昇のＹｏｕＴｕｂｅチャンネルを開いてみた。

『それじゃあ今日は、珠ちゃん歌ってみたコーナーをやってみるンゴ～！最近ですね、ＹＯＡＳＯＢＩが好きでして～』

明るく少しダルそうなしゃべり口がクセになる、そんな評判が立っているこの『脱力系ＹｏｕＴｕｂｅｒ　珠ちゃんネル』。なるほどユルそうな雰囲気が疲れた頭にはちょうど良い。桜井宏樹はいただきもののコーヒーメーカーからカップに注ぐと、続きを注視する。

ついつい関連動画を開いてしまって気が付けば時間がけっこう経過してしまうのはＹｏｕＴｕｂｅあるあるか。外は夜が明け、早くも熱い空気が舞い込んでくる。エアコンを稼働させ、今度はコーヒーにたっぷりとメープルシロップを入れる。

そうしてさらに無為な時間が過ぎていき、とうとう宏樹は編集作業を途中で投げてしまった。今日は先日コラボ依頼をしてきたファミレスチェーンと打ち合わせ、その後はＹｏｕＴｕｂｅ動画管理会社『ＭＭＭＵＵ』との打ち合わせ。それが終わると、自身が先に投稿していた動画から、ナイスリアクションだけを切り抜いたショートムービーの編集と投稿。並行して、ちっとも進んでいない一週間前に撮影した企画系動画の編集作業・・・。

宏樹のポリシーとして、毎週火曜日と土曜日に動画を投稿するようにしている。これは自分で作ったルールというか習慣であるため、別に翌日になろうがいつになろうが本来かまわないのだが、気の短いファンだと投稿予定日の夜９時くらいに『今日は動画まだですか？』

などとリプを飛ばしてくる。
動画くらい、いつでも自由に投稿させてくれ・・・。そうは思うが、投稿を楽しみにしているファンがどれだけいるか・・・チャンネル登録者数で判断した場合、５００万人程度になるのだが・・・そう考えると、自由気ままに投稿していれば良い、というワケにもいかない。
コーヒーとメープルシロップの効果か頭ははっきりしてきたが、今にして思えば編集を後回しにするのなら中断して仮眠しとけば良かった、そう後悔することはこれまで何度あったことだろうか。
あるいは、他のＹｏｕＴｕｂｅｒのように管理会社へ動画編集を丸投げする方法もある。だが去年末、管理会社は編集、投稿、視聴者対応などのサービスを細かく区分けし、それぞれに料金を発生させる方式を採用した。近年は管理会社の負担ばかり増え、従来通り支払われる登録料・委託料のみでは立ちいかなくなったためだ。
宏樹は、思案の結果自身で撮影、編集を続けることにした。元々動画撮影はもちろん、編集することそのものは嫌いではない。それに他者へ依頼した場合、細かいところだが編集のカットやテロップが思ったように仕上がらず、結局作り直すか妥協するかしなくてはいけない。編集は自分自身のセンスを活かしたいのだ。
いつからだろうか・・・動画を上げることが苦痛に思うことが増えてきた。最初は違ったのだ。思いつき、子どもの遊びレベルのことを動画に収め、仲間内で楽しんでいたのは高校・大学生のとき。そういった動画をＹｏｕＴｕｂｅにアップしたところ、じわじわと人気が出てきていまに至る。おかげで広告収入だけで暮らすのに充分過ぎる額に達したし、いわゆる『案件』と呼ばれる企業とのタイアップも増えた。
詳しい住所こそ明かしていないが(それでも特定はされたが)、宏樹が東海地方在住ということもあり地元企業の雄であるあの自動車メーカーや、一度『好物です』と言ったことで地元名産品であるブロッコリーの出荷組合とのコラボ。そして遠縁にあたる親戚が世話になったやらで、世界有数の製薬会社であるパシフィック製薬からの案件も多い。

ＹｏｕＴｕｂｅｒの収益としては平均以上を稼いでいるにも関わらず、ここ最近はモチベーションを保つのに苦心していた。そんな宏樹の内面が現れたのか、最近アップした動画の視聴数は減る一方なのだ。そして評判もよろしくない。

『ヒロキン、目死んでる』

『１３：４１　ここのヒロキン、棒読みｗ』

『なんかヒロキン疲れてない？』

アンチのコメントではない。チャンネル開設以来のファンからも、このようなリプが飛ばされてくるのだ。

理由ははっきりしている。自分が本当に撮りたい動画ではないからだ。

では、本当に撮りたい動画とは？・・・たぶん、撮影していて心から楽しい、そう思えるような動画だろう。

だが、もうネタは出尽くしている。

ＹｏｕＴｕｂｅｒもオワコン化していると囁かれる昨今、もしかしたらオレも潮時なのかもしれない・・・。

そう、身を引けば負担が軽くなる反面、そうしてしまうと自分が自分でなくなりそうな怖さもある。

撮影しているときの自分、画面に映し出されるときの自分。それが本当の自分なのか、わからない。だが、動画投稿から引退してしまう自分は、本当に自分なんだろうか・・・。

「あ～あ、もう辛気くさ」

独り言をつぶやくと、別な動画を開いた。ＹｏｕＴｕｂｅｒ仲間である高畑敦也が主宰しているＹｏｕＴｕｂｅチャンネル『高畑ＵＮＩＶＥＲＳＩＴＹ』の最新回がアップされたのだ。

『はいどうも、日本時間でおはようございます。ドバイ時間でこんばんは。高畑ＵＮＩＶＥＲＳＩＴＹ、高畑敦也です』

低く太い声の彼は、時事問題や経済知識等、教養系チャンネルとして主に大学生や若い世代の社会人に人気を博している。

『今日はですね、先週勃発した北朝鮮による韓国・延壺島砲撃事件に関してです。ニュースなんかでも盛んに騒がれてますよね、まあ詳細は

他の媒体に譲るとして、さらなる軍事侵攻を辞さなかった北朝鮮がなぜ一方的な休戦を申し出たか。ここで注目してほしいのが、今年初めに再編された在韓米軍なんです。ソウル近郊に水原という都市があります。先の再編でここに在韓米陸軍の駐屯部隊が置かれることになったのですが、実はココ、ただの陸軍駐屯基地じゃないんです。近年の極東地域情勢に対応すべく、米軍特殊部隊・・・グリーンベレーや、デルタフォースといった、よく映画にも登場する部隊ですね。それらの拠点として築かれた可能性があるんです。で、直近で何が起きたかというと、北朝鮮が連日延壺島に行っていた砲撃。これは北朝鮮の上層部による中止通達があったとされていますが、実は出動した米軍特殊部隊によって砲撃部隊が無力化された可能性が指摘されています。そして、秘密裏に米軍出動を要請したのは、外ならぬ韓国政府というウワサもあるんです。そりゃあね、米軍もタダで動くワケではないですから、韓国政府は見返りとなる密約を交わしたんじゃないかというのが、世界のインテリジェンスの見方なんです。具体的には・・・・・』

―凹んだときは、笑っとけ笑っとけ―

・7月8日　12：16　愛知県岡崎市　某ステキなマンション

「ファロ島？」

ｚｏｏｍの向こうに映る相手に、宏樹は訊いた。

『そう。南太平洋赤道はるかソロモン群島。ヒロちゃんも名前くらいは聞いたことあるだろ？』

程良く日焼けした顔で微笑みながら、神鍋順一郎（通称鍋ちゃん）は問い返してきた。

「そりゃ、知ってるも何も・・・」

話せば長くなるが、宏樹のファロ島への興味は聞いたことがある、程度のものではない。

『いつもお世話になってるパシフィック製薬さんからの案件でね。予算は確保するから、島の探検隊に加わってくれないかって提案があったんだ。そこで、またオレたちで動画撮影しながら冒険しようと思ったんだけど、どーかな？』

神鍋は屈託ない表情でしゃべる。普段から自身の筋肉がビルドアップする様子を動画にし、ＹｏｕＴｕｂｅにアップしている活動にパシフィック製薬が声をかけ、同社が開発したプロテイン製品の紹介を神鍋の動画内でしてもらっている。

とりわけ、去年発売されたサプリメント『コングの力』は神鍋の動画内で紹介されて以降、プロ・アマのアスリートや筋肉思考の男女を中心にウケてパシフィック製薬の看板商品であったパシン錠に匹敵するほどの大ヒット商品となった。

「ふうん・・・いいね」

気乗りしなさそうで笑顔を見せた神鍋は、少し安心したようだった。

『ヒロちゃん、最近元気なさそうだね。どうした？』

「・・・いや、なんでも。それより、ファロ島のことはもっと詳しく教

えてほしいんだけど」
『このことについてはさ、伝通も交えて近いうちに話し合おうってことになったんだ。だからそのときは東京へ出向いてさ、いろいろ話そう』
「・・・わかった。予定わかったらまた教えて」
ＯＫ！とサムズアップすると、神鍋はｚｏｏｍを切った。大きく息を吐くと、宏樹は編集中の動画を一度閉じ、ＹｏｕＴｕｂｅを開いた。
『マッスル！鍋ちゃん・マッスル！』
さっきまで話していた相手が、全身の筋肉を盛り上がらせている。
『筋肉バンザイ！どーも、鍋ちゃんです。今日は、今年もやるぜ！田植えチャレンジ４日目～！』
背景に広大な水田が映し出され、紺色の作業着を身に着けた神鍋が登場する。
元々筋トレやストレッチの動画を投稿して人気を博してきた神鍋だが、３年前から地元新潟の特産であるコシヒカリ作りに取り組んでいる。神鍋自身農家ではないが、地域の農家にも高齢化の波が押し寄せ、機械化が進んでいるとはいえ田植えや稲刈りの作業が負担となっている農家が多いことから、筋トレの一環として農作業の手伝いに参加。そこから毎年５月と１０月に田植えと稲刈りの様子をアップしている。
本人いわく農作業は筋トレでは鍛えられない部分を鍛錬でき、地元のじいちゃんばあちゃんも助けられて一石二鳥！とのことだった。事実、汗を拭いながらトラクターを操作したり、作業の合間に農家のおばあちゃんとおむすびを食べるシーンが評判を呼び、動画再生数もけっこうな水準まで達している。
泥まみれになりつつも、屈託ない笑顔で作業する神鍋の動画を観る宏樹はため息をつくと、別の動画を開いた。
『はいど～も～、こんにちはこんばんはおはようございまーす。珠ちゃんです』
最近人気が伸びてきている『脱力系ＹｏｕＴｕｂｅｒ　珠ちゃんネル』である。

『最近暑いと思ったら、家のエアコンが壊れてたって、マ?今日の動画は、珠ちゃん、笑い堪えてみた～！ハイとゆーことで、今日は雨合羽着てますけど、いまから他のＹｏｕＴｕｂｅｒさんの動画見ても噴き出さず我慢できるか、いまから牛乳含んでやってみるンゴ～！』

「・・・それオレがやった企画じゃん。パクんなよ」

そうボヤくと、動画をつけっぱなしのまま風呂場へ行き、シャワーを浴びだす。パクんなよ、とは言うが、似たような動画は誰が考案したかわからぬまま、いろいろなＹｏｕＴｕｂｅｒがやっている。もちろん宏樹が考案者ではない。最近思うのは『どんな企画なのか』以上に『どんな企画を誰がやるのか』といった部分が大きい。

実際、宏樹自身もそうだ。昔から誰かの動画をマネして、自分もやって動画を投稿することで人気を得てきた。

動画視聴数、チャンネル登録者数がうなぎ昇りになるときは楽しいが、結局、誰がやっても同じ企画だ。自分とは異なる個性のＹｏｕＴｕｂｅｒが出てきて同じことをすれば、ネットの興味はそちらへシフトする。もしそっちが個性的なリアクションでも取ろうものなら、あるいは異なるファン層へ浸透したのなら、自分の個性が簡単に埋没してしまう。

『最近ヒロキンＴＶ、登録者数のワリに再生数伸びないな』

『企画のマネにも限界出てきたな』

これはいわゆるアンチのコメントかもしれないが、的を得ていると感じる。人気獲得のためだけに動画を投稿してきたワケではないが、人気の低下を感じるようになると焦燥感と恐怖感に苛まれる

自分ならではの動画って、何だろうか？

筋肉を鍛え、泥と汗だらけになっても笑顔輝く神鍋の動画を観て、つくづく考え、そしてむなしくなった。

宏樹が東京へ出かけたのは、それから６日後のことだった。

『１４日、八丁堀にあるパシフィック製薬の本社で』

という連絡が神鍋から寄せられ、編集中の動画を眠気とけだるさに

耐えすべて編集してから、当日朝に東海道新幹線に飛び乗った。どうせ終点だから、と宏樹は席に着くなり爆睡し、東京駅で駅員に起こされた。

『先にいってるね』

神鍋からのＬＩＮＥで、宏樹は京葉線に乗り換え、八丁堀にあるパシフィック製薬本社ビルを目指した。梅雨時期の東京は曇天で蒸し暑く、新幹線内の睡眠で回復させたはずの体力は一気に消耗した。

パシフィック製薬のビルに入れば冷房が効いていてだいぶ楽になるかと期待したが、クールビズとやらでエアコンがあまり機能していない。グロッキー状態になりつつも宏樹は受付に声をかけ、アポイントがあることを告げると3階の会議室へお進みください、と言われた。二人の受付嬢は宏樹を見てコソコソ話をしている。一応、自分も有名人なのだな、と宏樹は最近染め上げた金色の髪をボリボリ掻いた。

「よう、ヒロちゃん！」

3階に着くなり、神鍋が出迎えてくれた。普段目にするタンクトップや農作業着ではなく、白いシャツをまくり日焼けした顔ではにかむ姿は、快活な学校の先生を思わせる。

「ひさしぶり・・・でもないか」

直に会うのは数カ月ぶりだが、ＹｏｕＴｕｂｅｒ仲間としてしょっちゅうｚｏｏｍなどでやり取りしている。それにお互い動画の更新に余念がないため、長く会っていないからといって久しぶりな感覚も湧かないものだ。

神鍋の案内で会議室へ入ると、掛けていた二人が立ち上がり頭を下げてきた。つられて宏樹もラフに頭を下げる。しかしどうしてこうも丁寧にお辞儀ができるのか。

「伝通の太田と申します。お話はかねがね」

「パシフィック製薬の二宮と申します。いつも動画拝見してますよ」

それぞれ名刺を差し出してきた。片手で受け取る。パシフィック製薬の広報と大手広告代理店の伝通が、いったい自分に何の用だというのだろうか。

そこから時節の話題、とりわけ梅雨の暑さにビールが美味いやら、テキトーな雑談が続く。こういう一連の社交辞令が、宏樹は苦手だった。頼まれたってサラリーマンになんかなりたくない、と大学に在学していたときに両親と揉めたことを思い出した。
「太田さん、そろそろ本題にいきましょうか」
そんな宏樹の様子を察したのか、神鍋が言った。
「そうですね。ではヒロキンさん、どうぞ」
そう言うと、太田はＡ４の冊子で綴じられた企画書を出してきた。
「復活！世界驚異シリーズ・・・ファロ島大冒険・・・」
宏樹は表題を読み上げた。
「ヒロキンさん、ファロ島はご存知ですよね？」
太田が訊いてきた。男性にしては声のキーが高く、いかにも陽キャなおじさんといった風だ。宏樹は大学時代所属していた映像研究サークルの代表もこんなヤツだったな、などと考えていた。
「ええ。よく知ってます。それとこの、世界驚異シリーズも」
世界驚異シリーズ。昭和の代から続く番組で、平成になってからも特番時に高視聴率を叩き出していた番組だ。だが平成１２年、再びファロ島を取り上げようとして島に上陸した撮影クルーが、その際発生したマグニチュード８．４の大地震に巻き込まれて消息を絶ってしまうという事件が発生した。番組の放映と制作を担当していたＴＴＶは安全管理を問われる事態となり、そのことが影響したのか世界驚異シリーズは以降制作されていない。
何より、宏樹自身その経緯をよく知っている。
「今回ですね、２２年ぶりに番組を復活させる企画を立てたんです。昭和３７年に日本へやってきた巨大なる魔神、キングコングはいまどうしているのか。大地震で地形が変わったとされるファロ島はどうなったのか。これだけ文明が発展した世の中、文明から切り離された島の人々はどんな生活をしているのか・・・」
太田はキンキン声でマシンガンの如くまくし立てる。
「そこでですね、今回番組のスポンサーであるパシフィック製薬様と協議した結果、以前富士地下空洞の探検動画を上げてくださったヒロ

キンさんと神鍋さん、飯島さんに探検隊として白羽の矢が立ったんです」
　資料の中には、ご丁寧に宏樹が以前投稿した動画の切り抜き写真がいくつか綴じられている。
「みなさんの動画、とても楽しませていただいたんです」
　パシフィック製薬の二宮が口を出した。こちらは女性らしからぬ（といっては失礼か）低く太い声で、言葉に重みが感じられる。
「みなさんが、洞窟内ではしゃいだり、少し危険な目にあってもお互い励ましあったり、以前弊社で提供していた世界驚異シリーズの雰囲気そのままだったんです」
　二宮の言葉はまんざらではないが、宏樹はイマイチピンときていない。
「でも、世界驚異シリーズってテレビでやるんですよね？僕らじゃなくても良いんじゃ・・・」
「いえ、みなさんにこそお願いしたいんです」
　太田は力を込めた。
「ファロ島での様子は、みなさんのサイトに上げてくださって結構です。ＴＴＶではみなさんの動画と連動して、探検の舞台裏や収まりきれなかった部分を番組として放送します。そのうえで、テレビ番組視聴アプリＴｖｅｒにて同時配信も実施します。ＹｏｕＴｕｂｅｒのみなさんとテレビ局のコラボ。これは史上初ですよ！」
　力説する太田だったが、それでも宏樹は気乗りしない。いや、ファロ島には充分興味はあるのだが・・・。
「あのう、やりたくないワケじゃないんですけど」
　遠慮がちに声を上げる宏樹。
「ファロ島って、１２年前の大地震以来、島へ上陸した人がいないらしいですね。山が崩れて地形が変わりまくってるし、それに上陸しようとした船が何隻も消息不明になったり、空から上陸しようとしても墜落したとか、よくない話ばかりきくんですけど・・・」
「それは大丈夫です。現地のサポートは万全にしますし、不測の事態に備えて警備もつけますから」

「それに、飯島さんいないじゃないですか。彼、いま自分の企画でカナダ行ってますよ。富士風穴探検メンバー全員じゃないといけないんじゃないんですか？」
「飯島さんのスケジュールも押さえてます。来月半ばに帰国されるそうですから、そこから支度をして、みなさんをファロ島へ・・・」
　浮かない顔をする宏樹に、太田の勢いも削がれた。
「ヒロキンさん、わたしはぜひ、みなさんにファロ島へ行ってもらいたいんです」
　傍らの二宮が言った。
「みなさんの『三バカ、旅をする』シリーズ、わたし大好きなんです。あれを見て、いつかはみなさんとお仕事したいって、この会社に入ってから広報に志願したんです。必要なものは揃えますから、ぜひこの企画に参加してほしいんです」
「そう言ってくれると、嬉しいんですけどね・・・」
　煮え切らない宏樹に、二宮は消沈した。

　時間はまだあるし、改めてお話しましょうということになり、その場は御開きとなった。神鍋に誘われて宏樹は東京駅地下のビアホールに入り、喉を鳴らして豪快にジョッキの中身を流し込む神鍋を尻目に、オレンジジュースをすする。
「伝通さんも大変なんだよ、いま、テレビ番組も軒並み視聴率低下してるだろ。で、今後視聴率が回復する望みは薄い。ネットの勢いが増すばかりだからね。かといってネットだと、オレたちみたいに企業から直接案件持ち込まれたりして、広告代理店が介在する余地がない。そこで、太田さんは今回の企画練り上げたらしいんだ。まあ勢い任せな感じはするけど、オレはああいう人嫌いじゃないな」
　ビールをお代わりすると、枝豆をつまみながら神鍋はしゃべる。
「でもさ、テレビの人たちも広告代理店も、オレたちをバカにしてただろ」

「そこはそれ。手を組んだ方が良いところは組む方針だってよ。実際、エライ人たちにはそういう人多くて、今回の企画に難色示されたらしいけど、スポンサーとテレビ局がＯＫってことで通ったらしいよ」
宏樹と違い、神鍋は企業や代理店の担当者とよくコミュニケーションを取る。おそらく宏樹を呼ぶ前に、太田や二宮と幾度かやり取りをしたのだろう。
「ヒロちゃんさあ、ファロ島行こうよ。前、話してたろ。憧れの島だって」
お代わりのビールを早くも飲み干し、空のジョッキを店員に渡しながら神鍋は言った。
「うん・・・」
肯定とも否定とも取れるうんだった。
「聡くんもさ、乗り気だったよ。いつもみたいにファロ島まで、あー行ってこー行ってって止まんなくなってた」
飯島　聡。国内外の乗り物を乗りこなし、豪華なリゾートホテルや高級温泉旅館からオンボロ宿までさまざまな宿泊施設の滞在記を動画に上げて人気を博しているＹｏｕＴｕｂｅｒで、宏樹や神鍋の友人だ。最近は神鍋の稲作や飯島の海外渡航が忙しくてやっていないが、三人で組んだ動画シリーズ『三バカ、旅をする』はけっこうな視聴者数を誇るコンテンツだ。これまでは国内の観光地や普段あまり訪れない場所を探検、はたまたローカル列車やバスを乗り継いで２４時間どこまで行けるか実況などといった企画をこなしてきた。
なかでも２年前に投稿した『富士山麓新発見風穴探検シリーズ』は動画視聴数が１千万を上回ったばかりか、これまで存在しないとされていた富士宝永山麓から富士宮市郊外へ広がる巨大な地下空間発見という、地質学的にも大変貴重な存在を動画に収められたこともあり、文部科学省と静岡県から表彰を受けたほどだ。
「ヒロちゃん、オレはね、また三人でワイワイ楽しみながら探検したいんだよ。最近なかなか一緒になれなかったのもあるけど、ヒロちゃん、最近元気なさそうじゃん」

神鍋は日焼けした上、浴びるように飲んだビールの作用で赤みを帯びた顔を寄せてきた。
「オレも筋肉ネタオンリーな動画投稿ばっかでネタに困って、くじけそうになったことがある。そんなときに、最初は頼まれてイヤイヤ始めた稲刈りの手伝いが予想外に楽しくなって、動画云々抜きにしてもライフワークにしようかってくらいになってきてさ、いま充実してるんだ。気分転換・・・にしちゃ、ファロ島ってのはハードル高いかもしれないけれど、違う世界を見ることもきっとヒロちゃんのためになると思うよ」
いかにも体育会系らしい、優しさの押しつけが気になることもあるが、本質的には神鍋は心優しいナイスガイだ。
「ありがとう。でもさ・・・少し考えさせてよ」
「そうかあ・・ヒロちゃんさ、オレ今日は東京泊まるんだけど、良かったらヒロちゃんも・・・」
「ゴメン、編集途中の動画あるんだ。そろそろ行くよ」
そう言うと、残念そうな表情の神鍋を尻目に自身の飲み代（といってもオレンジジュース2杯だけ）を置き、宏樹は席を立った。
夕暮れが迫る東京は少し歩くだけで汗ばむ。
東海道新幹線のホームに上がり、指定席の列に並ぶと、宏樹は今日のやり取りを反芻した。そのまま新幹線の座席に座ると、ビル群の景色が流れ終えないうちに眠りについた。

ー産みの親より育ての親ー

「宏樹、こっちへおいで」

親戚の集まりのとき、修じいちゃんは決まって宏樹を膝の上に乗せ、かわいがってくれた。

「ほうら、宏樹ごらん。おじいちゃんの若いときだぞお」

だいぶ煤けてしまったが、アルバムに綴じられた写真には、修じいちゃんの若いころと思われる姿が写っている。勇ましくライフル銃を携え、浜辺でガッツポーズしている写真に、テレビ局の同僚だったという、少し気弱そうな男性と肩を組み、ピースサインをしている写真、そして、肌の黒い人たちに囲まれ、みんなでにこやかに笑顔を湛えている写真。

「おじいちゃんはなぁ、昔南の島に冒険へ行ったんだ」

宏樹が5歳になったときだった。いつものように昔の写真を見せ、いろいろお話をしてくれた。

テレビ局の仕事で南太平洋のソロモン群島・ファロ島へ向かい、巨大なる魔神を探し歩いたこと、大きなトカゲやタコと戦ったこと、ファロ島の住民と仲良くなったこと(宏樹みたいな小さな子にもタバコあげたんだ、とはにかんでいた)、そこから巨大なる魔神＝キングコングを日本まで運ぼうとしたら目覚めてしまい、日本に上陸してゴジラと対決したこと、妹がキングコングに捕まり、東京を闊歩して危機一髪だったこと、などなど。

修じいちゃんが嬉々として話してくれる内容は、幼稚園の先生がダミ声でおはなしをしてくれる絵本や昔話よりも楽しく、面白かった。

「なんで、このひとたちはチョコレートいろなの？」

小さいとき、宏樹は写真に写るファロ島の住人を指して訊いたことがある。

「みんなチョコレート大好きなんだ。宏樹もチョコレートいっぱい食

べたら、お肌チョコレートになるぞ」
そう軽口を叩き、親戚一同に窘められて苦笑いする修じいちゃん。
じいちゃん、と呼んでいるが、宏樹の祖父というわけではなく、父方の遠縁にあたる人だとわかったのは、宏樹がもう少し大きくなってからだった。
小学生になった宏樹は、割と近所に住んでいる修じいちゃんの家にしょっちゅう遊びに行った。両親とも共働きな上、あまり仲が良くないらしいことは、幼心にも察知できた。宏樹はそんな雰囲気に我慢できず、修じいちゃんをよく訪ねたのだ。
「ほら宏樹、このテレビ番組はな、昔じいちゃんたちが作ったものだぞぉ」
修じいちゃんが作ってくれた夕食を共にしているとき、特番で放映される『世界驚異シリーズ』が始まると、誇らしげに見せてくれた。そのときの回は南米の秘境アンデスを訪ね、古代文明の謎に迫るといった内容で、テレビに映し出される不思議な景色と謎を追求するナレーションに（そしていささか時代遅れな気もする、探検隊が身につけている『世界驚異シリーズ』の襷に）、宏樹は食い入るように夢中になった。
それからは、『世界驚異シリーズ』が放映されるときはきまって修じいちゃんの家を訪ね、一緒になって番組を観ることにした。アフリカの奥地や、中央アジアの砂漠地帯・・・いずれも修じいちゃんは自分が番組に関わっていたときの話を懐かしそうに交えながら、宏樹を膝に乗せた。あるとき、シベリアのツンドラを探検隊が訪れた回では「これはね、良太郎おじちゃんが作ったんだ」と興奮した様子で教えてくれた。
良太郎おじちゃんは修じいちゃんの息子さんで、やはりＴＴＶに入って番組制作を行っているらしい。なかなか忙しくて修じいちゃんの家に来れないようだが、時折宏樹と顔を合わせてはよく買い物に連れていってくれたり、奥さんの睦実おばちゃんと一緒に遊園地へ遊びに行ったりもしてくれた。
「おい、お前も仕事忙しいんだろうから、無理しちゃいけないぞ」

ある日、すっかり遊び疲れて修じいちゃんの家にお泊りするとき、向こうの部屋で修じいちゃんが良太郎おじちゃんに話をしているのが聴こえた。
「いいんだよ。オレも睦実も子ども好きだし。それに、自分たちの子育ての練習にもなるかと思って」
「・・・えっ!?」
修じいちゃんの驚き、嬉しそうな声がした。
「それに・・・」
良太郎おじちゃんが言い淀んだ。
「宏樹のところ、二人ともあの調子じゃあ・・・」
「うん・・・そうだな」
宏樹は、自分の父と母のことを話していると察した。二人は激しく言い争うか、まったく口をきかないかしかしない。そしてそれぞれが互いの仕事にばかり邁進し、宏樹が修じいちゃんの家へよく行くことは助かっているくらいにしか感じていない、宏樹の目にもそう映った。
それからしばらくして、宏樹が小学2年生になると、良太郎おじちゃんが赤ちゃんを連れてきた。
「ほら宏樹、おじちゃんたちの赤ちゃんだぞぉ」
「真佑、宏樹おにいちゃんだよ。仲良くしてね」
笑顔の赤ちゃんをあやす二人。修じいちゃんも目尻がものすごく下がっている。みんな嬉しそうで良いなと思いつつ、宏樹は少し寂しくなった。
宏樹が小学4年生になるころ、修じいちゃんの家に行く機会は減っていた。修じいちゃんは、孫娘の真佑ちゃんをしょっちゅう預かり、かわいがっていた。
なんだか、修じいちゃんの家へ行きづらくなってしまったのだ。宏樹の両親は相変わらずだ。学校へ行く前に母から５００円玉を渡され、学校の帰りに近所のコンビニでご飯を買う。家ではひとりゲームしながら、コンビニのご飯を食べる。
それでも、『世界驚異シリーズ』だけは大好きだった。地球には、ま

だまだ不思議がいっぱいあることを、宏樹に教えてくれた。
『次回、あの巨大なる魔神が眠る伝説の島、ファロ島へ！鋭意制作中』
そんな次回予告が流れたとき、宏樹は心躍った。修じいちゃんからよく聞かされていたファロ島が放送されるのだ。ひさしぶりに修じいちゃんの家へ遊びに行くと、修じいちゃんも楽しみにしている様子だった。
「宏樹、またうちにおいで。じいちゃんと一緒に見よう！そのときは、宏樹が好きなから揚げいっぱい作って待ってるからな」
弾けんばかりの笑顔で、修じいちゃんは言った。
修じいちゃんの笑顔を見たのは、それが最後だった。
あるとき、ファロ島を訪れた日本のテレビクルーが、ファロ島で発生した大地震に巻き込まれたというニュースが流れた。
いつものようにコンビニのご飯を食べていた宏樹は箸が止まり、心配になって修じいちゃんの家を訪ねた。
修じいちゃんは、泣いていた。
昔じいちゃんの仕事仲間だったという、古江というおじいちゃんが一生懸命慰めていた。
良太郎おじちゃんも睦実おばちゃんも、真佑ちゃんも戻ってこなかった。
それから、修じいちゃんは身体を壊し、元気になることがないまま宏樹が中学校へ上がる前、亡くなった。
ぼう、っと、修じいちゃんの姿が夢に出てくることがある。
いつも宏樹を暖かく迎えてくれた、あの笑顔のままだ。
「宏樹、大きくなったら冒険をしてごらん」
よく、修じいちゃんが話してくれた。
「そりゃあ、冒険をすると危ないこともある。もうこんな辛いことはイヤだって思うこともある。でもな宏樹、自分が知らない世界、行ったことのない世界に行くことは、とっても楽しいんだ。じいちゃんもファロ島を探検したときはすごく楽しかった。こういう生活をしている人たちがいて、普段こんなもの食べてるんだ、こんなことしてるんだ、って、驚き桃の木山椒の木だったよ」

「じいちゃん、僕もファロ島行ってみたい。行けるかな」
　幼い宏樹が、尋ねる。
「おう、行きなさい。行ってみるんだ。きっと楽しいぞ」
　修じいちゃんは膝の上に宏樹を乗せ、頭を撫でてくれる。
「宏樹、迷うときもある。苦しいときもある。そんなときは、いつもじいちゃんがついてるよ。じいちゃんだけじゃない、宏樹にだってお友達いるだろう。一緒に遊んでみると良いぞ。な」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『ご乗車、ありがとうございます。三河安城、三河安城駅でございます。どなた様も、御忘れ物のないよう・・・』
　ハッとして飛び起きると、窓の向こうに見慣れた看板が現れた。東海道新幹線・三河安城駅。宏樹が降りるべき駅だ。
『間もなく発車します』のアナウンスとほぼ同時に、宏樹は新幹線から勢いよく降りた。危うく乗り過ごしてしまうところだった。ちょうどドアが閉まり、新幹線は名古屋方面へとゆっくり動き出す。
　どうやら東京駅を出発してすぐ、眠りこけてしまったらしい。冷や汗と熱帯夜のジメっとした空気のせいか、宏樹の背中が汗ばんでいる。
　ひとまず安堵の息を漏らすと、宏樹はスマホを手にした。相手は3コールで電話に出てくれた。
「あ、鍋ちゃん。今日はいろいろありがとね。うん・・・そう、ファロ島行きたいんだ。うん、決めた・・・」

―好きこそ物の上手なれど、好きなことが仕事なヤツって何人いるんだろか??―

・8月1日　13：26　愛知県岡崎市　宏樹の家

「計画の見直し?」

数日前に撮影した、激辛ヤキソバを食べる動画の編集をしていたところ、ｚｏｏｍの向こうの神鍋からそう告げられた。

『ああ。ファロ島への渡航費用が予想以上にかかっちまうことがわかったらしい。明日、聡くんも帰国するようだし、急遽東京のパシフィック製薬で今後の方向性を打ち合わせることになったんだ。そこで、急にもうしわけないんだけど・・・』

「また、東京へ行けば良いんでしょ?」

『うん、悪いんだけど、ヒロちゃんまた来てくれないかな?オレも明日の朝イチで上京するからさ』

「・・・・わかったよ」

相変わらず元気のない宏樹に、少し心配そうな表情で神鍋はアクセスを下ろした。宏樹はかねてからのやる気スイッチがスリープ状態であることに加え、動画のためにがんばって食べた激辛ヤキソバの副作用でここ数日お腹の調子が良くないのだ。

まあ、飯島には久しぶりに会えることだし、ファロ島へ行けることでどうにかテンションは維持できたが、今後の方向性を打ち合わせるということは、場合によってはファロ島へ渡る計画そのものが白紙に戻りかねない。

ためにためたため息を漏らすと、ドリップさせておいたコーヒーに口をつける。負担がかかっている胃に優しくないのは承知している。ここ最近、こうして無理にでもカフェインを摂取しないとやる気が維持できないのだ。

とりあえずスマホで明日の新幹線を予約する。三河安城から乗車

するということで、宏樹が上京する場合きまってこだま号だ。
東京までそれなりの時間はかかるが、飯島がカナダ周遊の様子を続々とチャンネルにアップしている。それらを一気見していれば所要時間も気にはならないだろう。
翌日、宏樹は再度東海道新幹線に乗車し、東京を訪れた。盛夏真っただ中な上にヒートアイランド現象故か、熱い空気が宏樹の全身を包み込む。とてもじゃないが、この暑さで八丁堀まで歩くのはいまの宏樹にとっては自殺行為だ。なにせ、新幹線の中で3度もトイレに駆け込んだのだ。
「ヒロキン」
東京駅八重洲口で途方に暮れていたそんな宏樹の背後から、誰かが声をかけてきた。
「聡くん!」
宏樹の表情は一気にほころんだ。ＹｏｕＴｕｂｅｒ仲間で鉄道やバス、航空機などを利用した様子を収めた動画でソチラ系の人々に人気を博している、飯島　聡だった。
「久しぶりー!今日、帰国するってきいたけど」
「ああ。さっき羽田に着いてさ、航空会社のキャリーサービスに荷物を頼んで、身体だけこっち来たんだ」
この暑さだしタクシーにしようということになり、二人はタクシーに乗り込んだ。冷房は快適で、汗は見る間に引いて行った。
「でも、聡くんさっき帰国したのに大丈夫なの?」
「どうってことないよ。それにしてもタイミングがピタリだったよ。通常、北米から羽田に着くのは夕方～夜間が多い。今回はね、往路は羽田から直行便利用したけれど帰路は中国国際航空で北京乗り継ぎにしたんだ。中国の航空会社は評判イマイチだけど、ビジネスクラスはどんなものだろうかって体験したくてね。それに、フライト前のバンクーバーと乗り継ぎ地の北京で、スターアライアンスのビジネスラウンジはどれくらいサービスが充実しているか、動画上げる目的もあって・・・」
飯島は普段とても冷静なのだが、趣味である鉄道や航空機の件にな

ると人が変わったように饒舌になる。通常ならそんな手段で向かわないだろうという経路や中継地を駆使して旅を続けるという、ニッチな行動を好む。
「でもさ聡くん、いつも思うけどホント帰国したてだっていうのに元気だよね」
はっきりいって乗り継ぎの手段や土地に興味のない宏樹は、話を遮るようにしゃべりかけた。
「どんなに疲れてても、目的地に着くと元気出る性分なんだ。それにビジネスクラス利用だからね、エコノミーよりだいぶ疲労の度合いは軽減されるし、何より・・・商社時代と違って気軽だよ。帰国後の出社義務がないんだから」
飯島は大学を卒業後、１０年ほど某大手商社に勤務した経験を持つ。得意の語学を活かし海外出張が多く、かねてからの趣味であった乗り鉄、ソニア（乗り鉄の飛行機バージョン）として充分満たされる生活を送っていた。
だが商社の仕事そのものにはまるで魅力を感じなかった。本人いわく「世界を股にかけてグローバルに通用する仕事がしたかったのに、仕事内容が閉鎖的で日本の悪いところばかりデキるヤツが出世する」ものだったそうで、退職金を元手に株式や債券への投資を行いつつ、趣味の乗り鉄やソニア、時折投資を通じて得た金融の知識や実践方法をＹｏｕＴｕｂｅに投稿することで暮らしている。
「お、鍋ちゃんからＬＩＮＥだ・・・もう着いてるって。鍋ちゃんともしばらく会ってないな。相変わらず、筋肉隆々なの？」
知的な飯島と、絵にかいたような脳漿筋肉の神鍋。一見まるで釣り合わなさそうなのだが、なぜか二人はウマが合うところが多い。
「うん。田植えしながら筋肉ついたって喜んでたよ」
宏樹がそう言うと、飯島は満足そうに口を微笑ませた。ややあってタクシーは八丁堀のパシフィック製薬本社に到着し、二人は料金を支払ってビルに入った。
前回と同じ会議室へ通されると、二宮が出迎えてくれた。知識があるとはいえ飯島とは初対面で、名刺を渡し挨拶したところで苦虫を噛

み潰したような顔をした。
「あのう、ファロ島冒険計画が、見直し迫られてるってきいたんですけど・・・」
　宏樹が訊いた。
「ええ・・・ここへきて、予算不足が鮮明になりまして・・・」
　もうしわけなさそうな顔をすると、ともかく二人を中へ案内した。一足早く到着していた神鍋と、やはり渋面の太田が顔をつき合わせていた。
　改めて挨拶を終えると、太田がここへ至るまでの経緯を話し始めた。
「ファロ島への渡航を断られた?」
　宏樹が目を丸くした。渋面のまま太田は頷き、冷茶を口にふくんだ。
「いままでは、近隣の漁師や船便でファロ島へ渡ることができていたんです。ところが、近年はファロ島へ渡ろうとする現地民は皆無らしく、現地のコーディネーターにいくら働きかけても、色よい返事をもらえなかったんです」
「なぜ、ファロ島へ近寄ろうとしないんですか?」
　当然の疑問だろう、飯島が訊いた。
「実は・・・22年前の平成12年、ファロ島でマグニチュード8・4の大地震が起きたでしょう?そのせいで、島の地形が大きく変わってしまったらしいことはきいてたんですが・・・。実はそれ以来、島へ近寄ろうとした船が、みんな消息不明となったり、難破して遭難するようになったらしいんです」
　太田が苦々しくお茶を飲み干すと、二宮が気を利かせてお代わりを注いでくれた。
「なんだぁ。それなら、空から島へわたれば良いじゃないですか。ヘリコプターとかで、着陸できるんじゃないですか?」
　宏樹が訊くと、太田はかぶりを振った。
「それが・・・海だけでなく空から近寄ろうとしても、途中で通信が途絶えて遭難してしまう例が後を絶たないようなんです。現地のコー

ディネーターいわく、数年前には島の調査を理由にミクロネシア連邦軍がやはり海と空から接近を試みたそうなんです。ところが、軍をもってしても同じ結果だったらしく・・・。以来、現地の人々はファロ島には悪霊が棲みついている、という風説が広まって、誰も近寄ってくれないそうなんです」

宏樹たちは思わず顔を見合わせた。自分たちが渡ろうとしていた島が、それほどまで危険視されていたとは・・・。

「遭難の原因は、なんです?」

「あの海域は、貧困からギャングになった近隣の島民が海賊活動を行っていると耳にしたことがありますが、それが原因では・・・」

神鍋と飯島が続けて口にした。

「わからないんです。もし海賊だとしても、金品を奪うことが主眼で、抵抗さえしなければ船も船員も戻すはずなんですね。ところが、船ごと、船員ごと消息を絶つ例が多いそうで・・・」

「となると・・・」

飯島が考え込んだ。

「やはり、件の巨大なる魔神・・・キングコングによるもの、でしょうか」

「それはなんとも・・・。キングコングはそもそも島から出るのを嫌い、海へ入ることはしない、ということを聞いてるんです。第一・・・島の様子は現地に渡れないにしても、グーグルアースで確認が可能なんです。ところが、キングコングはもちろん、島民の姿も確認できないんです。昔の地図と照らし合わせても、地震によって地殻変動が大規模に起きたらしいことはうかがい知れたんです」

「・・で、島へ渡る手段は閉ざされた状態なんですか?費用の問題と、お聞きしましたが?」

しばし顎に手を当てていた飯島が訊いた。そういえばそうだ、と宏樹と神鍋は目で合図した。

「ええ。紆余曲折を経てですね、あの辺の海域で海上流通を仕切っている韓国企業へ打診してみたんです。ありがたいことに、ファロ島に拠点はないが、島への上陸を目的として船を出してくれることになっ

たんですが・・・その費用が、高額過ぎてですね」
「その海運業者から送られた見積書です。イレギュラーな依頼なのは、私どもも理解してるのですが・・・」
　二宮が見積書を出してきた。
「いち、じゅう、ひゃく、せん、まん・・・なーんだ、４７万円じゃないですか」
「鍋ちゃん、通貨単位を良く見るんだ。これは円じゃない、米ドルだ」
　すかさず、飯島が突っ込んだ。
「現在のレートだと、日本円で延べ５千万円になるんです」
　二宮が告げると、神鍋は「ごっ、ごっせん・・・・」と絶句していた。
「まあ、僕らの年収くらいかかるってワケだよ」
　別に悪気はないのだろうが、飯島の言葉に二宮も太田も口を結んだ。
「弊社では、当初の見積もりで予算を計上していました。今回、経費が大幅に膨れ上がったことで予算増額を要求しているんですが・・・取締役会案件になってしまった上、色よい返事をもらえそうにないんです・・・」
　二宮がもうしわけなさそうに言った。
「ＴＴＶと、もちろんウチも持ち出しを検討しましたが、とても気軽に支払える額じゃないもので・・・」
　すっかり気圧されて天を仰ぎっぱなしの神鍋に、せっかくファロ島へ渡れるとの期待が打ち砕かれ、お腹の調子も相まってうずくまりがちになる宏樹。ただひとり、飯島は熱心に見積書を凝視している。
「僕ら３名以外に、ＴＴＶから撮影スタッフ１２名。下請けの制作会社からスタッフ２５名に、警備担当１８名・・・。これ、人数多すぎませんか？」
　見積書とのにらめっこから、飯島が顔を上げた。
「最近のＹｏｕＴｕｂｅは、手軽な機材で良い映像が撮れる。音質も申し分のないものです。いかがでしょう、僕らの配信動画はもちろん、ＴＴＶでの放送に向けた映像からすべてひっくるめて、僕ら３名

だけで撮影を実施する、というのは」
飯島の提案に、太田はあんぐり口を開き、二宮は固まった。
「お、おい聡くん」
宏樹もあまりのことに、思わず口をはさむ。
「僕らが前に投稿した富士地下風穴のときだって、僕ら以外に撮影担当のクルー1名だけだったじゃないか。いくらテレビ局絡みの案件だったとしても、こんなに人員は必要としないでしょ。自分たちで完結できるんだから。これだけで、この追加費用の少なくとも半分は削減できる。問題は、船のチャーターのみでこれほど費用がかかることなんだが・・・イレギュラーな依頼である上、文明の力が及ばない地域での仕事だ。この辺の削減は見込めないとして、如何にこの費用を調達するか・・・」
飯島は目を閉じて考え始めた。1分もしないうちに目を開いた。
「クラウドファンディング活用しよう。目標は3千万円」
簡単に言いやがった!言葉にしなくても、太田の表情はそう物語っていた。
「ヒロキン、鍋ちゃん。明日にでもオレの方でクラウドファンディングの発起手続きするから、用意でき次第緊急でこの件を動画に上げよう。その中で、クラウドファンディングを実施する旨告知するんだ。」
「で、でも、でもだよ?3千万円て多すぎないか・・・?」
神鍋がきょどり気味に訊いてきた。
「こういうのは、目標より多めに設定するのがコツだ。無論、出資者への対価は手厚くするのだが・・・そうか、こうしよう。今回のファロ島探検限定で、メンバーシップ立ち上げよう。たとえば、ひとり３００円で限定動画を視聴できるとして、仮に登録者数の１０分の１・・・１０万人も登録してくれたら、それだけでこのコンテンツは3千万円の収入源になる。ここからＭＭＭＵＵに管理諸費用支払っても、概ね２千万以上の粗利は堅いな。うん、これはイケる」
ひとりでべらべらとまくし立てると、飯島は傍らの宏樹と神鍋の肩に手を伸ばしてきた。
「これだけの収益が見込めるんだ、今回、いままで以上の撮れ高目指し

て、がんばろう」
　ニヤリと笑いかける。呆気に取られながらも、宏樹と神鍋は頷いた。
「いやはや・・・噂にたがわぬ守銭奴・・・っああっ、失礼！収益化の神様っぷりですな」
　太田が口を覆って言った。飯島のオソロシさはここだった。動画を商品化し、如何にして収益を得ていくか・・・その辺りのアイデアを出すのと実行力に長けているのだ。これらを仲間のＹｏｕＴｕｂｅｒに提案し、そこから得ている企画料金は動画の広告料を上回るとのウワサもあるくらいだ。
「太田さん、みんな僕のことを守銭奴とか、金が好きなヤツ、と言いますが、それらは正しくありません。僕は金が好きなのではなく、金を産み出す仕組みを作ることが好きなんです」
　陰でささやかれる悪口も言われ慣れているのだろう、不敵な笑みを浮かべながら飯島は言った。
「削減すべきは削減し、資金調達することで最低限の収益は見込めるとして、むしろ警備には費用をかけた方が良いな。太田さん二宮さん、ここはしっかり手配お願いします。あと、ファロ島への移動手段は船として、そこへ至るまでは？おそらく、まずはオーストラリアかニュージーランドへ渡る必要があるように思えますが？」
「ええ。ええ。今回はオーストラリアに一旦渡る行程が良いかと思ってまして・・・」
「ならＪＡＬもＡＮＡも利用できる。いや、ＪＡＬがワンワールド加盟であることを鑑みて、ここはＪＡＬでシドニーへ渡るべきか・・・いや、ケアンズやブリズベン乗り継ぎも面白そうだな。んん??いや待てよ、そもそもカンタスならあの辺りを網の目のように網羅してる。ここはカンタスで行くべきか・・・ビジネスクラスの動画も上げられるし・・・」
　ひとりブツブツが止まらなくなった飯島に、誰もが思っていた。
「「「もう全部、お前ひとりで良いんじゃね??」」」

―1日のうち、朝食が一番大事。だからしっかり食べとけ―

・8月30日　東京都大田区　羽田空港第三ターミナル　ザ・ロイヤルパークホテル羽田

冷涼な部屋の空気と、皮膚に突き刺さる直射日光の熱さの強烈な温度差に、宏樹は目を覚ました。

部屋の時計は7：20を指している。ファロ島へ向かうべく、まずはオーストラリアのシドニーへ渡る必要がある。シドニー行きのフライトは22：30。本来ならフライト当日の移動で充分間に合うのだが、出発前に急遽会合が設けられることとなり、宏樹と神鍋は羽田に前泊することにしたのだ。

大きくあくびをすると、直射日光に加え飛行機の翼に反射する光で目が眩む。この部屋からは羽田空港の滑走路が良く見える。ズラリと並んだ飛行機群が、熱気で歪んで見える。

ぬるま湯、というより冷水に近いシャワーを浴び、宏樹は出発を前にしてこれまでのことを反芻していた。

飯島の言う通り、自身の動画で南太平洋・ファロ島探検の旅へ出かけること、それに際し費用がかさんだため、クラウドファンディングを実施することにしたという動画を上げたところ、大きな反響があった。

最近宏樹が運営している動画チャンネル『ヒロキンＴＶ』は、アンチ以外からもマンネリ化が囁かれ、登録者数の割に動画再生数が伸びないことが多かった。ところが今回は2日で１００万もの視聴再生数に達した。『危険すぎる』『動画のためとはいえ、ヤバくないか』『キングコングに握り潰されやしないか』など、否定的なコメントも多かったものの、3千万円を目標としていたクラウドファンディングはわずか4日で目標額を突破し、最終的に4千万円を上回った。宏樹だ

けでなく神鍋や飯島のチャンネルでも告知したこともあるが、達成率としては近年稀に見る成功、などとネットニュースに掲載された。
その資金でふっかけに近い船のチャーター料金は優に支払える上、警備にも潤沢に予算を費やすことができた上、飯島の希望だった羽田～シドニー間のビジネスクラス席の確保も予算面で困ることはなかった。
それからは旅支度に専念することを理由に、動画の投稿をしばらくお休みすると宣言した。ここのところ、使い古された企画の相乗りに飽き飽きしていたところだ。編集に時間を取られることもなく、引きこもりに近い生活を送っていた。
とはいえ、ファロ島への旅が希望に満ち溢れたものとは思えなかった。気分の沈降は思っていたより深刻らしく、羽田へ至るまでの足取りはどうにも重かったのだ。
どうやら危険が伴う旅らしい、という不安もあるが、飯島いわく『燃え尽き症候群』らしい。どのＹｏｕＴｕｂｅｒも一度は陥るもの、という風説は耳にする。
果たしてそんなものだろうか、宏樹は濡れた頭をバスタオルで拭くと、乱暴にタオルを浴槽に投げ入れた。
着替えると、スマホに通知があった。神鍋が朝食に誘ってくれたのだ。
これから行くよ、と返信すると、宏樹は部屋を出て2階にあるレストランを目指した。何事にも気が進まない昨今ではあるが、そんな宏樹を見かねて今回の企画に誘ってくれた神鍋の気持ちに応えないワケにもいかない。
「おーう、おはよう」
レストランへ入るなり、神鍋が手を挙げた。既に食事を摂っていた神鍋のテーブルには、米飯にパンケーキ、クロワッサンに三種のスープ、その他肉類や魚類、サラダが山盛りになっている。よくもまあ、朝からこんだけ食べられるモンだと呆れ、宏樹は神鍋の向かいに腰を下ろした。
「ヒロちゃんも、ここの白米食べなよ。ウチのコメに負けないうまさ

だよ」
　口いっぱい頬張りながら、神鍋は言った。
「いや、オレパンが良いな」
　そういって適当に料理を取ってくる。食への追求が乏しいのは、神鍋が摂った内容と比較しても明らかだった。そうこうしていると飯島もやってきて、宏樹と同じように神鍋の大食漢ぶりに目をパチクリさせていた。
　宏樹自身は興味がなかったのだが、飯島はコメにパン、スープやおかず類を丁寧にバランスよく皿に盛ってくる。彼なりのこだわりで、ジュースやコーヒーなどよりもビネガーやルイボス茶など、一風変わった飲料を好む。
「さっき、太田さんから連絡あったよ。唐津先生、予定より少し遅れて１０時過ぎに到着するらしい」
　三人で食卓を囲むと、トマトソースがけグリルチキンを放り込んだ神鍋が口を開いた。
「忙しい人なんだね、パリから戻るなりオレらと会合でしょ」
　スープを口に運びつつ、宏樹は言った。
「薬学の分野では、日本どころか世界的な権威だからね。そんな先生がオレたちに用事っていうのも妙な感じするよなぁ」
　チキンとサラダを交互にパクつく神鍋。
「パシフィック製薬のパシン錠。あれって、昔ファロ島で採取されたファロラクトンて赤い実から抽出した成分が使われてるんだろ。あのファロラクトンを特許取ったことで、パシフィック製薬はファイザーやモデルナに並ぶ世界的な製薬企業になったんだ」
「へえ、そうだったの」
　飯島の解説に、神鍋は目を丸くした。
「そうだよ。知っての通り、パシン錠の効き目は折り紙つきだし、他の薬剤やサプリメントにも応用してるしね。もし新たに株式投資を始める人がいるなら、オレは迷わずパシフィック製薬の株を勧めるよ。株価は好況不況に関係なく安定してる上、将来に渡っても持続性があるからな」

「へえ～！よし、オレももっと動画で稼いで株始めようかな」
「う～ん、鍋ちゃんはどちらかと言うと株式投資に向いてないよ。」
「なんでだよ～！」
　そんな神鍋と飯島のやり取りを横目に、宏樹は黙々と食事を済ませる。
「で、今回オレたちファロ島へ行くから、またファロラクトンの実を取ってこいっていうのかな」
　神鍋は春巻きをバリバリ頬張りながら言った。
「アレはもうパシフィック製薬が自社で培養できてるから、その必要はないと思う。むしろ、別な目的があるのかもね・・・」
　フォークを置き、椅子にもたれかかる飯島。宏樹は二人の会話に混ざらず、修じいちゃんが赤い実（ファロラクトンの名前は知らなかった）をキングコングに呑ませるとよく眠る、という話を思い出していた。

　ホテルの会議室を貸切り、太田と二宮が帰国したての唐津を案内してきた頃には11時近くなっていた。神鍋と飯島は相変わらずいろいろしゃべり尽くしており、宏樹は自身の動画についたコメントにハートマークをつける作業を黙々とこなしていた。
「お待たせしてもうしわけない、唐津です」
　入るなり、人の良さそうな壮年の男性が頭を下げてきた。釣られるように神鍋は立ち上がり、頭を下げる。飯島は目を合わせ、微笑んで軽く会釈する。宏樹はスマホの見過ぎでショボショボした目のまま、首だけ縦に振った。
　唐津の荷物を持った太田と二宮が入室し、続いてホテルのスタッフが全員に紅茶を淹れた。
「本来は今月いっぱい、学会のついでにパリの観光でも楽しんで来ようとしてたんだけどねぇ、こちらの、二宮さんからみなさんがファロ島へ向かわれるときいたものですから、予定を切り上げて帰国したん

です。まあ、到着が遅くなってしまったのは大変もうしわけない」
唐津の言葉と同時に、二宮が資料を宏樹たちに配布した。
「ファロラクトン・・・なんだこりゃ？」
神鍋が隣の飯島に訊いた。
「ε（イプシロン）・・・ファロラクトンε」
難なく答える飯島。
「口笛じゃねーか」
そう言って一人笑う神鍋。
「６０年前だよ。私の大先輩に当たる、牧岡博士という薬学の権威がいてね」
「知ってます。ファロラクトンを発見、精製し培養に成功した、日本薬学会の神様とまで言われた学者でしたね」
なんでも知ってるな、という視線を飯島に向けて、唐津は頷いた。
「昔、この牧岡博士がファロ島で赤い実・・・ファロラクトンを発見したのだが、当時の論文には、さらなる別な実の存在が複数書かれていたんだ。とりわけ、黄色い実であるファロラクトンεについても、サンプルが希少で有効性などが確立できなかった、と書かれていてね」
「赤の次は黄色・・・これで青い実があれば、信号機じゃないですか」
呑気にのたまう神鍋に、宏樹と飯島は両方から肘でつついた。
「うん、まあ、その後も牧岡博士は世界驚異シリーズの取材に同行してファロ島を訪れ、ファロラクトンεの採取に励んだのだが、ファロラクトンと違って希少性が高いらしくてね。とうとう新たに入手できぬまま、昭和４５年に鬼籍に入られたんだよ。以降、なかなかファロ島への薬学的調査が行われなくてね。平成１５年頃かな、再度調査を計画して私もファロ島へ渡るはずだったんだが、ファロ島の海域で海難事故が多発したとかで、中止になってしまってね」
「・・・ということは、僕らにその、ファロラクトンεを取ってきてほしいってことですか？」
神鍋が訊いた。
「そう。本当は私も同行したいのだが、来週は名古屋で世界的な薬学のシンポジウムがあってね、どうしても一緒に行けないのだよ。そこ

でみなさんに、どうか代わって調査をお願いしたいと思って」
「あの、僕らは薬学の知識がありません。島のどこに成っているのか、採取した場合、日本までの運搬と保管は条件があるのか、ご教授いただきたいのですが・・・。それに、往復ともオーストラリアで乗り継ぎます。ご存知のように、かの国は動植物検疫が世界一厳格です。仮に採取できたとしても、現地で没収されることも懸念されますよ」
　さすがは飯島、と、宏樹も神鍋も目を見開いた。そんなことは想像も及ばなかった。
「その点は大丈夫だ。文科省と外務省に、このεを持ち帰る場合に備えたオーストラリア検疫局向けの検疫許可伺いを発行してもらう。これがその文書だ。日本政府のお墨付きだ、問題なく通過できるはずだよ」
　とは言うが、あまりにも荷が重い宿題を背負わされた気もする。3人のテンションが萎えたことを察したか、唐津は前のめりに身体を向けてきた。
「ま、まあ、もし発見できなければそれでも良い。君たちに対して何ら不利益はないし、探検の主眼に置かなくて良いから。あくまで、副次的なものだと理解してもらってかまわない」
　そうは言われたものの・・・。
【動画内に、ファロラクトンε関連を掲載しないこと】
【動画内では、ファロラクトンεについての言及は一切しないこと】
　等など、厳格な条件が資料の最後に書かれてある。
　付き合いが深いから、そして出発直前とはいえ、神鍋は見る間にテンションが降下していき、話を持ち掛けてきたことを後悔し始めたのが表情から読み取れた。
「・・・できる限り、やらせていただきます」
　飯島はそう答えるのが精いっぱい、宏樹に至っては唐津に辛らつな視線を向ける。
　どうにか頼みます、と太田は手を合わせ、言葉にせず目で訴えかけてきた。

―眠れないときは羊を数えると良いらしいけど、途中で数わかんなくなってイチから数えなおすと結局眠れない―

・8月30日　19：40　東京都大田区　羽田空港第三ターミナル

「それにしても、こんな時間に飛行機乗って外国行くなんて、なんかワクワクするよね」
　ビジネスクラスの搭乗手続きを終え、3人そろったときに神鍋が話しかけてきた。夜の空港ということだが、人は多い上に一日が終わる頃に漂う、蛍の光が流れそうな雰囲気はない。
「羽田だとオセアニアへ飛ぶ便は、たいていこの時間帯なんだよ。こちらを夜出発すると、現地には早朝に到着できて時間を有効に使えるのが良い。それにオセアニアは日本と時間帯がほぼ同じだから、時差ボケが生じることもない。旅行のしやすさでいえばダントツなんだ」
　既に飯島はｉＰｈｏｎｅを片手に撮影を始めている。出発の様子を自身の動画に上げることも多いため、彼にとって仕事はもう始まっているのだ。
「へえ～！実はさ、オレ海外旅行初めてなんだよね。メッチャ楽しみになってきた」
　出発前にビールを嗜んだこともあったが、唐津教授からの宿題で意気消沈気味な雰囲気を打ち消すべく努めている部分もあるのだろう、神鍋は終始楽しそうだ。
「すげぇー！夜なのにあんないっぱい飛行機並んでるよオイ」
　保安検査場のすきまからわずかに見える滑走路に、神鍋は目を輝かせている。この時間の羽田空港の様子をリポートするのに忙しい飯島と、やはり浮かない顔が晴れない宏樹。そんな宏樹に気を遣い、二宮がいろいろ話しかけてきてくれる。

「ヒロキンさんは、この様子を動画撮ったりしないんですか?」
「う～ん、聡くんが撮影してるし、オレはまあ、今はいっかなって・・・」
　話している傍ら、テンションが上がった神鍋もｉＰｈｏｎｅで空港の様子を映し始めた。
「よぉーし!この様子ｓｈｏｒｔで上げよう!」
　などとはしゃいでいる。最年長なのに何やってんだよ・・・そんな醒めた視線を送る宏樹。
「ヒロキンさん、いろいろお願いごとしちゃいましたけど、パシフィック製薬を代表して・・・あと、みなさんのファンを代表して、私が一番応援してますから」
「ははは・・・ありがとうございます」
　乾いた笑いは、気持ちがこもっていないと二宮に伝わったようだ。愛想笑いこそ返してくれたが、お互いぎこちない雰囲気が漂う。
「２人とも、そろそろ行こう」
　テンションが対照的な宏樹と神鍋に、飯島が声をかける。フライトは２２：２０なのだが、今回ビジネスクラス利用であるため、ラウンジの様子をリポートしたいという飯島の希望もあり、早めに出国手続きをすることにした。
　ファロ島探検の旅は、乗り継ぎ地であるオーストラリアにおける所要時間を含めて7日間取っている。だが現地の事情や天候悪化等の事情を加味し、ビジネスクラスでチケットはオープンとした。
「じゃあ、行って参ります」
　神鍋が挨拶すると、見送りに来ている二宮と太田も頭を下げる。
「おお～い、鍋ちゃーん!」
　ふと、遠くから声がした。
「鍋ちゃーん!間に合ったぁ!」
　少し一張羅な格好をしたじいさんばあさんたちがやってきた。
「おお!小林さんに剣持さん、内海さんらも!」
　神鍋の顔が一気に綻んだ。
【いってらっしゃい!気つけて戻らんせ　聖篭の星、鍋ちゃん】
　まるで出兵前の兵士を見送るかのごとく、横断幕を掲げる老人た

ち。どうやら神鍋と一緒に稲作に励んでいる地元の農家さんたちのようだった。
「鍋ちゃん、あんた身体に気ぃつけなぁせよ！」
「怪我なんかしたら、ばあちゃん泣いちまうがーてよ！」
「おら鍋ちゃん、ちゃんと稲刈りまでには戻ってくるんろ!?」
　じいさんばあさんらに囲まれ、神鍋は少し涙目になりながら「大丈夫！南の島で元気もらって帰ってくるすけよ～！」とみんなと握手している。
「なんか政治家みたい」
　おかしそうにはにかむ二宮がつぶやいた。
　保安検査場前で別れを惜しむ神鍋。ふいに宏樹は、飯島の姿も見えないことに気が付いた。
　飯島は少し離れたところで、スーツ姿の男女に並ばれ、いろいろ話をされていた。
「飯島さん、どうかお気をつけて」
「次回旅立たれる際には、またのご利用をお待ちしております」
　どうやら、ＪＡＬ、ＡＮＡを筆頭とした航空会社の職員が見送りにきてくれたらしかった。交通系ＹｏｕＴｕｂｅｒとして飯島のリポート能力は業界でも定評があるらしく、現役・退役した航空会社スタッフが動画に登場することもある。
　それぞれ見送りに来てくれる人々がいる中、宏樹は気まずそうな表情の二宮と太田に気が付いた。
「ああ、じゃあ、僕はこれで」
　適当に頭を下げ、先に保安検査場を通過することにした。
　ファロ島へ冒険の旅に出る、という告知動画を出したところ、たしかにファンからのリプライはあった。
『ヒロキン気を付けて！』
『空港に見送りいきます！』
　そんな声が多数だったが、実際はこれが現実だった。宏樹を見送ってくれたのは太田と二宮くらいだった。実の親も、来なかった。いや実の親は別に良いのだが・・・。

それから時は過ぎ、フライトの時間を迎えた。ビジネスクラスラウンジの様子をまとめながらワインを愉しむ飯島に、おばあちゃんたちからもらったおむすびを頬張る神鍋。宏樹は動画のコメント返信で時間を費やした。

『誰も見送りにきてくれなかったよw』

自虐的にＴｗｉｔｔｅｒへ投稿したが、その件には触れず、『気をつけて』『キングコングによろしく』『飛んで火にいる夏の虫』←アンチといった当たり障りないコメントしかつかなかった。

今回は飯島の推薦でカンタス航空という航空会社を利用することになった。オーストラリア籍の航空会社で、オセアニア各地に便があるため、乗り継ぎの利便性を考慮した結果らしい。サービスも日系航空会社に引けをとらない、と太鼓判も押している。

はじめてのビジネスクラスに神鍋は興奮しきりで、離陸後早速ビールを注文しまくっている。おばあちゃんたちからおむすびや漬物を大量にもらったらしく、ラウンジであれほど食べたにも関わらず飽くことなくおむすびをパクつきまくっている。

神鍋とは若干離れているが、飯島とは通路をはさんで隣りあわせだ。宏樹はアテもなくスマホを手繰り、知り合いのＹｏｕＴｕｂｅｒである高畑敦也が上げた最新の動画にたどり着いた。

『はいどうも。日本時間でこんばんは。ドバイ時間でも、まあこんばんは。いやこんにちは。高畑ＵＮＩＶＥＲＳＩＴＹです。本日はですね、先日国会でも議論が紛糾した、日本の核武装について。先刻の北朝鮮による軍事行動以降、日本国内でも抑止力として核武装を議論すべき、という声が高まってますね。まあ、マスコミも国会も議論すらタブー視するものだから、高まる声を掬い上げられないんですけども・・・。これはね、僕の私見です。日本はね、核武装をすべきです。断言します、核武装、しましょう。日本の周辺情勢に目を光らせてみましょうか。ご存知のように北朝鮮。依然軍事的脅威ですね。中国もです。もちろん中国も。これらはいずれもですね、核保有国です。

核保有国に対抗するには？核しかありませんよね。ですけど、日本の場合他国への牽制以外にも事由があります。それが、６０年前に日本に上陸し、東日本を縦断した怪獣・ゴジラです。キングコングとの戦いで相模湾へ沈んで以降、どこにも現れていません。ですが、ゴジラが死んだという確証もない。そして、みなさんご存知ですかね、城南大学の重沢博士。ゴジラには、帰巣本能がある、と論文を発表しています。もしどこかにゴジラが存在していた場合、帰巣本能に従って戻ってくる場所はどこか？言わずもがな、日本ですよね。で、６０年前に比べて自衛隊の装備はかなり進化しました。そのうえ、ゴジラは電気に弱いとされたことを前提に、自衛隊内でも再度ゴジラが日本へ上陸した場合を想定し、高電圧による撃退計画が練られていることはかねてより語られています。ですが、もしもその作戦でゴジラを退治できなかったら？ゴジラを確実に抹殺するには？そのときこそ、日本が保有する核兵器を使用すべきなんです。核兵器保有に関して、慎重論や反対論もありますね。しかしこれらは・・・』

イヤホンで視聴していたところ、隣席の飯島に腕を軽く叩かれた。宏樹はイヤホンを外すと、飯島に向き直った。

「高畑くんの動画、好きなの？」

供されたワインを口にしながら、飯島は訊いてきた。

「うん。いろいろ勉強になるし」

酒が飲めない宏樹は、アイスコーヒーを手にしている。

「そうだな。勉強になることは間違いないだろうけど・・・オレは高畑くん、嫌いだな」

飯島は忖度ということを知らない。はっきり告げられ、宏樹はムッとした。

「語る内容は理解できる。でもそれらは、他の誰かが語っている内容の焼き直しなんだ。彼じゃなくても聴ける内容ばかり。口さがなく言うなら、パクリだよ。だが彼の場合若年層への知名度は抜群だし、いまだテレビや論壇しか知らない論客よりかは波及力がある。自分の頭で考えてるワケじゃないところは鼻につくけど、将来的に彼の動画に影響を受けた若者というのは大勢出てくるだろうね」

宏樹はひと言モノ申したくなったが、言葉をひっこめた。自分の頭で考えて動画を作っていない、パクリ、という部分においては、自身への藪蛇となりかねなかった。

「まあ、新聞やラジオで議論されてたことがテレビに登場した頃は、同じようにラジオで誰かが語ったことをさも自分の意見としたごとくしたり顔で話す論客が多くて、当時の若者は思想的な影響を大いに受けたというし、時代は繰り返すんだろうね」

ワインのお代わりを頼み、飯島は言った。向こうではガツガツおむすびを頬張り、もう2桁目のビールをお代わりしてキャビンアテンダントを呆れ混じりの笑顔にしている神鍋がいる。

「それはともかくとして・・・ヒロキン、この動画さっきチラ見して気になったんだけどさ、ゴジラってどうなったと思う?」

そう飯島が訊いてきた。

ゴジラ・・・宏樹はもちろん、飯島も神鍋も教科書でしか習っていないのだが、昭和２９年とその翌年、さらには昭和３７年に三度も日本へ上陸し、甚大な被害を与えた大怪獣。あるいは、核実験の申し子、人類の負の遺産・・・さすがに最後に現れてから６０年も経過したいまとなっては、そのように語られるのみだ。

宏樹はゴジラの様子を、修じいちゃんからよく聞かされていた。白熱光、あるいは放射能火焔などと呼ばれる、口から吐く青白い息。それが周囲にばらまかれると、どんなに堅牢な建物でも瞬時に燃え上がり、辺り一面焼け野原になってしまう。あるいは、自分と同じ大怪獣が存在していると知るや、獰猛な闘争心剥き出しに襲い掛かって叩き伏せ、自慢の放射能火焔で焼き尽くしてしまう・・・。

そんなゴジラも、偶然帯電能力を得たキングコングと富士山麓から御殿場にかけて激しく争った上、熱海の海へ没して以降、その行方が杳として知れなかった。キングコングは重傷を負いながらファロ島へ帰ったが、ゴジラはまったく姿を見せなかったことで、キングコングに敗れ死亡した、あるいは再起不能となった等と噂されていた。

もちろん生存説もあった。とりわけ平成１１年～１２年頃、フィリピン沖やグアム沖で『海の底に巨大な影が見えた』『急に波が強くな

り、転覆した船から命からがら逃げだしたとき、海上に大きな背鰭らしきものが見えた』といった目撃情報が相次いだ。それもそのときだけ。果たしてそれはゴジラだったのかどうか、誰にもわからなかった。
「そうだなあ・・・オレはね、オレはだよ?あんなに生命力旺盛で凶暴な生物がここまで出てこないってことは、もう死んだんじゃないかって思うけど?」
「そうだよな・・・そう考えるのが自然だよな。ねえヒロキン、ゴジラの伝説って、きいたことあるかい?」
「なにそれ?」
「昭和２９年、ゴジラが初めて人類の前に姿を現す前だよ。小笠原諸島・大戸島にはこんな伝説があるらしいんだ。昔から、島の近海には大きな怪物がいて、ひとたび暴れ出すと周囲の魚を食い尽くし、海を荒らして陸にも上がり、人をも襲う。そこで、若い娘を生贄として海へ流すことで、怪物の怒りを鎮めていた・・・大戸島の伝承らしいよ」
「へッ、そんな。日本昔話の世界じゃないか」
「そう、ただの昔話かもしれない。でもさ、この話の真贋はともかくとして、ゴジラは海を荒らすってところ、気にならないか?事実、昭和３０年と３７年の出現時には、ゴジラが潜航することで大波が発生して、多くの船が遭難したようだ。そこで、だよ。もしも、ゴジラがまだ生存していて、それもファロ島近海に潜んでいるとすれば?」
「・・・聡くんは、ファロ島の海難事故はゴジラのせいだって言いたいの?」
「仮説だよ。あくまで。自分で言っといてアレだけど、もしゴジラが原因として、ファロ島には空からも近寄れないって部分を説明しきれない。ただ、オレにはどうにも、ファロ島近海の不穏な状況にはゴジラ・・・とは言わずとも、何か大きな生物が絡んでいるんじゃないかって気がしてさ」
「・・・」
　今回の探検だが、この後オーストラリアで現地の警備会社スタッフと合流の後、ファロ島があるミクロネシアへ航空機で向かい、そちら

で韓国企業の輸送船へ乗り込んでファロ島を目指すこととなっている。だがもしも、島へ接近した時点で少しでも危険を感じた場合（具体的には、気候急変や海が荒れだした等）、即刻上陸を中止して帰還することになっている。

もしも、飯島の言うようにファロ島近海にゴジラが潜んでいて、船が襲われたとしたら・・・。

「ごめん、変なこと話したな。ヒロキン、この先日本と時差はほとんど変わらない。休んでおこう」

残ったワインを含むと、不安そうな表情の宏樹を安心させるように腕に手を置く飯島。ちょうどビジネスクラスの照明も薄暗くなり、睡眠をとるのに打ってつけの雰囲気となった。飯島を真似て席をフラットに倒し、ブランケットを身にかける宏樹。

翌朝、明るくなる頃に宏樹たちを乗せたカンタス航空機はシドニーへ到着した。重過ぎる身体に鞭打って、席を立つビジネスクラスの人々。

「いやー、ビールも食事も上手くて睡眠もしっかりとれた！ビジネスクラス最高だよ！」

ひとり元気な神鍋は、機を降りて合流するなり明るく元気だ。

「あれ、ヒロキンも聡くんも寝不足？なんだぁ、せっかく環境良好だったのにもったいないなぁ」

すっかり目の下にクマを作ってしまった宏樹と飯島に、飛びぬけた笑顔でぬけぬけ話す神鍋。

（寝不足は、あんたのせいだよ！）

宏樹と飯島、そして神鍋以外すべてのビジネスクラス利用者が心の中で怨嗟の声を叫んだ。

アルコールの作用も、ビジネスクラスシートに漂うアロマの香りも、そして自然と睡眠へ誘う夜の時間帯の睡魔すべてを覆す、神鍋の壮絶ないびきが原因だったのだ。

―会議そのものより、その後の懇親会の方がタメになる話が多い―

一方その頃、日本・東京。

日本時間で今朝９時を回る頃、ファロ島探検へ出かけている飯島から『これからミクロネシアのコロニア行きの便へ搭乗する。定刻通りに行けば日本時間で１２時過ぎにはファロ島へ向かうチャーター船に乗船できる』と報告のメールがあった。

メールをサラッと確認すると、太田は出社する間もなく朝から赤坂のホテルにて、今日開催されるシンポジウムとその後の昼食パーティーの最終確認に追われていた。

環境省と文部科学省が主宰する、国内外の希少生物に関するシンポジウムということもあり、日本はもちろん、世界各国から生物学の権威や行政関係者が出席すべく昨日から日本入りしていた（飯島たちの見送りが羽田空港というのも、迎え入れの立場からして助かった）。

主宰は霞が関なのだが、会議の広報やプレス対応、会議やパーティーの会場運営はすべて太田が勤めている伝通が担っている。ここ二週間ほどは、ファロ島探検の手配も重なりまったく帰宅できない日が続いていた（お盆休みも関係なく、妻にはしばらく口をきいてもらっていない）。

折からの残暑もあってだいぶバテ気味の中当日の現場を仕切っていたが、午前９時からの会議はつつがなく終了。いまはこうして１２時からの立食パーティーに移ることができた。今回の主眼は午前中の会議のみ、ということもあり、国外の出席者は早ければ今日の夕方には日本を発つ。そのため昼間からビールやワイン、シャンパンが振舞われていた。

無論、太田たち広告代理店はパーティーそのものが終わるまで飲酒

をするワケにはいかない。午後3時までのパーティーが終われば、そのまま後始末をして隣の小宴会場でスタッフたちの打ち上げをすることになっており、早いとこその時間にならないものか、作り笑顔の下でそればかり考えていた。

文科省の口うるさい役人が去った後、辟易気味にノンアルビールを口にしていたところ、「やあ、太田さん」と声をかけられた。

「おお、重沢先生」

太田はグラスを置き、丁寧に会釈した。重沢　正明。城南大学の生物工学部教授であり、国内でも指折りの生物学における大家だ。何より、昭和２９年当時からゴジラを研究し、昭和３７年のゴジラとキングコング上陸の際には2頭の撃退作戦に有効なアドバイスを行った、重沢正介博士の息子である。

父の後を継ぐように生物学の権威となってから、世界各地で進められているゴジラやキングコングといった巨大生物の研究においても存在感を示している。太田とは大学の学祭や今回のような学会を通じて、顔見知りだった。

「いつもありがとうございます。おかげさまで、今回の会議も上手く進みました」

本当は酒を勧めるところなのだが、太田の事情を察しノンアルビールを持ってきてくれるあたり、いつもながらスマートだ。

「いやはや、恐れ入ります。あとは、早いところ終わらせて私どももビールを一気したいところでして」

太田も重沢には遠慮せず、言いたいことを言う間柄だ。

「ご苦労様です。何でしたら、この場でもご一緒したいところですが」

「いえいえ、広告代理店なんて威張っているように見えますが、実際はこういう場では小間遣いでして、なかなか」

苦笑しながら、太田は重沢の盃に日本酒を注ぐ。

「それにしても、今日も話題になりましたな。ゴジラのこと」

そのまま話していたら、代理店勤務の愚痴しか出てこなくなりそうだ。太田は話題を変えることにした。

「ええ。昨今の国際情勢がそうさせてるのでしょうかね。今日の会議

では質問が2件でしたが、このパーティーでは両手あっても足りないくらい尋ねられました。ゴジラには、核兵器は有効なのか、と」
　緊迫する朝鮮半島情勢を受け、連日北朝鮮が核兵器を使用した場合の話は毎日のニュースを賑わせている。その中で、核実験を機に出現し砲弾をも弾くゴジラには核兵器が有効なのか、皆気になるようだった。
「すみません実は、わたしちょうどそのとき電話かかってきてまして。先生は何とお答えしたんですか？」
「ははは、いつもの定型文ですよ。ゴジラに核兵器が有効か否か、実際に出現して使用するより検証のしようがない。ただ、一度でも核兵器を使用してしまえば、今後は核兵器使用がよりカジュアルに議論されてしまう。そのことが国家間、果ては人類の為になるのか、よく考えましょう、とね」
「ほう、先生らしいですなぁ。素晴らしいです」
「いやいや、実際は私もわからないので、ヒューマニズムと世界平和を謳って煙に巻いたに過ぎません」
「しかし、本当ゴジラはいまどこにいるのでしょうか。俗説通り、熱海の底で死んでいるんでしょうかね？」
「情けない話ですが、ゴジラはいまどこで何をしているのか、実際に出現しない限りわからないのです。たしかに、ゴジラあるいはそれに類似した巨大生物が存在、または移動したとされる状況証拠はいくつかありますけれど。そうそう、そういえば、パシフィック製薬さんは２０年以上ぶりにキングコングの捜索をするべく、探検隊を結成されたそうですね」
「ええ。世界驚異シリーズ、ですね。２２年振りの復活となりまして」
「それも、ＹｏｕＴｕｂｅチャンネルとアプリでのネット配信も連動させるとか」
「そうなんです。大きな声では言えないですが、いまはテレビだけでは広告料も視聴者数も限界がありますから。新しい手を打っていきませんと」
「どこも大変ですね。いえ気になったのですが、ゴジラがもし生存し

ている場合、存在する可能性のある場所が２つある、と考えられるんです」
　重沢の言葉に、太田は思わず周囲を気にした。うかつにマスコミへ流れた場合、明日のトップニュースになりかねない話題だったからだ。
「ひとつは、ここ日本です。動物には帰巣本能といって、産まれた場所へ還ろうとする本能があります。過去３回に及ぶ日本上陸の結果からして、これはゴジラといえど例外はないと考えられています。もうひとつ、ゴジラは苛烈ともいえる闘争本能を持っています。過去、自身と同程度の大きさを持つアンギラスやキングコングと惹かれあうようにせめぎあい、争ったという結果から判断できます。その闘争本能に従った場合、キングコングが棲むファロ島を目指しても不思議ではないのです」
　幸い、周りはうまい具合に酒がすすんで、盛り上がっている参加者ばかりだ。重沢と太田の会話に聞き耳を立てるようなことはなさそうだ。それにしたって、と、太田は話を聴きながら周囲をチラチラ窺うのを忘れなかった。
「まあ、平成１２年の大地震以降、キングコングの生存も確認できないようですから、ふたつ目の仮説についてはより議論が必要です。地震によって、大規模な地殻変動が認められたようですからね。探検隊にも、どうか無事に戻ってきてほしいものです」
「そ、それについては。ミクロネシア近海の海運を担っている韓国企業のバックアップもありますし、オーストラリアからは評判の良い警備会社を警護に充てることにしてありますから」
　実はここ数週間、似たような返答をテンプレートでしていた。ファロ島探検のためにＹｏｕＴｕｂｅｒが旅立ったとあり、スポンサーであるパシフィック製薬と代理店の伝通には批判も少なくなかったのだ。
「動画のためなら何でもする。それがお仕事なのでしょうけれど、無理だけはしてほしくないものです」
　言いながら、重沢は視線を逸らせた。気まずそうに周囲に目を這わ

せる太田だったが、ちょうど出席者が数名、会場を出るところだった。
「あれ、亀田総監、お帰りのようですね」
陸上自衛隊の礼服に身を包んだ屈強な男性が数人、会場を後にしようとしていた。亀田というのは陸上自衛隊陸将であり、東部方面の総監を務めている。
「普通、生物学の学会には自衛隊が参加することはないんでしょうなあ」
太田がぼやいた。
「そう、普通はね。今回のような会議でしたら、自衛隊や外国の軍人が出席することは珍しくありません。まあ、意気揚々とパーティーに出席なさる亀田さんのような方もいらっしゃるが・・・」
「ああ、只山さん、ですか。中部方面総監の」
「ええ。あのお二方、いまだ遺恨があるようだ」
「・・・ここだけの話にしてくださいよ。やはり、それぞれがゴジラ迎撃作戦案を作った結果、亀田さんの案が採用されたことが尾を引いているようですね。亀田さん自身はともかく、只山さんは面白く思ってないようでして・・・」
「自衛隊の力関係はよくわからないが、お二方は同期で同格らしいですね。譲れない考えになるのも理解できます。何より、作戦立案の原案を作成した身としては、いささか責任を感じる部分もありますな」
昭和３７年以降、日本政府並びに自衛隊では幾度も再度のゴジラ日本上陸に備えて対策を練ってきた。防衛力や技術力の向上、時代背景が変わるごとにアップデートされ続けてきたのだ。
その中でも、重沢が父の代から打ち立てていた高出力電圧によるゴジラ無力化作戦は、過去１００万ボルトを以てしてゴジラ首都侵攻を防いだ実績もあり、ゴジラに対し極めて有効な作戦とされている。
その重沢案を基に、２年前当時防衛省内にて要職にあった亀田と只山が対ゴジラ撃退作戦を立案した。
亀田が考案したものは、昭和３７年にゴジラへ実施した落とし穴作戦を発展させたものだった。当時は落とし穴へゴジラを誘導し、穴に踏み込んだと同時にガス爆弾を炸裂させてゴジラを窒息死させる目

的だったが、ゴジラにガスは効果が見られず、失敗に終わった。
　そこで落とし穴へ誘導後没落させるところまでは同じだが、低温下では活動が低下するゴジラの性質を利用し、ガス爆弾ではなく液体窒素爆弾を炸裂させて動きを封じた後、１００万ボルトの高電圧を流してゴジラの感電死を図るというものだ。
　対して只山案は、最近自衛隊が開発した最新システムを駆使したものだった。
　海に囲まれた日本は、他国軍が侵攻してきた場合海上から兵器や人員を揚陸させる他、術はない。そこで敵国の上陸地点上空にヨウ化銀を散布し雷雲を人工的に発生させ、地上には稲妻が落下するよういくつかポイントを設置させる。すると上陸地点に高密度の稲妻を人工的かつ継続的に落とすことで、敵国の侵攻を防ぐというものだ。これを対ゴジラ作戦に応用する案を打ち出してきたのだ。
　幾度かの審議の末、防衛予算の都合とゴジラの上陸地点を予想することは困難という理由によって亀田案が採用された。特段同期同士で競ったわけではないらしいのだが、採用後握手を求めた亀田の手を、只山は振り払って退室したときいている。
　実は今日のシンポジウムにも、陸海空自衛隊の幹部クラスは多く出席していた。亀田と只山も列席していたのだが、只山はパーティーまで出席することなく、大阪府伊丹にある中部方面総監部へ戻ってしまったらしい。
「うちの会社も出世争いはエゲツないですが、どこも一緒ですな。ま、私みたいに早々と出世争いから逸脱した方が、ある意味ラクですかな」
　ハハハと乾いた笑いを、太田は上げた。そこへ部下がやってきて、飯島たちがミクロネシア・コロニア港へ到着したと耳打ちしてきた。
「それが、現地の韓国企業が数隻の船を用意してる、と連絡がありまして・・・」
　部下の言葉に、太田は怪訝な顔をした。おかしい、チャーター船は一隻ときいていたはずなのだが・・・。

―海外旅行でカッコつけて英語話すと、上手な日本語で返される―

・８月３１日　１４：０３　ミクロネシア連邦　コロニア市
※日本時間より２時間進んでいる

さてさて、ファロ島探検隊の様子に戻るとして・・・。
カンタス航空機でミクロネシア連邦・コロニア市に到着した宏樹たちは、ミクロネシアへの入国を済ませた後、荷物を受け取るとファロ島の案内人となるコンノ三世と落ち合った。
シマシマ柄のシャツに短パン、そしてクリーム色の帽子にチョコレート色の肌。宏樹は対面した途端噴き出しそうになった。修じいちゃんが見せてくれた、彼の祖父にあたるコンノという通訳兼案内人とまったく同じ姿をしていたのだ。
「ソウですか、桜井さんの親戚サンね」
身分を名乗ると、コンノ三世は明るい声で握手してきた。
「ワタシのおジイさんとオトーさん、桜井さんにとってもお世話になってまシタ。一緒に探検したの、スゴク楽しかったって話してまシタ」
力強く握られた手を、宏樹は握り返した。もちろん初対面なのだが、まるで旧くからの友人に会えたような懐かしさを覚えていた。
ひさしぶりに元気な表情を見せた宏樹に、神鍋はホッとした表情を浮かべた。飯島は滅多にこれないミクロネシアの空港撮影に夢中だった。
「港まで送りまスネ。ここから２０分くらいで着くヨ」
そういってポンコツのワゴン車に乗せられ、未舗装の道路を走り出す。南国の暑さは日本のソレとはだいぶ異なり、猛烈な日差しと熱帯の熱い微風が外から流れ込んでくる。車内のエアコンは稼働音こそけたたましいが、冷風はちっとも流れてこない。

「こりゃたまんねーなぁ、新潟より暑い」
一生懸命手で扇ぎながら、後部座席の神鍋がぼやいた。
「ジャワ島やバリ島と一緒だ。熱帯に来た感じでオレはテンション上がるけどね」
対照的に飯島はコロニアの様子をｉＰｈｏｎｅで撮影しながら、汗を浮かべつつも言った。
「コンノ三世、ファロ島もこのくらい暑いの？」
助手席に座った宏樹が訊いた。
「うーん、そうだと思うんだケド・・・」
現地人ということもあるのか、コンノ三世は暑がる様子を見せない。
「実はネ、ワタシも小さいころオトーサンに連れられてファロ島へ渡ったきりで、ずっと行ってナイ。電話でも話したけど、ファロ島に近寄ると良くないことばかりオキルね。だからワタシも最初はお断りしたサ」
「じゃあ、なんで引き受けてくれたの？」
宏樹が訊くと、コンノ三世は宏樹をじっと見つめた。
「・・・ホントはね、ファロ島が危険なこともあるけど、オトーサンのコンノ二世、２２年前に桜井さんの息子サンと一緒にファロ島行って、帰ってコナイ。だから、ワタシ悲しいから行きたくナイ。でも、日本から桜井さんが来てくれるなら、お手伝いしなサイ。コレ、ワタシのおジイさんのときから一家の掟ネ」
宏樹は押し黙った。神鍋と飯島も神妙な顔で黙りこくった。
「ダイジョウブ。もしファロ島、行けたら、オトーサン生きていて、また、会えるかもしれない。ワタシ、そう願ってる」
しんみりした雰囲気にしてしまったことを打ち消すように、コンノ三世は明るい声色で言った。
「・・・話は変わるけど、今回は韓国企業の船でファロ島へ行くんだろう？ミクロネシアには韓国企業の進出がそこまで盛んなの？」
今度は飯島が訊いてきた。
「ウン。韓国の朝進グループ、知ってル？この辺りの海運事業、全部引

き受けてるネ。今回、朝進グループの支社長も一緒ネ。で、その人たちが警備会社も手配してくれたオ」
「朝進グループ?そういや、新潟にもビルあったなあ」
　神鍋が腕組みをした。
「朝進グループ、海運業において、台湾のエバーグリーングループに次いでアジア第二位の規模だ。当然日本にも海路が多いし、特に日本海側には陸上輸送分野でも進出してるはずだ」
「さすが聡くん、詳しいね」
「韓国財閥は、株式投資家にとって魅力的な投資先だからね。ただ気になるのは、てっきり韓国財閥のツテで、韓国系の警備会社が手配されるものと思ってたんだけど・・・オーストラリア籍の警備会社になったのはどういうワケなんだろう?」
「ソレはワタシもわかんナイ。デモ、オーストラリアの軍隊や軍事企業、この海域の海賊やギャング取り締まりに来るの、珍しくナイ」
　そんなものなのかなあ・・・宏樹はそう思ったが、飯島は何やら熟考している様子だ。神鍋は犬のように舌を出し、少しでも涼を取ろうとしている。
「コンノ三世、君はオージーイングリッシュしゃべれるか?」
　飯島が訊いた。
「ムリムリ!オージーどころかイングリッシュダメ!ムリ!日本語シカわからナイ」
　大げさなくらい手を振ると、飯島は黙り込んだ。
「でも聡くん、英語話せたろ。問題ないんじゃない?」
「鍋ちゃん、話はそう簡単じゃないよ。鍋ちゃんだって気づかないうちに新潟の方言出るだろ。たまにオレたち君が何言ってるかわかんないときあるんだから、英語だって同じだよ。増して国が違うんだから」
「そういうモンかなあ」
「うまく意思疎通できれば良いんだが・・・」
　そうこうしているうちに、港へ着いた。その規模は想像していたより大きく、既に客船クラスの船が2隻、停泊している。ハングル文字

の下に漢字での記載があり、「朝進」の文字が確認できた。
　コンノ三世が車を降りて声をかけにいくと、腹の出た中年の冴えない男性が出てきた。何かやりとりすると、ニコニコしながら宏樹たちに寄ってきた。
「こんにちは。朝進海運グループの南洋支社長、チェ・ジョンヒといいます。よろしく」
　そう言って握手を求めてきた。呆気に取られる三人。
「ん？みなさん、僕の顔に何かついてますか？」
「いえ、日本語でくるとは・・・」
　神鍋は驚きを隠せなかったが、「そうか、考えてみれば不思議じゃないな。飯島です」と、握手する飯島。
「韓国では日本語教育が盛んだから、違和感ない」
　そう小声でささやいた。
「それにしても、でっけぇ船ですね。これで運んでくれるんですか？」
　神鍋がその様子をｉＰｈｏｎｅで撮影しながら訊いた。
「そ。こっちと・・・あっちの船も同行します」
「・・・え？こんなおっきな船が、２隻？」
　神鍋は目を丸くした。
「おかしい、ここまで大型の探検隊とはきいてませんでしたよ？」
　飯島が訊いてくる。
「それが・・・今朝になって、本国の本社から指示がきたんです。危険多い海域だから、重量のある船で向かえとは、あらかじめ言われてたんですよ？ホラ、うちの国おっきな海難事故起こしてるから。ところが、本社の重役が、もう一隻、万が一の際救助できるから、って・・・。あのね、わたしも南洋支社長なんてエラソーな肩書ついてますけど、実際はここ左遷されてやってきたに過ぎないし、本社の命令に逆立ちできないモンで・・・」
　チェの弁明に、飯島は不思議そうな顔をしたのち、どこかへ電話をかけた。
「伝通の太田さん、会議中で電話に出ない。あまりにも当初の予定とかけ離れている」

飯島の疑念はもっともだった。
「でもさー、不測の事態に備えてってことだろ?こんだけ態勢整ってれば安心できるがーて」
呑気なもので、神鍋は不思議に思わないらしい。
「まあ、このまま行ってみようよ。たしかに人数多い方が良いだろうしさ」
宏樹が言うと、怪訝な顔をしながらも飯島は頷いた。
「ああー、そうそう。警備担当のスタッフ紹介するヨ」
チェは大型船に横づけされた、小型の黒い船に案内した。中から大きな黒いアタッシュケースを抱えた男性が三人、降りてきた。
「民間軍事企業の・・・えーと、ＮＥＴか。こちら、代表のマックスさん」
そう言ってチェは、金髪ソフトモヒカンの男性を紹介した。少し緊張気味に飯島が「Ｎｉｃｅ ｔｏ ｍｅｅｔ ｙｏｕ．Ｗｅ ａｒｅ・・・」と言いかけたところで制するように手を広げた。
「デヴィッド・マクシミリアン。通称マックスだ。よろしく」
言葉少なめに言うと、宏樹たちを一瞥して荷物を抱え、乗船しようとする。
「おいおい・・・日本語じゃねえか」
神鍋はあんぐり口を開ける。
「今回、言葉の問題はなさそうだね」
宏樹が飯島に言う。
「・・・驚きました、日本語が堪能ですね」
飯島がマックスに言った。
「昔、オーストラリア陸軍の特殊部隊にいてな。世界の主要言語はある程度話せるよう訓練した。無論、ファロ島の言葉はわからんがな」
マックスは宏樹たちにさして興味がないのか、目も合わせず荷物を持って乗船用のタラップを進む。同行する彼の部下は２人。タイ系オーストラリア人のブンチャヤと、アボリジニ出身のボロロと紹介した。彼らは日本語が話せないらしく、雇用主に倣って愛想のない顔で進んでいく。

「な、なんか強そうな人たちだね」
　気後れ気味に、宏樹は言った。
「あの筋肉・・・無駄がない。さすが軍人のトレーニング」
　そう目を輝かせる神鍋に「そこかよ」と思わずつっこむ宏樹。
　そのまま宏樹たちが乗船すると、十分程度で出航した。元々は貨物船らしく、客船に比べれば設備は粗末かもしれないが、「新日本海フェリーの内装に似ているな」などと妙なところに感心している飯島。
　ここからが長く、ファロ島までは海路で２０時間程度かかる。
「さあ、ここから先は何が起きるか・・・」
　神鍋は期待半分、不安半分といった様子だ。
「これまでの遭難事故を調べたんだが、これほど大きな船の沈没はないらしい。そのうえ当初の計画とは異なるが、同程度の船２隻。安全面でいえば、たしかに過去最大で多少のアクシデントにも耐えられるかもしれない。しかし、ここまで想定して費用を算出してきたのか・・・」
　ブツブツと語る飯島。
「それにしても、なんだか落ち着いたら眠くなってきたな。筋トレしようって思ったけど、まずはひと眠りでも・・・」
　大きくあくびをする神鍋だったが、飯島が慌てた様子でそれを制してきた。
「いいや鍋ちゃん、寝る前の有酸素運動してきた方が良い睡眠得られるらしいよ。筋トレしてきな」
「そうかあ？かえって意識覚醒するんじゃないかぁ??」
「いいから。そっちのデッキ前に広いスペースあったし、筋トレにはもってこいじゃないか。移動時間長かったんだし、やってきなよ」
　どうにか神鍋を筋トレに追いやると、顔にはてなマークを浮かべている宏樹に「いまのうちだヒロキン、先に眠ろう」と声をかけた。
「なんでさ？眠たいんなら寝させてあげれば・・・」
「またあのいびきを聞きたいか？」
「・・・」
　宏樹は黙ってブランケットを取り、固い床へ横になった。

―船や車に酔ったときは、事前に酔い止め飲んでても効きやしねえ―

・９月１日　１１：５９　ミクロネシア連邦　ファロ島沖合
※日本より２時間進んでいる

「おーい！ファロ島だぞぉー！」
甲板でコンノ三世が大声を上げ、傍らの飯島がピクリと動いた。
「ヒロキン、島が見えてきたらしい。動けるか？」
宏樹は苦渋の表情で頷いた。
ファロ島まで２０時間かかる、と言われて以来、宏樹はひとまず睡眠を取った。それから夕食（船会社で用意してたのはレトルトだった）を済ませ、神鍋のいびきが聴こえる前に眠りに落ちたは良いものの、夜に海が時化気味になった。
揺れはそこまでひどいものではなかったが、胃がもたれまくる不快感に睡眠から覚醒してしまった。日付が変わる頃に胃の中がすべて空になったが、それでも胃を中心とした不快感と倦怠感は消え失せることはなかった。
そういえば、修じいちゃんが共にファロ島へ渡った同僚の藤江がひどい船酔いになってなあ、と笑いながらしゃべっていたことを思い出した。そんな簡単に船酔いなんて罹るモンなのかなあ、と訝しく思っていたが、いまとなっては、修じいちゃんのかつての同僚にひどく同情を禁じ得なかった。
フラつきながら外へ出ると、心地よい海風に少しは気が落ち着いた感がある。南国特有の湿気った空気の向こうに、うっすらと険しい峰を湛えた島が見えてきた。
飯島は早速ｉＰｈｏｎｅで撮影を始めたが、宏樹はとても撮影などする気も起きない。粗い息づかいのまま、手すりにつかまった。

「宏樹サン、ダイジョウブ?もうすぐファロ島だヨ。陸地に上がればフナ酔い、良くなーる」
コンノ三世はそんな宏樹の背中をさすってくれる。年齢は宏樹より少し上らしいが、船中でもいろいろ気を利かせてくれた。
朝進海運の船員たちは、上陸に備えホバークラフトの支度を始めていた。これほどの大型船だと、それなりの港でないと着岸できない。またファロ島は遠浅とのことで、沖合からはホバークラフトを利用して上陸する手はずとなっていた。
少し目が回る気もするが、宏樹は修じいちゃんが嬉々として話してくれた島、ファロ島がすぐそこへ迫っているのだと思うと感慨深くなった。
「ヒロキン、撮影はしないの?」
ｉＰｈｏｎｅをかまえたまま、飯島が訊いた。
「ムリ、無理。悪いけど任す」
しゃべると胃液がこみ上げてきそうだ。出発時にパシフィック製薬から傷薬やら胃腸薬やら解熱剤やら、一式餞別がてらもらえたのだが、酔い止めまでは入っていなかった。
「ファロ島だって??」
隣の部屋で腕立て伏せをしていた神鍋が現れた。上半身タンクトップのみで、筋トレの成果か汗びっしょりだ。
「なんだオイ、ヒロキンしっかりしなよ～」
そういって、神鍋は団扇のような手で宏樹の背中を叩く。その一撃が、宏樹の内臓を刺激してしまった。
「オ・・・オゲェ・・・ダメだ」
口を押え、必死に下階のトイレを目指す。降り終えた際、着岸の用意をしていた警備担当のマックスと鉢合わせ、運ぼうとしていた荷物にぶつかってしまった。
まずいことに中身は銃弾だったようで、箱の中からジャラジャラと銃弾が散らばった。
「ああ・・・ごめんなさい」
ぶつかってしまったこと、そして荷物の中身に驚いたことに、少し

は胃液が引っ込んだ。
「気をつけろ！」
　思わず母国語で「Ｓｈｉｔ！」と鋭くつぶやいた後、溢れ出た銃弾を拾い始めた。ひっくり返してしまった手前、宏樹も手伝おうとする。
「余計なことをするな。安易に手を触れて良いものじゃない」
　差し出した手をつかみ、不快感も露わな視線を向けてくるマックス。
「だいたいこのくらいの時化で船酔いなぞなるな。これだから部屋にこもり好き放題わめくしか能がないＹｏｕＴｕｂｅｒはイヤなんだ」
　さすがにそこまで言われる筋合いはない。そのうえ偏見に満ち溢れている上、わざわざ日本語で話してくるということは、よほど嫌悪感を向けているようだ。言い返そうとする宏樹だったが、いよいよ胃液が海以上に時化てきたのでトイレへ向かうしかなかった。
　吐けるだけ吐いた後、甲板へ上がる宏樹。だいぶすっきりはしたが、手先が痺れるような感覚が抜けない。
「さあ、いよいよだな」
　背伸びをしながら、神鍋は明るく言った。
「いよいよ、ということは、島へ近づくと遭難するってジンクスに出逢えるのもいよいよ、ってことだ」
　飯島はｉＰｈｏｎｅから目を離さず、言った。
「ローミングもとっくに圏外だ。コンノが持ってる衛星電話しか、もう通信手段はないぞ」
「マジで？でもさ、ここまで来ても何も起きないんなら、大丈夫なんじゃねーの？いままではホラ、波が強かったとか、小さい船だったから難破したとかさ。今回の船はでっかいし、心配ねぇろ」
　呑気なもので、神鍋は島を背景に左腕の筋肉を膨れ上がらせて動画を収めている。
「だといいが・・・雲行きが怪しくなってきてないか？」
　飯島が言うと、神鍋はｉＰｈｏｎｅから目を離した。宏樹も顔を上げた。薄青い空は島に近づくにつれ灰色になってきたのだが、灰色が

より濃い雲が混じりつつある。
やがて雲海の中に光る筋が見え、少しして雷鳴がとどろき始めた。
「雷か。厄介だな」
飯島がつぶやく。少しでも危険があれば即、探検は中断することにしている。その判断は案内役のコンノ三世も、船長であるチェにも権限はあるが、最終判断は宏樹たち3人に委ねられている。
「落雷にはいたってないが、あの様子だといつ地表へ落ちるか、わからんものなあ・・・」
「・・・どうしよう、危ないかなあ」
宏樹は体調が優れないこともあり、弱音を吐いてしまう。
「何言ってんだい、ここまできて引き返すワケにはいかねぇろ?」
相変わらず、神鍋が宏樹の肩を叩く力は強めだ。
「そういう楽観視は禁物なんだけど・・・ここまできて、っていう感情が沸き起こるのもたしかだ」
飯島がつぶやく。
「ねえ、コンノ」
望遠鏡で島の様子を窺っているコンノ三世を、宏樹は呼んだ。大声を出すとまた胃液があふれてしまいそうだったが、この旅がどうなるか、見極め時なのだ。
「雷が鳴ってるんだけど、大丈夫かな?」
宏樹が訊くと、コンノ三世は首を縦に振った。
「あのカミナリ、空に拡がるくらいで落っこちない。雨も呼ばない。風、西から吹いてる。西に、雨雲ない。ダイジョウブ、だいじょうぶ」
雲にまとわりつくような雷光など、日本ではなかなかお目にかかれない光景だ。しかしこちらでは珍しくないようで、コンノ三世は何を怖がってるの?と言いたげな表情だった。
「そういえば、新潟では雪降りながら雷鳴るよ。自然現象て面白いよなあ。ちなみにうちの学校だと、雷のことをみんな高木ブーって・・・」
また呑気なことを話し始めた神鍋を遮るように、ひときわ激しい雷鳴が空気を揺らした。雷光は雲の合間を回転しながら、幾筋も空を照らす。

「・・・やっぱ、大丈夫かなあ」
さすがの神鍋も、ゴクリと生唾を呑み込む。
「もうすぐ停泊ポイント。そこからホバークラフトで２０分・・・上陸までは、なんとか行けそうだけど、どう思う？」
冷静に、飯島は提案してくる。
「そうだね・・・オレ、島まで行ってみたい。せめて、上陸はしようよ」
宏樹はどんよりしたこの空気感と吐き気を吹き飛ばすように、力強く言った。
「・・・だな。少なくともここまでくれば、この船ごと難破するようなことはなさそうだ」
飯島も同調してくれた。
「よ、ようし、それならば・・・。いざとなれば、鍛え上げたこの筋肉で。筋肉は、裏切らない」
神鍋はビルドアップした身体に力を込めた。
『停泊地点まで来た。みんな、準備してください』
母国語の後、日本語でチェによる船内放送が流れた。
船から吊り下げられたホバークラフトは２艘。人と荷物をそれぞれ乗せると、ゆっくりと着水へと下っていく。
宏樹たち３名にコンノ三世、そしてチェで１艘、マックスたち警備陣３名と、チェの部下２名で１艘。島へ上陸するのは合計１０名だ。着水と同時にエンジンを動かし、快適な速度で島へ進みだした。ゆっくりのっぺりな大型船とは異なる速度に、宏樹の体調もグンと良くなってきた。
「ところでさ、なんでチェさんまで来るの？」
「そうだよ、偉いのに」
宏樹と神鍋が訊くと、チェはしかめ面になった。
「会社の責任者として、お前、同行しろ！そう本社から言われてるんだ。支社長っていうけれど、本社のヒラ社員の方がすごくエラいから逆らえない」
忌々しげに毒を吐くチェ。
「本社からも人寄越してきたんでしょ？一緒にはこないんだ」

勤め人の哀愁を垣間見た宏樹が訊いた。
「あいつらエラいから、来ないんでしょ！それにこんだけ大きな船用意して難破したってなれば、韓国企業のメンツに関わる。えーと日本語で・・・御目付役、御目付役だよ。船のことなんてなーんにもわからないのに、エラそうにしてさ！」
だいぶ不愉快らしいのは、船内で船長であるはずのチェへ取っていた態度を見ればよくわかった。同じ会社であるはずなのに、まるで元請けと下請け、いやもっと言えば体育大の先輩と後輩のような厳然たる上下関係が窺い知れた。
「・・・にしても、妙だったよな」
憤慨しきりのチェに聞こえないように、飯島は宏樹と神鍋にささやいた。
「朝進グループ本社から派遣されてきたって言うが、連中、威圧感がすごくなかったか？」
「なんかわかる。目つき鋭いし、大企業の社員てあんな感じなのかな」
「筋肉も、けっこうついてたぞ。韓国って兵役あるからかなあ」
３人でひそひそ話をするうち、ホバークラフトはファロ島の砂浜に上陸した。チェがエンジンを止めると、コンノ三世が荷物を下ろす。飯島と神鍋は早速ｉＰｈｏｎｅで撮影を始めた。
「ねえコンノ、ここからどう進めば良いの？」
宏樹が訊いた。修じいちゃんが冒険した島に、自分が上陸した興奮もあるが、砂浜からいきなり険しい山がそびえていることで、この先への不安少々、探検心ほとんどで鼻息が自然と荒くなる。
「う～ん・・・昔と、やっぱりチガウ。ここから上陸すれば、この先に島の内陸へ通じる道があったんだケド、見当たらナイ」
「おい坊やたち、ボンヤリしてないで、あっち側から回り込むぞ」
マックスが背後から声をかけ、返事も待たずに海岸沿いを歩き始めた。
「なんだあいつ。坊やって、オレ３９だぞ」
頬を膨らませる神鍋。宏樹はマックス一行を追いかけ、声をかけた。

「ねえ、マックスさん。この島に来たことあるの？」
そう訊かれ、マックスは振り返った。
「なぜそう思う？」
質問を質問で返してきた・・・宏樹は不快感を隠さなかった。
「なんか、島の様子を知ってるっぽいからさ」
「・・・グーグルアースで調べられる限り調べただけだ。少なくともここに道がないのなら、他を探すのは当然だろう」
マックスはコンノ三世やチェよりも日本語が堪能なのだが、その分苛立ちや不愉快さもダイレクトに伝わる。
「・・・ウン、マックスサンの言う通り。他に道、できたカモしれない。追ってみヨウ」
コンノ三世の言葉に、一行は動き始めた。いつの間にか雷鳴は鳴りやみ、空には青空ものぞくようになっていた。その分、日差しもキツくなってくる。
しばらく歩くと、宏樹の呼吸が荒くなってきた。どうも胸がざわざわし、水を飲んでもスッキリしない。
「おいヒロキン、まだ調子悪そうだけど・・・」
神鍋が心配そうに訊くと、宏樹は頷いた。
「うん・・・いや、船酔いはとっくに治ったっぽいんだけど・・・」
「おい坊や」
前を歩くマックスがおもむろに振り返った。
「船に酔ったせいで、胃の中空にしただろ。これだけ暑いんだ、空腹がコタえてるだけだ。足手まといになるなら、オレたちがこの先確認するからその辺で待ってろ」
ぶっきらぼうに告げると、また歩き始めるマックス。
「なぁんだ、あれ」
不快感と怒りを浮かべ、神鍋は鼻息荒くした。
「昨日から思ってたが、どうやらオレたち、彼に嫌われてるようだな」
飯島が言った。
「・・・まあいいよ。船酔いになったオレが悪かったんだし」
さきほど銃弾をバラまいてしまった負い目もあり、宏樹が取り成し

た。
　コンノ三世は歩きながら、しきりに山のてっぺんを気にしている。
「宏樹サン、普段なら、あの山のてっぺんに見張りがいて、集落のみんなに教えル。今日、誰もいナイ。ちょっとおかしい」
　胸やけではなく、宏樹は肺の辺りがザワザワするのを感じた。
「まさか・・・２２年前の大地震で、島民はやっぱり・・・」
　飯島がつぶやくと、コンノ三世は悲しそうな顔をした。しまった、と表情に出す飯島。
　先頭の警備陣のうち、アボリジニのボロロが何か騒ぎ出した。傍らのマックスとブンチャヤに何か訴えかけている。
「なんだって？」
「わからん。いや英語なんだが・・・」
　オーストラリア人が話す英語は独特だが、とりわけ先住民であるアボリジニの人々はなかなか通じないらしい、ということを飯島は船の中で調べていた。
「チョット待て、何か聴こエル・・・」
　するとコンノ三世も足を止めた。全員足を止め、聞き耳を立てる。
「何か・・・引きずるような音、しないか？」
　神鍋がつぶやいた。
「いや・・・唸り声？みたいな・・・」
　宏樹が言った。マックスたちはケースからアサルトライフルを取り出した。
「お前ら、岸壁に寄れ」
　短く言い、手で一行を砂浜から山の壁に寄らせた。３人が一行を囲み、辺りをうかがう。
「・・・ひょっとして、キングコングかな？」
　神鍋の顔には、恐怖の片鱗が見てとれる。
「あの銃、ヘッケラー＆コッホのＧ３６だ。実物かあ」
「ちょ、何検討外れなこと言ってんだよヒロキン」
　そうやって宏樹の肩をつかむ神鍋は、暑さによるものではない汗が浮かんでいた。

最初こそひきずるような音も、やがて一定のリズムで韻を踏むような音になってきた。いまわかったのだが、進行方向やや先、山と山のわずかなすき間から風が流れ込み、やがて生温かい風になる。

ズシン、という音が響き、一行は後ずさった。すぐ先のすき間から、何かが飛び出してきた。見上げるような大きさだった。

甲高い怒声が響き渡り、宏樹たちは耳を塞いだ。日差しが遮られたのか陰になり、そのせいか妙に海風が冷たい。いま一度、甲高い怒声が周囲を揺らす。!!!

「・・・ゴジラだあ!!!!」

神鍋が叫んだ。より一層怒声を上げ、すき間を抜け出してこちらに迫ってくる。砂浜は砂が飛び上がるほど揺れ、頭が崖の岩を削って落石が起きる。

マックスたちはライフルを構えたが、突進してきたことで発砲をあきらめ、「走れ!!」と叫んだ。

思い思いに走り出す宏樹たちに、崖を削ったことによる石やら岩が降り注ぎ、砂埃が舞い上がった。目に砂が入ったことで、宏樹は痛みに目を閉じてしまった。そこを岩か何かにつまづき、大きく転倒してしまった。

身体が宙に浮いた気がした後、腰の辺りに強烈な一撃が走った。

目の前が真っ暗になった。

―ところでパシン錠ってどのくらい疲れに効くんだろう？いますぐにでも試してみてえなオイー

・9月1日　ミクロネシア・ファロ島（時間何時？本章中に明らかに）

頬に冷たい空気が当たった気がした。暗闇から引き戻されるように目が開くと、視界がぼやけ、霞んでいる。

目をこすって周囲の状況を把握しようとする。薄暗い空間だが、その向こうは明るく、エメラルドのような色をした海が見える。

ハッとして宏樹は身を起こした。意識が戻って数秒、何がどうなっているかわからなかったが、意識を失う直前の出来事を思い出したのだ。

「気がついたか？」

暗がりから声をかけられ、宏樹は警戒した。岩の陰からマックスが顔をのぞかせたのだ。

「あ・・・あの」

それしか声が出なかった。あれからどうなったのか、ここはどこなのか、頭の中が混乱してしまっているのだ。それに腰の辺りが妙に痛む。そういえば岩につまづいて、派手に転倒したらしいことも記憶の底から蘇ってきた。

「見たところ怪我らしい怪我はなさそうだが、立てるか？」

マックスに言われ、宏樹は膝を立てて立ち上がった。特にふらつくこともなかった。立ち上がってみて、ようやく周囲の様子が把握できた。ここは海辺で、山のようにそそり立っている岩場のすき間、あるいはちょっとした洞穴のようなところらしい。

「あの、みんなは？他のみんなは？それから・・・」

まだ頭の中が混乱している。口にするものの、他に尋ねたいことが言葉で表現できない。

「他の連中は、わからん。山崩れが起きて、とにかく身を伏せるしかなかった。粉塵が落ち着く頃に顔を上げると、お前だけが近くに倒れていてな。運よくオレもお前も踏みつぶされず、助かったらしい。で、とにかく身を隠せる場所をと辺りを見回したら、ここに行きついた。あれほどの図体だ、こんなところひとたまりもないだろうが、少なくとも身を隠すことはできる」
「そんな・・・あれ?オレ、どのくらい・・・」
「どのくらい気絶してたか?おおよそ2時間だ。愛用のｉＰｈｏｎｅでも見てみろ」
　そう言われ、宏樹はポケットをまさぐった。砂だらけのポケットからｉＰｈｏｎｅを取り出す。多少画面にヒビが入っていたが、暗証番号を押すと起動させることができた。１４：３１だった。ということは、マックスの言うように2時間も気を失っていたのか・・・。
「なかなか目を覚まさないから焦ったが、坊やは船酔いで体力消耗してたからな。無理もない。むしろ熟睡できて身体スッキリしただろう」
　言われた通りだった。島に上陸しても不快感は消えなかったが、たしかにいまは調子が良い。そうなると、神鍋や飯島、コンノ三世ら一行はどこへいったのか、心配になってきた。
「おい、むやみに外に出るな」
　洞穴から外をうかがおうとした宏樹を、マックスは止めた。
「で、でも他のみんなは・・・」
「だから、わからん。なにせこっちは、意識を失ったお前を保護しここまで連れ込み、いつ目を覚ますかわからず付き合うしかなかったからな。把握しているのは、あのデカブツはオレたちではなく、他の連中を追っていったらしいこと。人間の足跡と、デッカイ足跡があっちへ続いてた。そしてもうひとつ。山崩れのせいで、持ってきた武器や荷物がすべてオシャカだ」
　そう言うと、マックスは足元に置いていたアサルトライフル、ドイツ製のＧ３６を拾い上げた。銃身の先が曲がり、しかも砂まみれになっていた。

「ああ・・・これじゃあ、作動不良や暴発も起きるかも」
　宏樹が言った。
「ほう。坊やはちったぁ銃の知識があるのか？」
「う、うん。アクション映画見てて好きになって。これって、砂が中に入ったりするとあぶないんでしょ？」
「そうだ。落下してきた岩がぶつかった上、半分以上砂に埋もれてしまった。機関に弾が詰まったり、薬きょうの排出が上手くいかない恐れが高い。拳銃にも砂まみれでなあ、一度分解せんとあぶなくて使いものにならん。付帯の荷物や食糧やらも、岩に潰されてペシャンコだ」
　それを聞いた宏樹は、途方に暮れた顔をした。
「こんな状況でもオレ1人ならなんとかするんだが、素人の坊やを連れてちゃあな。安心しろ、お前らが雇い主だから見捨てるようなマネはしないが・・・」
　苛立ちもあるのだろう、マックスは腰を落ち着けながら悪態をついた。宏樹はムッとしたが、毒を吐かれようが自分を助けてくれたのはこの男なのだ。文句を口にするのはやめた。
「・・・あの、他のみんな、岩に潰された、なんてことは・・・」
「お前をここに運び込むときに周囲をたしかめた。それはなさそうだ。うまいことあのデカブツから逃げててくれることを祈るしかないな」
　薄暗い空間から外の青い凪をあおぎ、マックスは言った。宏樹は自分たちに迫ってきた、大きな生物・・・怪獣のことを思い出していた。
「デカブツと言えば、坊やは日本人だよな。さっきのアレ、ゴジラだったか？」
　まるで宏樹が気にし始めたことを読み取ったように、マックスが訊いてきた。
「わからないよ。見上げるほど大きかったから全部の姿見れたワケじゃないし、慌ててたから・・・。それに、ゴジラなんて実物見たことあるワケないよ。オレたちだって教科書なんかの写真でしか見たことないもの」

「そうだろうな。無論、オレも実物なぞ知らん。だが、世界中どこの軍でも、座学の場でゴジラのような巨大生物のことを教わる。オレも居眠りしいしいだったが、ゴジラがどれだけ大きいか、口から吐かれる白熱光がどれほど恐ろしいか、学んできたつもりだ。そしてさっきのアイツ・・・なあ坊や、お前はアレ、ゴジラだと思うか？」

実は宏樹も気になっていたことだった。たしかに姿をキチンと見たわけではないのだが、そして神鍋はゴジラと叫んだが、山の谷間から現れたアイツがゴジラだったのか、宏樹自身確信がなかったのだ。

「んーと・・・はっきり言えないけれど、さっきのヤツって、写真で見るゴジラとは何か違うような気がする。それと・・・いい加減坊やって呼ぶのやめてくんない？オレには宏樹ってちゃんとした名前がある」

宏樹が口を尖らせると、マックスは薄ら笑いを浮かべた。

「そうか。そういえばさっきもお前、ヒロキン？だか呼ばれていたな。良いだろう。なあヒロキン、オレもアイツがゴジラだと断定する根拠がないと思える。仮にゴジラだとして、なぜこの島に？」

「そんなのわからないよ・・・。まあ、日本のエライ教授なんかは、ゴジラとキングコングには闘争本能があって、お互い惹かれ合ってぶつかりあったって・・・」

言いかけて、宏樹は言葉を止めた。

「もしかして・・・キングコングがいるから、ゴジラがここに？」

「どうだろうな。動物学はよくわからん。ま、さっきのヤツがゴジラかどうかもわからん。となれば・・・ヒロキン、これからどうすれば良いと思う？」

まるで試すように、マックスは宏樹をじっと見据えた。

「うーん・・・外出るのこわいけど、もう少し詳しく辺りの様子知りたい。それに、みんなも心配だし・・・」

「賛成だ。オレ1人で勝手に動きたいところだが、足手まといにならないってんなら、ついてこい」

なんだか自分は邪険にされている気もするが、どの道いつまでもこの洞穴に居続けるつもりもない。いま気づいたのだが、宏樹の足元に

は何やら英語で書かれた容器が転がっている。よく知らないが、どうやら経口補水液らしい。このマックスという毒舌な男、自分が気を失っているときもいろいろ処置を施してくれていたようだ。
マックスは脱いでいたノースリーブのダウンジャケットを羽織った。宏樹の足元にあるのと同じ経口補水液と、カロリーメイトを小さくしたような箱がポケットに差し込まれている。そこからひらりと、何かが落ちた。
「ねえ、何か落ちたよ」
宏樹が拾い上げると、スッとそれを受け取り「ああ、すまない」と顔を背けてしまった。
少しだけ見えたが、写真だった。マックスらしき男性がにこやかに笑っているわきに、アジア系の女性が同じく笑顔を見え、そして赤ん坊が抱かれているのが見えた。マックスは少し気まずそうに、宏樹へ顔を向けることをせず洞穴の外へ向かった。
相変わらず強烈な日差しが、宏樹の瞳孔を狭めてくる。思わずおでこに手を当てて目に影を作る。
とりあえずその場所で辺りをうかがったのだが、崖から崩れてきた岩が浜辺にゴロゴロしており、そしてところどころに、大型の足跡が残されている。
「ヤツら・・・どこへ行ったんだ?」
そうつぶやき、マックスは後ろ手で宏樹についてこいと手招きした。宏樹は黙って従った。
そういえば、ゴジラ(?)が現れる前に、不可解な音がしていた。足音なのか、はたまた唸り声だったのか。いずれも、いまは聞こえてこない。
崖崩れによって落下してきた岩は、宏樹の倍ほどもあるものばかりだった。改めて自身の悪運に感謝を捧げたくなる。
「ヤツらの荷物だ。同じように潰されている」
マックスは岩の下敷きになっているアタッシェケースを見つけた。
「これでみんな丸腰だ。いや・・・ボロロの分がない。持っていったか・・・」

独り言をつぶやくが、そのボロロもどうなったかわからない。
「連中が逃げたとすれば・・・こっち、だな」
マックスは、さきほど辿ってきた道を指した。冷静に考えれば、自分たちがやってきた方向へ後戻りするように逃げ出したのだ。
「どうにか、ホバークラフトまでたどりついて・・・オレたちを残し、本船へ戻ったか。とすれば、迎えにくるかどうかだが」
宏樹はマックスの言葉に、はるか海原を仰いだ。自分たちをとり残し、逃げてしまうようなことは、神鍋も飯島もしないはずだ。だが船の持ち主であるチェ支社長が反対した場合、その限りではない・・・。
「おいヒロキン、オレのあとをついてこい。もしゴジラが出たら、すぐに辺りの岩場へ身を隠すんだ」
宏樹はゴクリと唾を?み込むと、無言で頷いた。どこへ耳を澄ませても、静かな波打ちと遠ざかった雷鳴しか鼓膜を揺らさない。
「少なくとも、近くにはいないようだな。思い切って上陸地点まで戻るぞ」
マックスの指示に従い、宏樹は海岸線を早足で歩いた。さきほどは体調不良と荷物が多かったこともあって気にならなかったのだが、自分たちは上陸してからさほど距離を進めていなかったようだ。
荷物が軽くなったこともあり、数分で上陸地点へ戻ってきた。ホバークラフト2艘はそのまま置かれていた。そして、慌ただしく幾人かが走り去ったような跡が、砂に残されていた。
「形はどうあれ、連中はまだこの島に存在していると考えて良さそうだな」
縁起でもない、と宏樹は声を上げそうになった。
「だが気になるのは・・・ゴジラだかの足跡が途中から途切れていることだ」
「あっ、言われてみれば」
振り返ると、足跡が大きすぎて気が付かなかった。まるで踵を返したように、足跡は元の場所を目指していたのだ。
「途中で、追うのをやめたのか?」
マックスが疑問を口にしたとき、宏樹は人差し指を口に当てた。

「静かにして。何か聴こえない？」
宏樹の言葉に、マックスは怪訝な顔をして耳を凝らした。
「ブタの鳴き声・・・か？」
「違うよ。これは・・・法螺貝に似てる」
「おい、なんだそれは？」
「法螺貝を吹く音だよ。ああ・・・日本では、昔合戦のときとか、サムライが貝でできた笛を鳴らしていたんだ。その音に似てるよ」
「何を言う。こんなところでサムライが騎馬戦でも仕掛けてくるものか」
宏樹が喩えた法螺貝のような音は、しばらくすると聞こえなくなった。
「気味が悪いな。他にも得体の知れぬ何かがいるんじゃないのか」
「わかんないよ。それにしても、ホントみんなどこへ・・・」
宏樹は途中で言葉を止めた。人だ。
人が、やってきた。
「ね、ねえマックス」
山の頂を仰いでいたマックスの肩を叩いた。マックスは宏樹が指差す方を見た。
「人間、なのか？」
間違いなかった。数人がこちらへ走ってくる。だが濃い茶色の肌に、腰蓑のようなものを下半身にまとったような、いかにも文明を知らない人々だった。
はっきり顔が見える距離まで、相手はやってきた。槍をかかげ、顔は一様に強張っている。間違いなく、自分たちは敵意を向けられている・・・。
マックスは宏樹を守るように前へ出たが、アッという間に囲まれた。多勢に無勢、いかに軍の徒手格闘戦術をこなしてきたマックスといえど、槍を持った１０名近くを素手で
相手にできるはずはない。
「あ、あの・・・」
宏樹はなんとかしゃべりかけたが、ものすごい目でこちらを睨んで

くる雰囲気に圧倒されてしまい、それ以上声がかすれて出てこなかった。マックスは負けじと睨み返すが、憎悪のこもった視線はまるでそれ自体が鋭利な武器のようだ。

四方から槍を突きつけられた。マックスの身体が反応して強張ったが、抵抗することはしなかった。

相手のうち、髭もじゃの男が顎で山の向こうを差した。ついてこい、と言っているのか。ドン、と背中を押され、生きた心地がしないまま、宏樹もマックスも槍を向けられたまま歩き始めた。

ーよく怪獣っていえばゴジラって短絡的に言う人いるけど、もっとバラエティ豊かだかんねオタクなめんなー

・9月1日　15：05　ミクロネシア連邦ファロ島
※場面転換するワケじゃねーし、もういっか。

ファロ島を囲む崖のような山は頂こそ高くはないが、ほぼ絶壁のようにそそり立っており、そこを乗り越えて島の奥へ向かおうとする者の意志を阻んでいる。
その中でもところどころ、洞穴のようになっているところがある。ファロ島の住人に槍を向けられ進む宏樹とマックスは、まさしくその洞穴を通り道としていた。
宏樹もマックスも押し黙り、玉のようににじむ汗をぬぐうこともせず歩く。洞穴内は蒸し暑く、住人のように上半身裸にでもなれたらどれほど良いだろうか。
洞穴はさほど長くなく、数百メートルも歩けば先が見えた。同じように標高１００メートルあるかどうかという程度の鋭い山がいくつかそびえ、濃密な森の空気が鼻についた。山の麓辺りには鬱蒼と茂る木々がある。だが森と呼ぶほど大きくはない。
洞穴を抜けると、住人の一人が大声を上げた。よく目を凝らすと、木々の向こうにいくつかの小屋が見えた。
すると小屋の辺りから、同じく大声が木霊してきた。背中を押され、歩みを進める他ない。
また、法螺貝のような音がした。凶器を向けられて気が気でない宏樹ではあったが、周囲を見回してみる。マックスと話したいところだが、とてもそんな雰囲気ではない。
やがて木々を抜けると、小屋が数軒並んだ、集落と呼べるような一帯に出てきた。そこで宏樹もマックスも身体が硬直した。

鬱蒼とした木々で見えなかったのだが、集落のはずれが岩場になっており、そこにさきほど自分たちの前に現れた怪獣が鎮座していた。
一瞬、恐怖のあまり声を出しそうになる宏樹。だが怪獣はさっきの獰猛さはどこへやら、首をすくめるようにこちらを凝視してくるが、やがて興味がなさそうに別の方向へ首を向けてしまった。
集落から数人、やはり槍を持ってやってきた。何か大声で会話を交わし、小屋の一角を指差すと何人かでそちらへ行ってしまった。宏樹とマックスを囲むのは3人になった。依然槍を向けられているのだが、住人たちが会話してからというもの、雰囲気が変わった。
「ねえ、なんか空気感ちがくない？」
宏樹が小声で話しかける。
「ああ。殺気を感じなくなった。だがわからんぞ。コミュニケーションさえ取れれば良いんだが・・・」
「で、で・・・さっきの、アレ」
「アレ、な。はっきりわかった。アレはゴジラではない」
やっぱり、と宏樹は思った。
「まずゴジラは、あそこまで頭がデカくない。そしてゴジラほど手が発達していない。どちらかというと・・・恐竜だ。それもオーバーサイズのな」
そうなのだ。よく図鑑や映画に出てくるティラノサウルスのような、肉食恐竜そのものといった容姿なのだ。ただその身長は周囲の木々よりもはるかに高く、見上げるほどではある。
「さっきはオレたちに襲い掛からんばかりの勢いだったのだが、いまはずいぶんと大人しいな。住人たちと共存でもしてるというのか。あれほどの巨体が」
マックスがつぶやいた。ちょうど小屋から多くの住人が出てきて、その中から、見覚えがある連中が顔を出した。
「ヒロキン!!」
顔を見るなり、神鍋が駆け寄ってきた。
「鍋ちゃーん!!」
不安が一気に霧消し、宏樹も駆け寄ろうとした。慌てて両隣の槍が

宏樹の身を遮ったが、小屋から出てきた住人のうち、年配の男性が何か叫ぶとその槍をひっこめた。
神鍋と抱き合っていると、飯島もやってきた。
「聡くんも!・良かったぁ!」
「ヒロキン!・まさか潰されちまったんじゃねぇろって、オレもう心配で・・・」
神鍋が涙を流し、飯島は宏樹の肩をポンポン叩く。驚いたことに、チェ支社長やブンチャヤとボロロも無事で、マックスと再会を喜び合っている。
聞き覚えのある高い声がした。宏樹が顔を向けると、コンノ三世だった。住人のうち高齢の男性を連れてきた。
「宏樹サン!・良かっタ!・無事でしたカ」
そういって宏樹を抱きしめると、やってきた高齢の男性に大声でまくし立てた。険しい顔で訊き返したのだが、コンノ三世は宏樹を指差して力強く訴えかけるようにしゃべるのだ。
高齢男性は困惑している。長い髪を無造作に伸ばしているが、頭に輪っかのようなものをかけ、蓑も他の住人より豪華だ。どうやら位の高い人らしいことは、宏樹にも窺い知れた。
「宏樹サン、こちら、ファロ島のチキロ酋長!・イチバンエライ人」
そう言われ、宏樹は思わずお辞儀した。だが訝し気に宏樹を見てくるばかりで、どうやら警戒されているらしいことはわかる。すかさず、神鍋と飯島がコンノ三世にまくし立てた。
「おいコンノ、ヒロキンは髪染めてるだけで、れっきとした日本人だって説明してくれ」
「そうだよ。しかも、彼のおじいさん・・・だっけ?・ファロ島にゆかりがあることもしっかり話してほしい」
するとコンノ三世は頷き、神鍋と飯島が話したことを現地の言葉でチキロ酋長に話しているようだ。それでも不可思議な表情をするチキロ酋長。
「・・・ね、ねえ?・オレ何か、ウェルカムな感じじゃないの?」
宏樹は神鍋と飯島に訊いた。

「よくわからないんだが・・・」
そう前置きして、飯島が口を開いた。
「髪の毛が金色のヤツは信用ならない、そういうことらしい」
ますますわけがわからなくなったが、どうやら自分の金髪が警戒される所以らしいことはわかった。すると、マックスと自分が受けた仕打ちになんとなく得心がいく。
コンノ三世はいろいろ説明しており、様子を見るとチキロ酋長はだんだんと表情を軟化させてきている。やがてコンノ三世が出した単語に、チキロ酋長は顔色を変えた。何かを訊き返すと、コンノ三世は宏樹を指差して「サクライ、サクライ!」と連呼した。
するとチキロ酋長が宏樹に寄ってきた。宏樹の顔をまじまじと見て、肩をつかむ。
「サクライ・・・オサム?リョウタロウ?」
宏樹はハッとした。修じいちゃんと、良太郎おじさんの名前だ。どう話せば良いかわからなかったが、宏樹は何度も頷いた。
「アッハ・・・アッハハハ!」
すると長年の旧友に再会したように、チキロ酋長は大きく笑った。
「チキロ酋長、オサムさん、リョウタロウさん、よく覚えてル。どっちも友達。友達の親類?友達!」
コンノ三世の説明中、チキロ酋長は何やら宏樹のおでこに指をあて、トントンと何度か叩く。
「コレ、ファロ島のみんながする、一番の歓迎の証!宏樹サン、あなたみんなと友達!」
よくわからなかったが、悪い気はしない。というか、チキロ酋長の満面の笑顔から、もうすっかり警戒はされなくなり、むしろウェルカム大歓迎!そんな雰囲気を全身から醸し出している。
ふと、また法螺貝のような音がした。チキロ酋長を始め、集っていた住民たちは音がする方を向くと、全員膝を地面についた。
「な、なにコレ?」
宏樹が不思議がると、みんな両手をバンザイさせ、そのまま手と顔を地面に伏せる。岩場近くにいる怪獣(ゴジラもどき?)も、その音

でしおらしく首をもたげる。
「アモ」
「アモ」
「アモ」
　チキロ酋長を筆頭に、みんなが口々に言い始めた。
「アモ・・・?それに、あの怪獣は・・・?」
　宏樹が誰にともなく、訊いた。
「あのゴジラみたいな怪獣、みんなゴロって呼んでるすけ。なんか、さっきから聴こえる笛の音流れると大人しくなるんろ」
「アモって、どうやら島の巫女らしい話をさっきまできいてたんだ」
　神鍋と飯島が説明してくれた。どうやら宏樹が気絶してる間、この集落へ到達していたらしく、いくつか島のことを把握しているようだ。
　島のみんなが祈りを捧げるように膝まづく先の崖を、何かが降りてくる。よく目を凝らすと、断崖と呼んでも差支えなさそうな坂を、軽やかに駆け降りる人間の姿が見えた。先んじて、木々の向こうから数名の島民がやってきたのだが・・・。
「・・・お、オトーサン?」
　コンノ三世が先頭の島民に声をかけた。なんと、コンノ三世と瓜二つの島民がいて、声をかけられた方の島民もギョッとして白眼を剥いた。
「サ・・・三世??」
「オトーサーン!!」
「三世ー――!!」
　まったくもってそっくりな二人は強く抱き合い、涙を流して互いに絶叫している。だがやってきた一行も膝まづいたのを見て、喜びもひとしおな中同じように膝をついた。
　宏樹たちはハッと息を呑んだ。程良く太陽に灼け、腰と胸に蓑を巻き、長く黒い髪をなびかせた若い女性が、こちらへ歩いてきた。あまりの神々しい雰囲気に、宏樹たちも島民を真似て膝をついた。
　島民たちの出迎えに、その若い女性はバンザイのように手を大きく

掲げる。目の前を通るとき、宏樹は女性の顔をよく見た。黒目が妙に虚ろで、宏樹に視線を合わせようとしない。無視している、というより・・・。

「あの娘・・・まるで・・・」

「うん。なんだか、目が見えないように思える・・・」

飯島が同調した。

「でも・・・なんだろな?なんだかさ・・・」

「んん・・・日本人?ぽいよな・・・」

だが声は聞こえるのか、宏樹たちを向いて立ち止まった。まっすぐの黒い髪、少し浅黒い程度の肌。なにより穏やかな微笑を湛えた表情。どことない神々しさと気品に溢れている。

女性はチキロ酋長に何かしゃべりかけた。いくつかやりとりすると、宏樹たちを向いた。

「ようこソ、ファロ島へ。私は、アモ」

宏樹たちはあんぐり口をあけた。

「おいおい・・・」

「日本語だぜ・・・」

ーちなみにゴロは、いわゆるゴロサウルスです—

日が暮れるころ、全島民７０名ほどが総出で宏樹たちを歓迎する宴を開いてくれた。

決して食糧が豊富とは思えないことがうかがい知れるのだが、集落の中央にある広場いっぱいに焼いた肉や赤いスープが並べられ、自分たちも食べながら宏樹たちに勧めてきてくれる。始めは不安だったが、島独特の香辛料に彩られた食味は舌を大いに悦ばせてくれていた。

島民たちは代わるがわる、「日本はどんな国なのか」「日本人はどんな生活を送っているのか」「日本人はどんな信仰を持っているのか」などと口々に質問してくる。そこをコンノ親子がうまく通訳してくれ、宴は酣となっていた。

島民の中には１０名ほど小さな子どもたちがいて、神鍋が持ってきた指輪のおもちゃに興味津々だった。

「鍋サン、これは何かッテみんなきいてるヨ」

コンノ三世が通訳すると、神鍋は大げさに身体を振りかぶった。

「これはね、こうして遊ぶんだ。シャバドゥビダッチヘンシーン！みんな一緒に」

「「シャバドゥビダッチヘンシーン！」」

人柄もあるのだろう、宏樹たちの中では神鍋が子どもたちに人気がある。そういえば、日本からおもちゃを持ってきたなどと船の中で話していた。

「ヒロキン、飲んでみなよ」

飯島が差し出してきたのは、スープとも異なる赤い汁だった。島民を見ると、まるで酒を呑むかの如く美味そうにすすっている。

「これ、アルコール入ってるんじゃないの？」

元来酒が呑めない宏樹は、遠慮がちに訊いた。

「コンノに訊いたら、酒じゃないらしい。一種の麻酔というか、脳や神

経への作用はあるらしいんだけど」
そう訊くとますます呑む気はなくなるが、せっかく勧めてくれたのだ。宏樹は幼児がお屠蘇を呑むように、おそるおそる?んでみた。
苦味と多少の酸味はあるものの、呑めない味ではない。むしろ不思議なコクがあり、なるほどクセになるというのも頷ける。
「もしかしたら、酒の文化がなくて、この赤い汁を酒みたいに楽しむのかなあ」
宏樹がつぶやいた。この島の生活や慣習に興味がある様子がうかがえ、飯島は頷いた。
「パシフィック製薬が使ってるファロラクトン。あれも赤い木の実が原料だっていうからね。薬効成分かなり含んでるんじゃないのかな」
そういえば、と宏樹は口を開けた。修じいちゃんが「キングコングはな、島に伝わる赤い汁を呑むと眠くなるんだ」と、よく教えてくれていたのだ。
「そうか。あんな大きい巨体が眠るほどなんだ。やっぱり薬効すさまじいものがあるんだな」
そんなものを人間が呑んでも大丈夫なのだろうか・・・そう心配する宏樹をよそに、飯島がつぶやく。
そうしているうちに、子どもたちを引き連れて神鍋がやってきた。
「おうい2人とも。この子たちが一緒に遊ぼうってよ」
島の子どもたちにすっかり懐かれた神鍋の両腕に、子どもたちがぶら下がっている。
飯島は子どもの相手が得意ではないのだろう、やや気まずそうに苦笑したが、宏樹は子どもたちに目線を合わせるべくしゃがみ込んだ。
すかさず子どもたちが寄ってくる。どうしたものかと思案していると、ふと思いついた。スマホを取り出し、動画撮影をタップする。
画面に映った自分たちを見て、子どもたちは大きく驚き、そしてはしゃぎ出した。「貸して、貸して!」とせがんでくるのは、言葉がわからなくても理解できた。
宏樹のスマホを持ったまま、子どもたちは大人たちの中へ走っていく。自分の両親にスマホを向け、何かしゃべってもらおうとしている

姿は本当に楽しそうで、微笑ましかった。
ふいに思った。ここ最近、自分はああいうふうに素直な気持ちで楽しみ、動画を撮影していただろうか。
やりたいからではなく、やらなくちゃ、という義務感に駆られて動画を回すようになったのは、いつぐらいからだったろうか。
「宏樹サン、みんなすっかりスマホで撮影お気に入り。島民みんなでＹｏｕＴｕｂｅｒだヨ」
コンノ三世が骨付き肉を頬張りながらやってきた。子どもたちが代わるがわるスマホを握り、焚火の炎や料理の様子を撮影してはきゃいきゃいとはしゃいでいる。
「さあさあ、みんなまだまだお肉アル。もっと食べル」
コンノ三世に言われ、宏樹は串焼きにされた肉を数本と赤いスープの器を持つと、集落の外れに向かった。マックスたちが簡易テントを建て、集落の食卓には混ざらず食事をしていたのだ。
「マックス、これ」
現れた宏樹に、マックスたちは怪訝な顔をした。
「おい、オレたちは大丈夫だと言ったじゃないか」
「そうだけど、みんな一緒に食べてるんだし。せめて、同じ物食べてもらいたくて」
そう言う宏樹になおも戸惑いがちだったものの、ブンチャヤもボロロも美味そうに焼けた肉の魅力に、いまにもよだれを流しそうだ。そんな彼らを見て、しょうがねえなといったふうにマックスは宏樹から料理を受け取った。
「ねえ、やっぱりあっちに来たらどう？僕らからも酋長にお願いするからさ」
「・・・せっかくだが、それは遠慮する」
肉を頬張り、マックスは言った。髪の毛が金色のヤツらは信用ならない・・・最初にそう言われ、宏樹たちが快く迎え入れられても、島民がマックスを見る目は冷たいままだった。そうした空気を読み取り、マックスたちは集落の外れにテントを張り、持参したレーションで食事を済まそうということになったのだ。

「でもなんで、島のみんなはマックスを遠ざけようとしてるのかな」
宏樹が口にした疑問に、マックスは何も応じなかった。本当にわからないから答えなかったのではなさそうに、宏樹は思えた。
「明日、キングコングを探しに行くんだろう。機材や荷物はオレたちで持ってやるから、島から人員の応援はいらない。酋長たちにそう伝えてくれ。ヒロキン、肉とスープはありがたくいただく。礼を言うぜ」
どこか、宏樹を遠ざけようとしているように感じた。昼間の一件でだいぶ距離を縮められたと思っていたのだが・・・宏樹は何も言わずに頷くと、マックスたちのテントを離れた。

翌朝になった。
昨日呑んだ赤い汁の効能だろうか、近来稀に見る寝覚めの良さを、宏樹は感じていた。それだけでなく、身体がものすごく軽いのだ。
考えてみれば、長旅の疲れに加え昨日は船酔いに見舞われ、身体が五体不満足状態だったのだ。健康体の自分はこんなにも気力体力共に充実するものなのか・・・。
特に神鍋は元気だった。普段から規則正しい生活をしているのが功を奏したのか、早朝から筋トレに励んでもちっとも疲れを感じない、と良い汗を輝かせていた。対照的に、不幸にも神鍋より遅く就寝してしまった飯島は見るからに寝不足だった。神鍋の快適な睡眠の犠牲になってしまったのだろう。
南洋の島とはいえ、朝方は少し涼しさも感じられた。朝もやの向こうに太陽が昇るのが見え、朝の6時くらいかと思っていたが、なんと8時をやや回った頃だった。
「気が付かないカモしれないケド、南半球はいま冬の季節ネ。ライジングサン、遅い」
そういうコンノ三世は、すっかり出かける支度を整えている。マックスたちも準備を済ませているところを見ると、どうやら宏樹たちを待っている状態のようだった。

慌てて支度をするが、「この島では慌てるの、よくナイ」と言ってコンノ二世がフルーツを差し出してきた。
「みんな朝、しっかる食べル。身体、一日元気。とっても大事」
そういって自分もフルーツにがぶりつく。
「うん。コンノのお父さんの言う通り。朝食わないと力出ない」
神鍋はコンノ二世に倣って、大きく口を開けてフルーツを頬張った。
「朝食べない方が時間的効率を生む場合もあるんだが・・・こういうところではそんな文明的発想は無用か」
飯島は朝の食事を摂らないと話していたが、郷に入れば郷に従え、とフルーツを口にする。宏樹も普段朝は食べない。というか、編集作業をしていると夜も朝もあいまいになってしまう。赤い汁の薬効だけでなく、日暮れと共に寝て夜明けと共に起き出すという生活リズムは、考えてみればかなりひさしぶりだった。
フルーツはドラゴンフルーツによく似ていた。味は薄いが、噛むと果汁に溢れ、プチプチした種の触感が歯応えを愉しませてくれる。
フルーツを食べたことで手がベタついているが、拭くものを用意していない。仕方なくそのままスマホを持つことにした。アルコールティッシュくらい用意してくれれば良かったのだが、神鍋などは果汁でべたべたの手で自撮り棒を握っている。
「支度が済んだのなら、早く行くぞ」
相変わらずぶっきらぼうにマックスが声をかけてきた。昨日、仲良くなれたと思った宏樹は複雑な気分で頷いた。
「みんな、今日は私とオトーサンで、案内する。オトーサン、この島詳しい」
聞けば２２年前の地震以来、コンノ二世はずっとこの島に住んでいたというのだ。地震で乗ってきた船が壊れ、戻るに戻れなかったらしい。
コンノ二世の先導で、集落から先の山道へ進むことになった。コンノ二世はマックスに敵愾心はないようだが、マックスはどこか島の住人を警戒している。髪の色で敵視されてしまう気分は、わからなくも

ないのだが・・・。
　山への道までは木々が生い茂っており、その先は針のように険しい山が連なっている。あんなところを登るわけではないらしいときいていたが、見るだけで圧倒されてしまう。
　そして台地状の崖になっている麓には、ゴジラもどきの怪獣が横たわっている。大きく寝息を立てているが、神鍋のそれに比べればだいぶ大人しい。
「ねえコンノ、あの怪獣は？たしか、ゴロって呼ばれてたけど」
　宏樹が三世に訊いた。
「昨日、オトーサンに教えてもらった。大地震の後、現れたらしい。それからボー・・・もといキングコングと力比べして、敵わなかったらしいヨ。顎のところに傷、アルね。キングコングに殴られてできたらしい」
　そういえば、下顎にへこみ傷が見てとれた。
「大学の時に古代生物学の単位を取ったんだが、いわゆるアロサウルスに酷似しているんだ。しかしアロサウルスは最大でも１０メートルあるかどうかといった大きさらしいんだ」
　おもむろに飯島が口を出してきた。
「１０メートル？どう見ても４０メートルくらいはあるだろ、アイツ。恐竜にしては規格外だぞ」
「そういう鍋ちゃんも、恐竜の実物見たことあるの？」
「い、いやないけど・・・」
「ねえコンノ。地震の後に、現れたってきいたけど？」
「うん。この島の天地がひっくり返るほどの地震だったみたい。地形すっかり変わってしまった。オトーサン、そう話してた」
「しかし・・・地震だけであんなデカイ奴が出てくるなんて。やっぱり地球は神秘と驚異の塊だなあ」
　話しているうちに、だんだん息が上がってきた。山道の傾斜がキツくなってきたのだ。そのうえ木々がなくなって遮るものがなくなり、サンサンと降り注いでくる日差しも、体力を奪っていく。
「お、アモだ」

先頭を歩くコンノ二世が声を上げた。山の向こう側、ほとんど崖のような道を軽やかに駆けあがっている女性が見えた。
「えっ・・・あんなところを?」
「あの動き・・・人間技じゃねえ。ＳＡＳＵＫＥ出ても優勝できるぞアレ」
飯島と神鍋は驚愕していた。
「しかも・・・彼女、目が見えていないように思えたんだけど」
そう宏樹が訊くと、コンノ二世が満足気に頷いた。
「そう。彼女は目が見えない。だケド、身体とっても軽やか。目が見えない人、感性鋭いンネ」
「なあ、コンノパパ。あのアモって娘はいったい何者なんだ?昨日も、島のみんな眼差しリスペクトだったし、オレたちの歓迎会にも現れなかったぞ」
神鍋が訊いた。
「彼女、ボーの巫女。ボーの気持ち、わかる。ボーも、アモの気持ちわかる。お互い、お互いのこと大好き。昨日も、ボーに会いに行って、帰ってきた。それから村にある祠で祈り捧げてた。島の木の実、元気に育ちますように。島の子どもたち、元気に育ちますようにって」
コンノ二世が答えた。ボー、というのはファロ島の言葉で「王者」を意味するらしく、それはキングコングのことだと、昨日教えてくれた。
「・・・なあコンノパパ。アモって元々島の住人だったのか?なんか、日本人に見えるんだけど・・・?」
「ワタシもよくわからない。地震のとき、たしかにワタシ島にきたけれど、地震のときにケガをしてしまて、記憶曖昧。記憶喪失。ただ・・・傷だらけのボーが、血まみれの小さい女の子を岩の中から助け出してきた。そう聞いている」
「うわぁお!?」
そのとき、神鍋が素っ頓狂な声を上げた。体長1メートル以上はある、大きなトカゲが足元に現れたのだ。
「なんだぁ、トカゲかよ。ビックリさせやがって」
トカゲはキーキーと高い声で啼き、神鍋に近寄ってくる。

「でも良く見りゃかわいい顔してんな。どれどれ、よしよし」
神鍋はしゃがみ込むと、トカゲの頭を撫でようと手をかざした。宏樹は修じいちゃんが話していたトカゲの逸話を思い出し、「鍋ちゃん！」と叫んだ。それと同時に耳をつんざくような高く乾いた音がして、トカゲの脳天を何かが撃ち抜いた。
あまりのことに神鍋は腰を抜かした。マックスがＧ３６アサルトライフルを発砲したのだ。
「な、なにするんだよ！ビックリしたってか・・・殺すことないだろうが！」
神鍋の抗議に、マックスはフン、と鼻を鳴らした。
「わかってないようなら教えてやる。こいつはコモドオオトカゲの亜種だ。こう見えて獰猛だし、人間の身体を噛み砕くほど顎の力も強い。しかもその歯は雑菌だらけで、破傷風やペストの温床ときている。お前、そう聞いてもこの爬虫類と戯れたいか？」
それを聞き、神鍋は顔を青くして後ずさった。
「ヒロキン、知ってたのか」
飯島が訊いてきた。
「うん。修じいちゃんが話してた。ファロ島に出るオオトカゲは歯が鋭くてばい菌持ってるから、出てきたら銃で撃ち殺してたって」
乱れた呼吸を落ち着けると、神鍋は立ち上がった。コンノ二世は脳天を撃ち抜かれて動かなくなったオオトカゲの顔を軽く蹴りつけ、動かないことを悟ると尻尾を持ち上げた。
「ちょ、それどうすんの？」
神鍋が訊いた。
「コレ、島の大切な食べ物。持って帰って焼いて食べるネ」
そういって嬉しそうに持ってきた大きな麻袋に放り込んだ。
「おげげー、そんなの食べるのか」
いまの話をきいて、心底気持ち悪そうにする神鍋。
「ナニ言ってるの。オオトカゲの肉、歯応えあって美味しい。島の大切なゴチソウ。昨日、みんなに出した焼いた肉、全部コレね」
３人とも青ざめた。

ー亜麻色の髪の乙女にすみれＳｅｐｔｅｍｂｅｒ
Ｌｏｖｅー

ｉＰｈｏｎｅを覗くと、間もなく昼に差し掛かろうとしていた。ボー、もといキングコングを探す道のりは一筋縄ではいかず、急な傾斜を登ったかと思えば、しばらくなだらかな道を歩く、といった繰り返しだ。だがなだらかな道といっても南洋の日差しは肌を刺すように熱く、ジリついている。

途中、宏樹と飯島は何度か座り込み、休憩する他なかった。無理をすれば熱中症で昏倒しかねない。設備も環境も充分過ぎるほど整った日本と異なり、言っては悪いがこんな未開の地で倒れては命の保証もおぼつかないだろう。

「なんだあ、２人ともだらしないぞぉ？そんなんじゃ田植えも稲刈りも日が暮れたって終わりはしないぞ」

１人元気な神鍋はココナッツをくり抜いた水筒の水をラッパ飲みしながら仁王立ちしている。

「悪かったなぁ、オレたち都会育ちなものだから」

恨めしげに神鍋を見上げる飯島。彼の場合体力よりも神鍋のいびきによる睡眠不足が原因なこともあり、イヤミのひとつでも言ってやらないと腹の虫が収まらないのだ。

「都会でもマラソンとかジム行って体力作りできるだろー？こういうとき筋肉は裏切らないぞぉ」

だが神鍋はあっけらかんとしており、イヤミや皮肉が通じない。

「とにかく、もうちょっと座らせてよ。ミイラになっちまう」

宏樹は両手を広げ、岩場に寝っ転がった。こういうとき、普段の不摂生が悔やまれる。

「まあまあ、ミナサンのペースで行きましょー」

コンノ二世は笑顔でとりなし、息子の三世もウンウン頷いている。
「日が暮れるマデ村に戻れれば良いんですヨ。あと、もうチョットですカラ」
しかし、と3人は思考を巡らせた。村を出てここまでアップダウン連続の道を延べ3時間。ということは、帰りも同じように繰返しのパターンだろう。となれば、村に着くのは夕刻近くになるか・・・。
「おい、そろそろ行くぞ。こんな野生動物たちの棲家でよくもまあ、呑気に座り込んでいられるものだ」
マックスの棘ある言動に、宏樹も飯島も身を起こした。渋々といったふうに立ち上がり、重たい身体にムチ打って歩き始める。
「相変わらず、イケ好かない奴らだ」
普段冷静な飯島も、マックスの敵意ある言葉に口が悪くなっている。
「しかし、どうしてあんな立派なカメラ持ち歩いてるんだろうね？」
宏樹は不思議そうに訊いた。ブンチャヤが持っているカメラはプロ仕様のハンディカメラで、探検が始まってからずっと撮影している。気になったのは道中ばかりでなく、周囲の山々や木々も撮影していることだ。少なくとも、迷子になったときのために撮影している、あるいは宏樹たちのようにＹｏｕＴｕｂｅに上げるためではなさそうだった。
「それに、あのマックスとかいう男。やけにこの島について詳しい。もしかして、前に来たことあるんじゃないか？」
飯島の言葉に、宏樹は言葉を発することなく頷いた。
「なあヒロキン。連中だが、どうもオレたちの警護以外、何か目的があるような気がしてならない。少し用心した方が良いかもしれない」
「でもさ聡くん、もし他に目的があったとして、オレたちに関係ないことなら別に良いんじゃない？しっかり警護さえしてもらえれば」
「それはそうだけど・・・ヒロキン、ファロラクトンεの調査、忘れてないよな？」
「うん。でもそれは、もう少し島の人に話を聞いて調査探索は明日以降ってことにしたじゃん。今日はキングコングの探索で1日かかり

そうだし」
「そう。もしも、だぞ？マックスたちもファロラクトンεの調査に来てたとしたら、どうする？」
「えっ・・・？」
「ただでさえ競争が激しい製薬業界だ。こう考えることもできるんじゃないか？どこか・・・まあ、欧米の製薬会社がスポンサーになって、マックスたちにファロラクトンεのサンプル採取か何か、やらせようとしているとすれば？もしそうだとすれば、立場上オレたちは連中と敵対することになるぞ。オレたちだってスポンサーを大事にしなきゃいけないんだし」
　考え過ぎじゃないの、宏樹はそう言いかけたが、口をつぐんだ。飯島の懸念もわかるような気がするし、少なくとも彼らが彼らなりの理由でこの島を訪れたらしきことは、間違いなさそうな気もする。
　そんな不可解な相手に命を預けることに、宏樹は急に寒気を感じた。とはいえマトモに尋ねても、すんなりと教えてくれそうな気配もない。
　そういえば、マックスが昨日洞窟で落としたあの写真・・・イザというときは、あのことを切り口にできないだろうか・・・そんな考えを巡らせていたとき、先頭を歩くコンノ二世が大きく声をあげた。
「ここから先は崖だぞーォ！ロープ張るから、気をつけて降りるんだぞーォ！」
　するとそれまで元気に歩いていた神鍋の足が、急に鈍った。
「アレ？鍋ちゃんどうしたの？」
　そう飯島が声をかけても、顔を強ばらせる神鍋。それに顔にはじっとりとした汗が滲み出ている。
「ちょ・・・勘弁してくれよ。こんなとこ降りるなんて聞いてないよぉ・・・」
「えっ・・・もしかして鍋ちゃんて・・・高所恐怖症？」
　宏樹がそう訊くと、表情を引き攣らせて頷くばかり。
「ひ、ひ・・・飛行機は大丈夫なんだけど・・・こうもリアルに迫ってくると、やっぱり・・・ねえ？」

なんとか笑顔を作るが、歯はガチガチに閉じられ、目は笑っていないどころかいまにも泣き出しそうだ。
「じゃあ、鍋ちゃんだけここで待ってる？」
「う・・・うん・・・」
だがすかさず、マックスが近寄ってきた。
「こういう場所ではな、全員同一行動が原則だ。ひとりだけ別な行動を取ると、身の安全が保証できないばかりかチームが分裂して全員に不利益な結果が待ち受けることになる。目を瞑ろうが何しようが、歯を食いしばってついてきた方が身のためであり、仲間のためだ」
そんなこと言われても・・・そう言い返そうにも、開けた土地以外は身の丈ほどはある草が聳えている。もしひとりで待機していて、大トカゲや大蛇でも襲い掛かられたら、如何に鍛え抜かれた筋肉を持つ神鍋でもひとたまりもあるまい。
「足場はワリとしっかりしてるヨ。みんなで行けばダイジョーブ！」
コンノ二世がひときわ声を張り上げる。
「鍋ちゃん、こりゃ行くっきゃないでしょ」
「ここぞＹｏｕＴｕｂｅｒ魂の魅せどころじゃないか」
ニヤついて言いながら、宏樹も飯島もｉＰｈｏｎｅをむけてくる。この様子を撮影して、あとで編集し動画にアップする気満々だった。
「よ・・・よし、そういうことなら」
やはり、根っからのＹｏｕＴｕｂｅｒ魂がそうさせるのだろう。意を決したように頷くと、顎を引き唾を呑み込んで断崖に近寄る神鍋。
「し、し、し、下見なきゃ、いけるカモ・・・」
へっぴり腰の神鍋を飯島と宏樹でサンドイッチし、慎重に岩場へ足をかけながらロープを伝って降りていく。コンノ親子はもちろん、マックスたちもこうした状況には慣れているのだろう。機材やアサルトライフルを抱えたまま伝い降り始めた。
崖の下からは妙に暖かい風と、時折冷蔵庫のような澄んだ空気が流れてくる。そして、下へ降りるに従って妙な獣臭もするようになってきた。
「動物園って、こんな臭いするよね？」

宏樹が飯島に話しかけた（神鍋はそれどころではない）。
「ああ。もしかして・・・キングコングかな」
そんな会話を交わしていると、やがて麓へ降りられた。降りてみてわかったことだが、崖下かと思いきやそこからさらに崖が地下へ向けて伸びており、学校の校庭ほどの広場となっている部分に降り立ったに過ぎなかった。
「あのう、まさかここからさらに降りる、なんてことは・・・」
もはや恐怖が胃腸を唸らせているのだろう、神鍋が下腹部を押さえながら訊いた。
「ダイジョーブ、それ、ナイ。ここからは奈落。落ちたらまず、助からナイ。降りちゃ、ダメ」
コンノ二世が陽気に応える。マックスはボロロに何かを指示し、ボロロはカメラを崖の底へ向ける。地の底が見えない崖下からは、異様に涼しい風が吹き込んでくる。
「あとは、ココの洞窟歩くだけ。ボーの神殿ネ」
コンノ二世はそう言うと歩き始めた。
「なあコンノパパ。もしも、オレたちが来てキングコングが怒り出すなんてことは・・・」
飯島が尋ねた。キングコングのすぐ近くまで来たことで、よもや、という感情と思考が沸き起こるのは宏樹も同じだった（神鍋は道の傍らに広がる奈落にのみ恐怖を感じているようだ）。
「それ、ナイ。アナタたち行くことわかって、だからアモが先にボーのところへ行ったネ。ボー、他所から入り込んだ人、モノ、警戒する。島、守るため。でもアモがいれば、ダイジョーブ。だからみなさん、ダイジョーブ。大舟乗ったつもりでいるネ」
「そうか・・・しかし、アモはこの崖も軽やかに降りたんだろうか？」
「そう。アモ、目は見えない。けれど、そういう人、すごく感覚鋭くナル。これくらい、ダイジョーブ」
やがて洞窟の奥行きが狭くなると、奈落が見えなくなった。急にコウモリが飛び出してきて一同は身じろいだが、コンノ二世が松明に火をつけるとコウモリは寄り付かなくなった。

「・・・何か、聴こえないか？」
飯島が言った。
「うん。なにか・・・鍋ちゃんのイビキみたいな？」
「おいおい、オレはそんなイビキかかねぇって」
何言ってんだコイツ、という目を神鍋に向けると、宏樹と飯島は足を止めた。手前のマックスが歩みを止めたからだ。
「お前らの言う通りだ。こりゃあ、自然が発する音じゃない。人間の呼吸に似ている」
そう言うと、Ｇ３６ライフルを持つブンチャヤに安全装置を外させた。
「どうやらアモって娘がいるなら大丈夫らしいが、それでも獣だからな。とはいえキングコング相手に、この銃では太刀打ちできんだろうが・・・」
するとイビキのような音が止み、かすかに唸り声のようなものが聞こえてきた。
「ありゃ、ボーがワタシたちに気がついたらしいネ」
コンノ二世が口を開いた。
「本当に大丈夫なのか？」
飯島が訊いた。
「ダイジョーブ」
コンノ二世はそう言うが、猛獣のような低く重たい音が聴こえると威嚇されているように思えて背筋が寒くなる。奥へ進むと、闇の向こうに陽光が射す広場があることがわかった。だが闇に射し込む白い光の筋に照らされているのは、黒くじめじめした岩肌ではなかった。茶色の蔦のようなものが無数に生えているように見えた。
だが、その蔦が動いた。広場から埃が舞い上がるのがわかった。そして、道の先に輝く、大きな黒目・・・。
突然、洞窟内に大きな咆哮が響き渡った。宏樹たちは力いっぱい耳を塞ぎ、目を瞑る。すかさずマックスが宏樹たちの前に立ち、ブンチャヤがライフルを向ける。
昔、修じいちゃんと一緒に観た「世界驚異シリーズ」の北極冒険回

で見たこと、そして聴いたことがある。人間が自分のナワバリに接近したことを察知したホッキョクグマが、仁王立ちしておぞましい雄叫びを上げ威嚇する様子。アレと一緒だった。だがこの咆哮は、あのとき感じた何倍もの恐怖を宏樹に走らせた。

すると今度は、法螺貝を吹くような音がした。島へ最初に上陸したとき、聴こえてきたあの音だ。

「これって・・・」

「アモの笛。これ吹くと、ボーもゴロもおとなしくなる。ダイジョーブ」

顔を強ばらせる宏樹たちと異なり、コンノ二世は陽気だ。さきほどの咆哮を耳にしても、警戒する様子がまるでない。

「さ、進みましょ。ダイジョーブだカラ」

そういうとズンズン進むコンノ二世。だが宏樹たちは当然、躊躇する。

だが言う通り、咆哮は一度きりで法螺貝のような音色が漂うばかり。こちらに向ける大きな黒い目は、次第に険しさを失い、穏やかで優しいものになっていく。

「みなサーン?」

コンノ親子はすっかり、黒目のすぐそばまで近寄っている。勇気が出ない宏樹たちと、職務上彼らを守るべく踏み止まるマックスたち。

「・・・どうする?」

飯島が宏樹と神鍋に視線を向けて訊いた。

「行くっきゃ、ないよなあ?」

高所に続き恐怖が連続して見舞った神鍋は、げっそりと老けたような顔をしながらも答えた。

「・・・いまこそ、ＹｏｕＴｕｂｅｒ魂の魅せどころ、だよね」

言いながらも、宏樹はＹｏｕＴｕｂｅｒであることをだいぶ後悔していた。

「よ、よし、行こう」

「・・・う、うん」

宏樹たちは前に進み始めた。ＹｏｕＴｕｂｅｒとして。

「まったく、だからオレはお前らみたいな文明の申し子がキライなんだ」
マックスはそうボヤきつつも、職務に忠実に宏樹たちの前に立ち、先導してくれる。宏樹たちは昔、静岡県富士宮市郊外の大風穴を探検したときを思い出し、となりのトトロのオープニング曲を口ずさみながらすり足で前へ歩き出した。
とうとうコンノ親子たちのそばに立つと、黒目が遠ざかった。そして人ほどはある鼻を近づけて、宏樹たちの匂いを嗅ぐように鼻をスンスンさせる。ひどい獣臭が漂ってきた。
鼻が離れると、白い陽光に照らされて露わになった、巨大な顔。まだ眉を顰めているが、宏樹たちをまなざす瞳はだいぶ穏やかだ。
「ボー」
そう言うと、コンノ二世は膝まづいた。三世も倣ってしゃがみ込む。
宏樹たちはゴクリと唾を飲み込み、各々のｉＰｈｏｎｅを向けた。キングコングの上半身が画面越しにはっきりと映り込んだ。
「これが・・・キングコング」
宏樹がそう呟くと、少し身を乗り出した。神鍋と飯島が手で制しようとしたが、宏樹はかまわず道の際まで進んだ。そこは広場というか、大きな空洞になっており、眼下にキングコングの足元が見える。白い骨が無数に転がり、赤と黄色の液体がところどころに染み込んでいる。
宏樹はｉＰｈｏｎｅから目を話すと、まるで旧い親戚に再会したように目を細めた。なぜだかわからなかったが、キングコングを見て修じいちゃんと良太郎おじさんを思い出していた。
するとキングコングは宏樹に顔を近づけた。マックスが宏樹の肩に手を置き、下がらせようとしたが、キングコングの表情を見て手が止まった。
最初に警戒を露わにしたオーラはどこへやら、穏やかで優しい表情で宏樹と向き合っているのだ。身体こそ大きいが、宏樹に危害を加えそうにはとても思えなかった。

また、法螺貝のような音がした。宏樹たちが来た道の少し上方に、別な洞穴があり、そこから亜麻色の髪を靡かせた少女が貝に口を当てていた。

アモだった。

笛を吹き終えると、アモはキングコングに、そして宏樹たちに微笑みかけた。思わず宏樹は手を振ったが、そういえば彼女は盲目であることを思い出して手を引っ込めた。にもかかわらず、アモは穏やかに手を振り返してくれた。

思わず、宏樹は口を大きく開けた。まるで天から舞い降りた女神のような表情のアモに、心臓を撃ち抜かれたようだった。

そして隣に立つ男も、同じようにアモを見上げて口を大きく開けていた。マックスだった。

キングコングはアモに優しい表情を向けると、今度は宏樹たちに向き直った。少し顔が険しかった。それにもかまわず、宏樹はアモに手を振り返した。アモは相変わらず微笑んでいる。また笛を吹くと、キングコングは座り込み、背を崖につけた。穏やかに目を閉じるその姿は、まるで人間の赤ん坊のように素直で純粋そうに感じた。

ー油断大敵ー

一方その頃、ファロ島の沖合付近にて。
自然豊かで文明の利器が及ばないこの島にはまるで似つかわしくない、エンジンをフル回転させている１０名乗りの高速艇がファロ島へ向かっていた。
「時速３３ノット。現在の速度を維持すれば、およそ３０分後に島へ上陸できます」
元海軍の操舵手が告げると、一行のリーダーであるフォ・インシクはコクリと頷き、傍らで韓国・大宇製のアサルトライフルを握っている血の気が多い部下、ユ・コンテクに向き直った。
「それにしても時間がかかったな」
「ええ。いくら衛星携帯電話でも、島の極まで行かないと電波が入らず、しかもとてつもなく電波が不安定だったそうで。たった２行のＳＭＳを送信するだけでも、１０回以上は失敗したとか」
「原始時代に遡ったようだな。ま、その方がこちらとしても島の連中による抵抗などタカが知れているから、楽で良いがな」
そう言うと、フォはケースからやはり大宇のアサルトライフルを取り出した。２年間の兵役でさんざん使いこなした銃だ。飛び道具など持たぬ野蛮な原住民などひとたまりもなかろう。
船の中はさほど広いわけではないが、そこを埋め尽くすほどの荷物であふれている。いずれもアサルトライフルや弾薬、あるいは指向性炸薬やプラスチック爆弾など、およそ平和なファロ島に持ち込むには物騒過ぎるものばかりだ。
「ヘリコプターで向かっているコンのチームより連絡です。あちらはもう少し早く、島へ到達するだろうと」
「うむ。原因は不明だが、島の周囲はあらゆる電波が通じにくいそうだ。当初の打ち合わせ通り、島の集落を避けつつも我々とハサミ撃ちで侵攻を開始する」

フォが言うと、ユは早くもライフルの安全装置を外した。
「軍では、日本へ上陸した場合の演習をさんざん提案しましたが、クソ上官に却下されました。そこで同じ意志を持つ連中と独自に、少人数による上陸作戦を訓練しました。いまこそ、成果を発揮できますよ」
元より人を撃ちたくて仕方がないユは、ギラついた目つきで言った。
「警戒すべきは日本人の若造らに雇われたオーストラリア人の傭兵だ。アサルトライフルが一挺に減ったとは聞いたが」
「何言ってんです。どうせ予備の弾薬もマガジンも知れたものでしょう。こっちはヘリコプター隊を含め３０名近いんだ。制圧なんて片目つむってもできますよ」
「あともうひとつ。キングコングだ」
するとユは黙りこくった。
「話では、キングコングは普段里からだいぶ離れた洞穴の中で暮らしているそうだな。ヤツが動き出す前にすべてを終わらせないといかん」
「だから、いまこそオレが考案した上陸作戦案が役に立つんですよ。コイツはね、海岸線から2キロも離れた日本の集落を想定している。比べて今度はどうです？海岸線からわずか1キロもない辺りが原住民のボロ家群らしいじゃないですか。作戦所要時間は３０分。良い勝負ができそうだ」
ユはライフルをかまえると、向かう先の島へ銃口を向けている。窓の向こうのファロ島は、さきほどよりだいぶ近づきつつある。
「頼もしい限りだがな、ユ。最低1人は島民を生捕りにする必要があるんだ。調子に乗って全員殺害してしまっては元の朽網だぞ？」
「わかってますって」
そう返事するユは、どこか不満げだ。今回の「仕事」を遂行するに当たり「組織」から送られてきたこの男、極めて高い戦闘能力を持っていることは紛れもないのだが、粗野で凶暴な性格を惜しげもなく披露してくれたことから「狂犬」だの「気狂」だのといったあだ名をつけられている。本人はそれすらも栄誉と捉えているようだが、その凶

暴性故に軍を不名誉除隊となったというのも理解できた。
「お、早速見えてきましたね」
「ヘリコプターか？」
「ええ。ホラ、島の上空ですよ」
　ユは指摘するように、ファロ島の上空を飛び回るものが見える。だが距離が開いており、ここからだと豆粒くらいにしか見えない。フォは双眼鏡をつかむと、覗き口を両眼にくっつけた。
「島に近づくものには災いが降りかかる。たしか、出港前に現地のジジイに警告されたんでしたな。ところが実際はこうして、海からも空からも容易に近づけるではありませんか。迷信深い原始人め」
　ユはそう毒づき、景気づけに焼酎を原液のまま口に流し込む。
　たしかに、島の上空に飛行する物体が存在している。だがそれは綺麗に円を描くように島の上空を旋回しており、ヘリコプターの挙動にしては不自然だった。何より、回転翼が確認できない。
「おかしいな、あんな旋回などできるものか・・・・・!?」
　思わずフォは双眼鏡から目を離した。島を飛び回る存在とは別に、黒煙を噴き出しながら落下するヘリコプターが視界に飛び込んできたのだ。それも編隊を組んでいた2機、同時に落下している。
「ヘリ隊に連絡を取れ！」
　フォが怒鳴ると、通信手がヘリ隊に応答を求めた。いずれも不通の場合流れる雑音が響くばかりだった。
　いま一度、フォは双眼鏡を掲げた。黒煙は薄れ去り、今度ははっきりと島を舞う存在が確認できた。
「・・・猛禽類・・・あれは、コンドルか？」
　フォがつぶやく。異変に気づいたようで、ユや他の乗組員たちもこぞって双眼鏡に群がった。
「いや・・・ここからあれほどの大きさに見えるとなれば・・・」
　そのときだった。
　フォたちの後ろを航行していた高速船からものすごい轟音が炸裂した。金属がちぎられる不快な音が鼓膜を揺らし、神経が痺れるような感覚が全身を駆け巡る。

フォが後方を振り返ると、真っ二つに裂かれた高速船が宙を舞っていた。いや、船が真っ二つとはどういうことだ？こんなことが、あり得るものか・・・？

視覚から飛び込んでくる情報を思考が処理できない。唖然としていると、操舵手が叫んだ。

「本船真下に、正体不明の物体！すぐ近くですそこだ！」

最後はほとんど金切り声だった。同時に、本当の金切り声が聴こえた。鉄を切り裂くような音で、金切り声。

「あっ！ハサミだ！」

見たまんまのことを、ユが叫んだ。赤く巨大なハサミが海面から突き出し、高速船をえぐった。フォの視界は一気に９０度真上に傾くと同時に、それまで足をつけていた床が垂直になった。

ー壮烈、キングコング！ー

日がやや落ちる頃になり、宏樹たち一行はようやく集落へ戻ることができた。キングコングの洞窟を出て、来た道をただ戻るのみであったことで、肉体的にも精神的にも疲労は限界を迎えつつあったのだが、戻るなりチキロ酋長らが用意してくれていた握り拳大の赤いフルーツを食べると、だいぶ身体が軽くなった。

「しかしうめぇな、これ。何の果物なんだろな？」

「農業やってる鍋ちゃんでもわからないの？」

宏樹がいたずらっぽく訊いた。

「だってオレ米農家だもん。果樹作物は詳しくねぇろ」

「ドラゴンフルーツにも似てるが・・・甘みが強いしコクもある。島独自のフルーツなのかもな」

世界中を旅しているだけあって飯島は引き出しが多いが、それでも既知のものではないらしい。

「まあなんだっていいや、うまければ」

そういうと、もうひとつがぶりつく神鍋。

「よくいうよ。さっきまで今夜の食事もトカゲなのか、とか気にしてたのに」

今度は飯島にイジられ、神鍋は食の手を止めた。

「んー、でも、よくよく考えるとトカゲ肉も美味いよな。うん、世界には満足に食べられない人もいるんだから、食べられるだけ感謝しなきゃな」

そういって神鍋が3つめのフルーツに手を伸ばしたとき、また今夜催されることになった食事会の支度へ出ていたコンノ二世と三世の親子が慌て気味にやってきた。続くように村人が血相を変えて槍や弓を持ち、海岸の方へ走っていく。

「どうかしたの？」

そう宏樹が訊くと、粗い呼吸を整えて三世が口を開く。

「海の悪魔、やってきた！島に誰か近づいた！」
「いまからみんなで力を合わせて立ち向かう！宏樹さんたち、アブナイからここにいて」
　周りを見ると、男性は血気盛んに怒鳴り合いながら集落を走り抜け、女性や老人は子どもを抱えて屋敷の中へ逃げ込んでいる。崖下に横たわっていたゴロもそんな雰囲気を察したのか、居眠り状態から目覚めて雄叫びを上げると、イキリ立って走り出した。
「いやこれ・・・ＹｏｕＴｕｂｅｒ的にはすごくオイシイシチュエーションだよな？」
　果物の汁が唇から垂れるのもかまわず、神鍋がつぶやいた。
「でも・・・海の悪魔って言ってたよ？なんか怖くない？」
　こういう臆病なところが、本当は自分がＹｏｕＴｕｂｅｒに向いてないのではないかと自分で思えてしまう。宏樹は言いながら歯噛みしたい気分だった。
「かといってただ隠れていられるものか。オレたちが何のためにこの島へきたのか、行動原理はそこにあるだろ」
　飯島の意見が出たことで、宏樹たちの行動は決まった。各々ｉＰｈｏｎｅの動画を起動させると、海岸線へ突貫する村人に続いた。それをテントで見かけたマックスは立ち上がった。Ｇ３６アサルトライフルを抱えながらも戸惑うブンチャヤとボロロと目を合わせると、首筋の後ろを掻いた。
「相変わらず困った連中だが、あんなんでも身柄を保護するのがオレらの仕事だからな・・・行くぞ」
　少なくとも自分達の武器は、村人たちが手にしているものより数段威力が強い。何が現れたかはわからないが、槍や弓矢よりかは役に立つだろう。
「ブンチャヤ、予備の弾薬すべて持て。これだけの騒ぎだ、相手はタダモノではあるまい」
　マックスに言われ、不安げに５．５６ミリ弾を装填した予備のマガジンを３つ、ケースから確認する。それから急ぎ走り出し、先行する宏樹たちの前に達する。

「いいかボウヤたち。仕事熱心なのはお互い様だ。だがお前らの警備を請け負っている以上、オレたちの後ろに下がって行動しろ」
自分たちを差し置いて前に出る様とマックスの言動にイラつきはするが、身の安全を保証してくれる相手である。神鍋と飯島は渋々といった感じで頷いた。
海岸へ続く洞穴に差し掛かる頃には、宏樹と飯島の息が切れかかってきた。さっき食べたフルーツで体力が回復したとはいえ、さすがに強行軍の後だ。身体が水分とビタミンを欲するのがよくわかった。
海岸線に出ると、陽が暮れて闇夜が広がりつつある空の下、非対称に明るく映えているエメラルドグリーンの海面が荒れていた。白く波立つ波打ち際のはるか先には、激しく泡立つ海面が猛り狂っている。そして耳を刺すような、高く不快な音。それはまるで、生き物が啼くように聞こえた。
「な、なんだありゃあ!?」
神鍋の素っ頓狂な声が上がった。泡立つ海面から、２本の大きく赤いハサミが突き出してきたのだ。続いて、不快な啼き声を発しながら顕になる、大きな頭と胴体。
「エ、エビ!?エビのバケモン出たすけよぉ!!」
興奮して新潟言葉が収まらない神鍋。宏樹は絶句しながらｉＰｈｏｎｅを向ける。画面越しにも感じられる、異様な光景。武器を手に威嚇しまくる村人たちと、そんな人間など意も介そうとしない、巨大なエビ。
「こんなヤツ・・・まさか」
飯島はｉＰｈｏｎｅで撮影しながら、何かをつぶやいている。
「ヒロキン、２２年前にファロ島で大地震が起きて以降、島に近づく船舶はみんな遭難したって話だったよな」
「う、うん」
固唾を呑みながら、宏樹は答えた。
「その原因が、あのエビの怪獣だったとすれば?」
飯島の推理は状況証拠に過ぎないが、そんなことを吹き飛ばすほどの説得力があの巨大なエビからは感じられた。

巨大なエビは甲高く啼くと、ハサミを振り上げて海岸線へ進んできた。村人たちは弓を放ち、槍を投げるが、あの見るからに堅そうな甲殻を貫けるとは到底思えない。
「おし、エビラ。ヒロキンに聡君、今からアイツの名前エビラな！」
喧騒の中、ひとりトンチンカンなことをわめく神鍋。
「エビラ・・・」
「そんな安直な・・・」
「わかりやすくて良いろ!?」
そんなことはどうでも良い。いやこの際名前を借りてエビラと呼称しよう。エビラはゆっくりと、しかし獲物を定めるようにこちらを目指して白波を立ててくる。
「こりゃあ・・・迫撃砲か対戦車ライフルでも太刀打ちできるかどうか、だな・・・」
契約通り宏樹たちの警護をするマックスだが、あの表皮にはどう考えても手持ちのアサルトライフルでは威力不足だろう。せめてもっと接近して、あの黒く粒状の目玉さえ狙い撃ちできればそれなりにダメージを与えられそうな気もするが、その前にあの大木よりも太いハサミの餌食になることは間違いない。
すると地響きを立てながら、ゴロが現れた。だがゴロは海岸線から大きく吼えるばかりで、海へ入ろうとしない。エビラは自分とほぼ同じくらいの体躯をしたゴロを見て動きを止めたが、やがて前進を始めた。
「おいゴロ！やっちまえー！」
神鍋が怒鳴るものの、ゴロは威嚇の咆哮を上げるばかり。
「鍋ちゃん、彼らは身体こそ大きいものの野生生物だ。陸上最強と謂われるホッキョクグマだって、海に落ちればアッという間にシャチの餌食になる。それと同じで、きっとゴロは海に入れば勝ち目がないことを知っているんだ。自分とは異なるテリトリーに足を踏み入れることのリスクを本能で察知してるんだよ」
「ぐぬぬぅ、それはそうだが・・・」
そのときだった。また、あの法螺貝のような音がした。ただし今度

は、いままでのような穏やかなものではない。力強く、そして何かを鼓吹するように猛々しいものだった。
「おい、あそこの崖」
飯島が指さす方を見ると、崖のてっぺんに佇む女性の姿があった。
「あれは、アモ」
宏樹がつぶやく。また、あの法螺貝の音がする。
「おーい、アモ！」
「危ないぞ！」
驚いたことに、宏樹とマックスは同時に叫んだ。ハッとして互いの顔を見合わせ、やや気まずそうに顔を背ける。
「・・・ボー」
「ボー！」
村人たちが口々に言葉を発した。チキロ酋長が何かを怒鳴ると、みんな矛を収めて砂浜にひざまづいた。大地を揺らす音がして、アモが立つ崖の頂上に何かが姿を現した。
「キングコング！」
宏樹が叫んだ。アモの笛に呼応するように、キングコングは大きく吼える。それを受けたエビラは歩みを止めた。明らかにゴロと対峙したときとは、空気が違っている。
それでも大きくハサミを振り上げ、山頂に仁王立ちするキングコングを威嚇するエビラ。しかし如何にキングコングといえど、海へ入り込んでエビラと組み合うつもりはないらしい。お互いのテリトリーを侵すことに、多少の温度差はあれど両者とも慎重な様子だ。
キングコングは短く唸ると、地面をつかみ、自身の上半身くらいある大きな岩を、気合い一閃引き抜いた。それを頭上で大きく掲げると、強く見据えてエビラに投げつけた。
自分たちの頭上を巨大な岩石が舞ったことで、宏樹たちも村人たちも慄いた。パラパラと小石が降ってきて、慌てて岩石の弾道下から離れる。
放たれた岩石はしかし、エビラのハサミに当たって跳ね返った。いや、エビラが打ち返してきたのだ。

またも宙を舞った岩石は、キングコングに向かう。お返しなどいらん、とばかりにキングコングは岩石を殴りつけた。
だがなおもエビラはハサミを振るい、難なく岩石を弾き飛ばす。キングコングは一度受け止めると、イラつき気味に投げ返す。
世にも不思議なラリーが幾度が続く。宏樹たちは上空を往復する岩石の弾道を追い、左右に首を向け続ける。両者まったくスタミナを切らすことなく、膠着状態が続く。だが先にこの状況にストレスを露わにしたのはキングコングだった。低く唸り声を上げ続ける様は、なかなか決まらない状況にイラついているように見える。大きくともキングコングは哺乳類なのだ。
対してエビラには、そうした情緒はない。時間がかかろうと何があろうと、最終的に勝利して獲物を仕留めることにしか思考回路が働かない。こうした状況においては、精神的なタフさが最後に勝るのだ。
「ボー!」
そうした空気を察したのか、アモが声を張り上げた。何を思ったのか空中で宙返りをしてみせた。
それを見たボーは、彼女とまったく同じ挙動をした。空中で宙返りをすると、飛んできた岩石に振り回された右足を強かに打ちつけた。
これまでより強く、そして速く岩石が軌道を走った。いつものようにエビラはハサミで打ち返そうとしたのだが、ハサミを当てた途端にハサミにヒビが入ってしまった。
痛覚は人間と変わらないのだろう、より高音域の啼き声を発しながら、ハサミをバタつかせる。ようやく手ごたえがあったことに興奮したのか、キングコングは大きく吼えた。
だがエビラの怒りに火がついたようだった。無事な左のハサミを振り上げ、八つ当たりするかのように海面を薙ぎ払う。津波のような水飛沫が海岸線に降り注ぎ、宏樹たちは痛いほどの飛沫を浴びる。
そのとき、集落から数人の村人が現れた。大きなツボを数人で運んできたのだ。チキロ酋長が何かを指示するも、重量があるのかその足取りは男数人がかりでも重苦しい。
「コンノ二世、あれは?」

飯島が訊いた。
「あ、あれは海の悪魔がキライな黄色い木の実から採れた汁ネ！アレ、海に撒くと海の悪魔、逃げてイク」
「よっしゃ、加勢するぜ」
それを聞いた神鍋は両手で頬を叩き気合いを入れると、重過ぎて悪戦苦闘している男衆に混じり、なんとたったひとりでツボを持ち上げた。
「鍛えまくった筋肉ナメんなよぉ！筋肉は裏切らない！」
自身のＹｏｕＴｕｂｅチャンネルでよく発するセリフを口にしながら、怒涛の勢いで海にツボを投げ入れた。海面に黄色い液体が混じり出し、それはジワジワとエビラの方に広がっていく。
「まるで人間キングコングだな」
そんなことを感心したように飯島がつぶやいている最中、エビラに動きがあった。まるで虫が虫除けスプレーをかけられたように、はたまたドラえもんがネズミと遭遇したように、悲鳴のような啼き声を上げながら島から遠ざかり、やがて海中に没していった。
村人たちはにわかに騒がしくなり、やがて歓声を上げた。どうやら、危機を脱したようだ。キングコングにも喜びが伝播したらしく、勝利の雄叫びを高らかに上げる。やがてキングコングは山を降り始めた。それを受け、アモも断崖を軽やかに下ってきた。
村人たちは急ぎ、集落へ戻り始めた。
「ミナサン、いまから戻るヨ。勝利の儀式、始めマス」
コンノ二世が言ってきた。
「なんだぁ、勝利の儀式って」
ひと仕事終えた神鍋が誰にともなく訊いた。
「もしかして・・・」
なんとなく、宏樹にはわかった。修じいちゃんがよく話してくれた。昔ファロ島を訪れたとき、村を大きなタコが襲った。そこに現れたキングコングは大ダコを撃退すると、村人の祈りの舞を捧げられ、眠りこけた。そしてそのキングコングを、日本へ運ぼうとしたこと・・・。

「行こう！」
宏樹は神鍋と飯島の手をひっぱり、駆け出した。なんとなくだが、幼少の頃修じいちゃんから聞かされていた情景が現実に見られるかもしれないと思うと、胸が高鳴った。
集落に戻ると、村人が勢揃いしていた。チキロ酋長、そしてアモが先頭に立ち、やってきたキングコングに祈りを捧げている。
キングコングはそんな村人たちに首を垂れると、足元にあるツボを掴んだ。豪快にツボの中身を飲み干すと、いくつか並んだツボの中身を同じようにして平らげていく。
すっかり満足したように口を拭う。赤い液体がキングコングの口元にまとわりついている。大きく息を吐くと、キングコングは座り込んだ。
チキロ酋長が掛け声を上げた。
突然、太鼓の音が鳴り響き、一定のリズムで打ち鳴らされる。村人たちが唄い始め、女性と子どもが前に出てきて独特の舞を踊り始めた。
高らかに唄声と太鼓のリズムが夜の空気を鳴らし、次々に篝火が焚かれる。すっかり夜が訪れたファロ島は、村人の舞と打ち立てられた無数の篝火に彩られた。
どんどんテンションを上げて唄い踊る村人たちと対照的に、キングコングは目を瞑り、やがて深い眠りについた。
「なんかわっかんねぇけど、綺麗だなあ」
神鍋がつぶやいた。
「元気、出てくるな」
飯島も言葉少なめに言った。いずれも顔が綻んでおり、神鍋などはいまにも踊りに混ざりたそうにしている。
宏樹はｉＰｈｏｎｅで撮影しながら、村人たちのしんがりで踊るアモに目を奪われていた。美しく幻想的、そしてどこか儚く寂しげな彼女の舞に、すっかり夢中になっていた。ふと気がつくと、マックスも同じように口を開けてその様子に見入っている。
宏樹は思わずｉＰｈｏｎｅの撮影を止めた。もう充分撮影したし、

後に最後まで撮影しなかったことを神鍋と飯島に咎められたのだが、これは・・・この舞だけは、なぜだかわからないが公開したくない気分だった。自分の頭の中に、しっかり焼き付けておきたいと強く感じたのだ。

ー指定地域に出かける際は、予防接種を忘れずに。by外務省ー

神鍋のいびきに苛まれていた宏樹がようやく微睡に落ちたのは、おそらく日付が変わった頃だった。この日、エビラに勝利したキングコングが赤い汁をたらふく呑んで眠った後、村人たちからトカゲの肉を振る舞われた宏樹たちだったが、腹が満たされて満足したのか神鍋が一番早く床についた。

仕方なしに宏樹と飯島は隣の小屋で睡眠を取ることにしたのだが、なんと闇夜をつんざき神鍋のイビキが届いてくる始末だった。

機嫌を損ねたらしい飯島は耳をふさいで転がったまま。宏樹は隣の小屋へ赴き、神鍋の鼻をつまむ等手を施した。功を奏したのかイビキが小康状態になり、ようやくホッとひと息つくことができた。

だが、今度は隣で寝ていたはずの飯島がおかしな声を出し始めた。

「聡くん?」

寝ぼけ眼で問いかけるが、返事がない。ずいぶんと息が荒く、暗闇でも汗をびっしょりかいているのがわかった。

明らかに普通の様子ではない。宏樹は身を起こすと、飯島を少し揺さぶった。

「聡くん、どうしたの?」

すると触れた手に、びっしょりと汗がついた。いくら南国の夜とはいえ、宏樹はここまで汗をかいていない。

「聡くん!」

肩を揺さぶると、荒い息づかいの飯島が仰向けになった。

「ちょ、どうしたの?」

「・・・おかしい、なんか・・・・身体が熱いのに寒気するんだ」

ぜえぜえ息を切らしながら、飯島は答えた。宏樹はとっさに飯島のおでこに手を当てた。

「うわっ、すごい熱・・・」
　すると飯島は宏樹の手を払い除けた。邪険な行動に思わずムッとする宏樹。
「触らない方が良い・・・もしかしたら、赤痢とかマラリアとか・・・感染症にかかってるかもしれない・・・」
　そんなバカな、と言いたくなったが、旅をテーマに動画を作っている飯島の言葉には説得力があった。そういえば、飯島が前に上げた動画でインドを訪れた際、屋台で糸を引いたカレーをうっかり食べてしまった後、3日間高熱に苛まれた様子を投稿したものがあったことを思い出した。
　ふと、隣の小屋が気になった。神鍋の豪快なイビキが聞こえてこない。迷惑この上ない神鍋のイビキだが、ここまで静かだと何かあったかも、と気にならずにはいられなかったのだ。
　宏樹は隣の小屋に入った。イヤな予感は的中した。神鍋も息が荒く、ずいぶんと汗をかいている。
「鍋ちゃん!」
「ヒ・・・ヒロキン・・・?」
　3人のｉＰｈｏｎｅは持ち込んだ発電機で充電中だ。灯りがなかったが、暗がりでも神鍋が苦悶に満ちた表情をしていることは理解できた。
「な、なんか・・・インフルエンザかな?熱っぽさすごくて・・・関節痛ぇ」
　ただごとではなかった。アップルウォッチを見ると、午前4時を回ったところだ。一応冬に当たるため日の出はまだ先だが、かまっていられない。
「夜中困ったトキ、わたしたちココいる」
　コンノ親子が教えてくれた小屋へ走り、寝ているときも帽子をかぶったままのコンノ親子を叩き起こした。寝ぼけ眼の2人に事情を説明すると、起き上がって来てくれた。
「三世、ランプ持ってクル」
　コンノ二世が息子に指示した。この親子、普段から日本語で会話し

ているのがなかなかに不思議だったが、いまはそんなことどうでも良かった。
三世がランプを持ってくると、まずは神鍋、続いて隣の飯島の全身を照らした。三世は不安げだが、二世は心当たりでもあるのか、落ち着いて2人の身体を観察している。
「ヒロキンさん。2人ともムカデに刺されたネ」
「ム、ムカデ??」
「コレ、見るネ」
そういってランプに照らされる飯島の左ふくらはぎに、カサブタのような傷ができているのが認識できた。
「鍋サンの足にも、おんなじ傷あったネ。コレ、ファロ島にいるムカデの仕業。ムカデ刺されると、高熱出ル。ひどい風邪ひいたときみたいナ熱、出るネ」
「そんな・・・ねえ、2人は大丈夫なの?」
「ヒロキンさん、ダイジョーブ。ファロ島、薬の島。ムカデに刺されてもヘッチャラな木の実アルね。島の人たち、普段から木の実食べてるからムカデ刺されてもヘーキ。でも木の実食べてないお客さん、刺されると熱出るケド、木の実食べて大人しくしてると1日で良くなるヨ」
ホッと胸を撫で下ろすと、熱にうなされる神鍋と飯島にその旨話した。夜明け前ではあったが、コンノ三世が村人を呼びに行ってくれると、ほどなくして深く皺を刻んだ男性と、チキロ酋長がやってきた。
老父が紫色の木の実を潰して出てきた汁を2人に含ませている傍らで、チキロ酋長は笑顔で宏樹の両肩をバンバン叩き何かを告げた。
「心配だと思うケド、この木の実口にすればダイジョーブ。次、日が沈むくらいには良くなる、言ってマス」
コンノ二世が翻訳してくれた。安心した宏樹の顔を見て、チキロ酋長はしっかりと宏樹の両肩を抱いた。
ふと、宏樹は思いを巡らせた。村のはずれにある、マックスたちのテント。彼らは大丈夫だろうか。
事情を話してランプを持ったコンノ三世とテントへ赴くと、案の

定、ブンチャヤとボロロが神鍋や飯島と同じように唸り声を上げていた。
「やっぱり・・・大丈夫？」
横になって苦しそうにするブンチャヤとボロロに声をかけるが、マックスに制された。
「近寄らない方が良い。感染症だとすれば厄介だ」
マックスは薄いゴム手袋をハメ、バンダナで口と鼻を覆い２人に経口補水液を与えている。
「ねえマックス、実は鍋ちゃんと聡くんも同じ症状だったんだ。ムカデに刺されたんだって」
「なに、ムカデ？」
宏樹とコンノ三世が事情を説明し２人を照らすと、それぞれ膝と肘にかさぶた状の傷が確認できた。
「村にある木の実のめば、１日で良くなるっていうから、２人にも・・・」
そこまで言いかけて、宏樹は言い淀んだ。そうだ、マックスたちは村人に歓迎されていないのだ。
「こういう商売なんでなぁ、解熱剤や栄養剤は用意している。それでなんとか凌ぐさ」
マックスはそう言ったが、宏樹はコンノ三世に顔を向けた。
「ねえ三世、チキロ酋長に頼んでみたい。ブンチャヤとボロロにも木の実ほしいって」
するとコンノ三世は宏樹の意を汲んで頷いたが、チキロ酋長のしかめ面も同時に思い出し、渋い表情になった。
「ウーン・・・」
「ほっとけないでしょ！」
宏樹の強い口調で、コンノ三世は意を決したように頷いた。そこまでしなくても、といった表情を浮かべるマックスをヨソに、宏樹とコンノ三世はチキロ酋長の元に走った。
事情を説明すると、チキロ酋長は困った顔になった。そこまでマックスのような白人に嫌悪を抱く理由があるというのだろうか。
「酋長、お願いします。あなたたちがどうしてマックスみたいな白人

を嫌うか、それはわからないです。でも、このまま放っておくのはすごくかわいそうだと思うんです。どうか、この通り」
宏樹は大きく頭を下げた。ふと、このお辞儀がファロ島の住民に理解できるものなのか、気になった。
するとチキロ酋長は険しい顔をしながらも、宏樹に何かをしゃべった。それを聞いたコンノ三世は明るい表情になった。
「よろしい。宏樹サンの頼みなら、良いでしょう。木の実、あげマス、言ってマス」
宏樹は頭を上げると、チキロ酋長の手を握りガッチリと握手した。もしかしたらファロ島には握手の習慣はないのかもしれない。頭にはてなマークを浮かべながらも、チキロ酋長は宏樹の手をギュッと握り返してくれた。

神鍋と飯島の症状が緩和され、少し仮眠を取るために横になった宏樹だったが、ふと気がつくとすっかり夜が明けていた。
２人が気になって隣の小屋を覗くと、コンノ三世と木の実を用意した老人が何かを話しているところだった。
「宏樹サン、おはようございマス」
「おはようコンノ。ねえ、２人は大丈夫？」
心配する宏樹をよそに、モソモソと起き上がる神鍋と飯島。
「おうヒロキン。おかげさまでだいぶ熱が下がったよ」
そうはにかむ神鍋。たしかに明け方、木の実を与えられる前よりはだいぶ元気そうだが、今ひとつ表情は冴えない。
「心配かけたね、ヒロキン」
飯島も同じだった。熱は下がったのだろうが、まだ病中、といった雰囲気だ。
「お２人トモ、今日１日、ゆっくりする良い。そうすればスッカリ元通り」
「でもさコンノ、そしたら今日は動かない方が良いってことなの？」
今日は黄色い木の実、通称ファロラクトンεの調査探検に向かう日

だ。ファロ島の滞在はあと2日。明日は予備日として確保しているのみであり、できれば今日のうちに調査を済ませておきたいところだ。
「ウン。病中病後、療養大切ネ。無理するの、良くナイ」
　それはそうなのだが・・宏樹と神鍋、飯島は互いに視線を向け合った。
「おい、ちょっと良いか」
　ふいにマックスが小屋に入ってきた。コンノ三世は平常だが、傍らの老人に狼狽の色が浮かんだ。
「ブンチャヤとボロロだが、熱は下がったが倦怠感を訴えている。今日の調査警備は同行させられない。どうする？」
　マックスが訊くと、ますます困惑する神鍋と飯島。そこを尻目に、宏樹が手を挙げた。
「あの、僕とマックスに、コンノパパの3人でどうかな？」
「・・・なんだと？」
「ねえコンノ、黄色い木の実がある辺りまでは、そんなに遠くないんでしょ？」
「う、うん。そうですガ」
「なら、鍋ちゃんたちは休んでてもらってさ、僕らだけでなんとかできちゃえないかな？」
　神鍋は忸怩たるものがあるのか唇を噛んだが、この体調では致し方ない。飯島は宏樹の提案を含み締め、案に賛成するように頷く。
「ヒロキン、簡単にいうが、昨日オレたちがしてたことを見なかったのか？オレたちも撮影しながらお前たちの警備に当たってたんだ。だいたい、オレたちの撮影機材は片手で扱えるｉＰｈｏｎｅじゃないんだぞ。ここはやはり、無理せず全員の回復を待ち、明日に移すべきだ」
「それなら大丈夫。あのビデオカメラ、使ったことあるよ」
「・・・・なに？」
「アタッセス社製のやつだったでしょ？音声もクリアに拾えるやつ。オレたち、数年前に富士山の未探訪風穴探検したんだけど、そのとき使った機材と一緒だもの」

そういえば、と神鍋は顎に手を当てた。あのときはｉＰｈｏｎｅの照明では光量不足の可能性があるため、比較的軽量の業務用撮影機材をレンタルしたのだった。その際は撮影クルーも数名ついたのだが、手狭な洞穴を探る場合などは３人で代わりばんこにカメラを持ち、撮影したものだ。

「思ったより軽かったし、オレひとりでも抱えて歩けると思うんだよね。で、撮影したデータもらって、こっちで利用できそうな部分編集さえさせてもらえれば」

宏樹の提案にマックスはしばし思案していたが、やがて得心したように頷いた。

「わかった。それならその形で進もう」

支度をしてくる、とマックスは小屋を離れた。すかさず神鍋と飯島が宏樹に寄ってきた。

「なあヒロキン、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫でしょ。オレたちあのカメラ持って１日近く富士宮の地下探索したじゃん。それに比べたら」

「そうじゃなくて」

「あのマックスという男と一緒というのは、いささか危険じゃないか？」

飯島が被せてきた。

「危険、て、ああ・・・ファロラクトンεのことだよね？まあ・・・その辺りも含めて探り入れてみようかなって」

「大丈夫か？」

飯島が訊くと、神鍋も表情で訴えかけてくる。

「なんとか大丈夫でしょ。コンノだってきてくれるし。おかしなことにはならないんじゃないかな」

宏樹はそう答えた。実のところ、神鍋や飯島の懸念も理解しているが、マックスがそこまで危険な人物だとは宏樹には思えなかった。むしろ、彼が抱える秘密が、今回の冒険に大きく関わってきそうな雰囲気を感じていた。そこを知れるチャンスだとすら思っているのだ。

しばらくの後、支度を終えた宏樹とマックス、コンノ2世と3世親子、そして神鍋と飯島から同行を頼まれたチェ支社長一行は集落を出発し、昨日とは異なる山道を進んでいた。
「支社長って言っても最近入手した若手社員と変わらない。本社の言うこと絶対でわたしは小間使い。偉くもなんともない。だから本社から横ヤリ入らない今日だけは昼寝たっぷりさせて」
そういって昨日は集落に残り、早くから焼酎をかっ喰らって居眠りしていたチェだが、なんと昨夜のエビラ騒動の間も眠りこけていたらしい。話をきいてあきれるばかりだったが、飯島によると韓国の財閥系企業はどこも似たようなものらしい。本社と支社のヒエラルキーは想像以上に大きく、拒否権どころか対話すらできず一方的に命じられる関係性のようだ。
先頭を地理に明るいコンノ2世が務め、カメラを抱えた宏樹と、アサルトライフルを携えたマックスが並ぶ。最後尾にカメラのバッテリーや飲料水、食料を持つコンノ3世とチェが続く。
なるほどアップダウンな獣道を繰り返した昨日に比べ、大小さまざまな礫岩が散乱して靴底を圧迫こそするも平坦な今日の道の方が身体は楽だ。
それに今日は目指す場所まではそう時間はかからないらしい。休憩をはさみながらでも、昼過ぎには調査と探検が終わりそうな予感がする。
とはいえ肩にカメラを担いで歩くのはまあまあしんどい。富士宮の地下空洞は冷たく湿った空気だったが、こちらは南国の暖かい風と強烈な陽射しが降り注ぐ。肩当てのタオルがだいぶ汗を吸い込んでいるのがわかる。
「どうだヒロキン？もし大変ならば、チェ支社長に撮影代わってもらっても良いんじゃないのか？」
マックスが訊いてきた。いつもならズケズケと物申すところなのだろうが、疲労の色が濃いとはいえカメラをしっかり使いこなしてい

る宏樹を見て、当初の敵愾心もだいぶ薄れてきたように思える。
「いや、平気。もうちょっと進んだ辺りで休憩させてもらえれば」
「そうか。もう少し進んだら、撮影箇所に注文をつけさせてもらう。そのときはしっかり頼むぞ」
「ＯＫ」
　というか、当のチェはでっぷりと出た腹を揺らし、ぜいぜいと荒い息遣いで歩いている。とても彼にカメラ撮影を頼む気にはなれない。
「てゆうか、マックスはこのカメラで何を撮影しようとしてるの？」
　なるべく穏やかに訊いたつもりだったが、一瞬マックスは顔を顰めた。あまり話したくないらしい。もしかしたら、コンノ親子がいないタイミングなら切り出しても良いかもしれない。気まずい沈黙はチェの座り込む声と音でかき消された。
　ガブガブ水を飲むチェだったが、噴き出る汗の方が多そうだ。マックスへの警戒もあり神鍋と飯島が同行を頼んだのだが、人選に間違いがあるような気もしてきた。
「ここ過ぎれば、荒涼とした広場出る。そうすればもうひと息ヨ」
　コンノ2世の説明に、マックスは黙って頷く。宏樹は急激に気温が上昇したことでレンズに曇りが生じてきたことに気づき、レンズの外側を外して中の部分を軽く磨いた。
「ほう、細かい部分まで気がつくな」
　その様子を見たマックスが声をかけてきた。
「一応、ＹｏｕＴｕｂｅｒだからね。こういうことも仕事のうちだよ。このままじゃレンズに水滴できて画面埋め尽くされちゃうから」
　するとマックスは感心したようにふんふん頷いた。
「オレはＹｏｕＴｕｂｅｒなんてのは、人様を笑いものにして金を稼ぐ低俗な連中としか認識していなかったが。なるほどいろいろ苦労や努力があるんだな」
　何の気なしに発した宏樹の言葉だったが、マックスの雰囲気はだいぶ険しさが解消されたように思える。
「まあね・・・決してやってて楽しい仕事ともいえないし」
「ほう？事前のにわか知識だが、お前たちは日本でトップクラスのＹ

ｏｕＴｕｂｅｒなんだろ？」
「そうだけどさ・・・いろいろ、ね。いや、鍋ちゃんや聡くんはすごいよ。マッスルに農業に旅・・・得意分野を売りにして発信できてるんだから。オレなんて、最近他のＹｏｕＴｕｂｅｒがやったことをマネしてばっかりで、あの２人みたいに芯がないんだなって思えてさ」
　不思議そうな顔をするマックスに、思わず宏樹は口を押さえた。
「ああ、ごめん。つい愚痴っぽくなった」
　マックスは言葉に出さず、うんうんと頷いた。神鍋と飯島がいないことで、つい本音を話してしまったのだ・・・。
　そろそろ出発するよ、とコンノ２世が呼びかけたとき、またあの法螺貝が聞こえてきた。同時に、妙な方向から風が吹き込んでくる。
「みなサン、ちょっとそこの岩場に隠れまショウ」
　コンノ２世が少し慌てた様子で声をかけてくる。
「あれは・・・！」
　空に注目したマックスは、咄嗟にアサルトライフルを向けた。人間の倍以上、いやそれどころか大型トラックくらいの大きさだろうか。大きな鳥が飛んでいたのだ。
「アモが笛で存在知らせてる。ダイジョーブ思うけど、ホラ、早く物陰に」
　コンノ２世が小声ながらも強い口調で呼びかける。ライフルを構えたまま、マックスは宏樹を後退させた。
「な、なんだありゃあ？」
　真っ先に岩場に隠れたものの、その巨漢ぶりが物陰からはみ出ているチェが素っ頓狂な声を出した。
「コンドル。空の王者ネ」
「コンドルって・・・あんな大きいのが？」
「そう。コンドル現れてから、島に近寄る飛行機みんな襲われたネ。ときどきには地表の動物も襲う。デモ、ダイジョーブ。アモの笛、あれば」
　コンドルは地表の宏樹たちに気づいているようだが、アモの笛のおかげなのか、それ以上近寄らず飛び去っていった。

「なるほどな。海から近寄るのは昨日のエビの化け物。空から近寄るのはあの大コンドルが襲っていたわけだ」
　マックスが宏樹に言った。
「でもさ、オレたち上陸したときはエビラもアイツも出てこなかったよ。どうして・・・」
「今だから言える、宏樹サン、あなた方運がとっても良い」
　コンノ２世は宏樹の肩をポンと叩いた。
「あのときは雷、なってた。雷がくると、ボー、気が立って強くなる。それを、海の悪魔もコンドル知ってる。だからおとなしかったネ」
「じゃあ、我々がここに上陸できたのは、本当に運が良かった、ということか」
　マックスの言葉に、宏樹は背筋が冷たくなった。もしもあのとき、雷鳴が天に鳴り響いていなかったら・・・・・。

ーそういえば昔、マッドマックスって映画があってだなあ・・・ー

鬱蒼と繁るジャングルばかり、宏樹がファロ島に抱いていた印象はそんなところだったのだが、この荒涼とした岩だらけの大地を見て、そんな印象も拭われた。だがその一角がもともとそうだったというより、何かの拍子に新しくできたような感覚を受けた。
「２２年前の大地震で、ここ大きな地殻変動起きたネ。森がすべてひっくり返って、いまはまだ岩場、ガレ場になったネ」
コンノ二世の解説にも、マックスは神妙な顔をしている。訝しげに思いつつも、宏樹はやや先の窪地に湛わる黄色い池に注目した。
「あそこ、黄色い木の実の泉ネ。黄色い木の実、海の悪魔追い払うだけでなく、島のみんなの源になってル。大地震のあと、どういうことかあそこに泉できて、その泉の水、みんな飲む。これでみんないつもとっても元気いっぱいネ」
コンノ二世がそう説明する。よく見ると、泉の周りだけ蔦が張っており、その蔦に黄色い木の実がなっていた。
「じゃあ、あの蔦に生えてる木の実が、あの泉に溶け出してるの？」
「もしかシタラそうカモ。前から黄色い木の実、あったけど、地震の後だから、大地が裂けたことでいろいろ変わったカモしれナイ」
薬学博士の唐津教授が話していたファロラクトンεは、この泉で間違いなさそうだ。旅の目的を果たせたとわかった宏樹は、急に抱えるカメラの重さを痛感した。
「あれ？」
カメラを下ろすと、泉の傍にアモの姿が見えた。さっき大きなコンドルが現れたときもそうだが、まるで宏樹たちの行先に先回りしてい

るようだ。
「ねえ、アモ」
　日本語が通じると思い、宏樹はアモに駆け寄った。少しビックリしたような目をこちらに向けたが、アモは微笑んで宏樹に会釈した。
「宏樹、サン?こんにちは」
　初めて会ったときは感じなかったが、彼女の日本語はややたどたどしい。どことなくコンノ親子の話し方に似ているところを見ると、もしかしたらコンノ二世から日本語を教わったのかもしれない。
「あ・・・・そっか、急にごめん」
　アモは目が見えないのだ。そんな相手に急に話しかけては、驚かれるのも当たり前か。
「いいえ、ダイジョーブです。声と雰囲気で、宏樹サンてわかりマシタから」
　アモは宏樹の方に顔を向けた。
「何でわかるの?」
「目は見えなくても、いろいろなことが見えるんです、ワタシ」
　そうはにかむアモに、宏樹は胸をときめかせた。
「ねえアモ、さっきは助けてくれてありがとう。あの大きな鳥を追い払ってくれたんでしょ?」
「ええ。でも、彼は海の悪魔と違って積極的に人を襲うことはしません。彼らはダイジョーブだよ、そう伝えたかったンデす」
「でもさ、その笛だけで島の怪獣たちを大人しくさせられたりできるんでしょ?すごいね、アモ」
「いいえ・・・」
　ふいに、彼女は顔を背けた。頬がやや赤くなっているのは、淡い褐色の肌からも窺い知れた。
「ヒロキンさん、ヒロキンさん」
　するとやや離れた場所から、コンノ三世が手招きしてきた。
「宏樹サン、アモ、ビックリしてる。落ち着かせてあげテ」
　駆け寄ると、コンノ二世が言った。
「アモ、島の中でも神様に近い存在。酋長同じくらいすごい。我々、気

軽におしゃべりできナイ。だから彼女、話しかけられるのに慣れてナイ」
「でも・・・なんだろ、やっぱり彼女、どこか親しみあるんだけど・・・」
ふと、思った。良太郎おじさんの娘の真祐ちゃん。彼女も良太郎おじさん夫妻と同じく消息不明だ。まさかとは思うが・・・。
少しすると、アモは黄色い泉の水を壺に掬い上げると、宏樹を一瞥して踵を返した。
「おい、彼女が気になるのか?」
宏樹の肩に、マックスが手を置いた。
「う、うん。ちょっとね・・・」
だがマックスは、宏樹の心情を察してからかい半分に声をかけたワケではなさそうだ。
「ねえマックス。マックスもアモのこと、気になってるんじゃない?」
図星を突かれたのか、マックスは顔色に動揺が浮かんだ。ちょうどチェ支社長が空腹を訴えたので、コンノ親子が昼食の支度を始めたのを尻目に、宏樹は思い切って訊いてみることにした。
「マックス。僕らは君に訊きたいことがあるんだ。まず、僕らより立派な撮影機材を使って、この島を撮影しようとしてるのはなぜか。そして・・・一昨日、島に上陸したときにチラッと見えたんだ。マックスが持っている写真。そこのところ、訊いても大丈夫かな・・・?」
一気にマックスは渋い表情になった。特に、写真の件を切り出したときの表情の強張り具合は顕著だった。
「いや、あの・・・話したくないんなら、ごめん。でも、こうして一緒に島を旅しにきたんだ。オレはマックスたちを一緒の仲間だと思ってる。良かったら、話してくれたら嬉しいな、って」
宏樹はマックスの顔をうかがいながら、一気に喋った。彼だけではない、神鍋や飯島も疑問に思っていることだったからだ(ただし写真の件をしっているのは宏樹だけだったのだが)。
ちょうど、昼の支度を終えたコンノ親子とチェ支社長がフルーツを食べ始めた。彼らの意識は、手に持つ瑞々しい赤いフルーツに向けられ、宏樹とマックスが会話している様子にはさして興味がなさそう

だ。
　しばらくすると、マックスはじっと宏樹の目を見つめて頷いた。
「ちょっと来てみろ」
　そういうと、マックスは宏樹を泉からやや離れたところに連れ出した。よもやとは思うが、触れてはならないところに触れて殴られるかも・・・そうした宏樹の猜疑心は、思い過ごしに終わった。
「これを見てみろ」
　するとマックスは自身のｉＰｈｏｎｅを取り出すと、何かのアプリを起動させた。
「・・・これは？」
　宏樹は目を丸くした。よくわからないＳｖやらなにやらといった記号の前に、数値がズラッと並んでいる。
「このアプリはその土地の環境放射線量を計測できるアプリでな。この島に来てからずっと、このアプリを使って測定していた。Ｓｖ（シーベルト）というのは、人体に影響がある放射線量の値だ。見てみろ、今日この泉を目指すまでの間、ずっと1時間あたり０．５～０．７マイクロシーベルトを示している。一般的に、世界各地ではこの数値は1時間あたり０．０５～０．２マイクロシーベルトだ。インド・パキスタン国境のように、例外的に1時間あたり3マイクロシーベルトを上回る土地も存在するが、そういったところは天然のウランが豊富に存在する場所だ。だがこのファロ島には、ウランも何も存在していない。これがどういうことかわかるか？」
　そう言われても・・・宏樹はピンとこなかった。だが、少なくともこのファロ島は通常より高い放射線量が存在する場所なのだとは理解できた。
「天然の放射性物質が存在しない、ということは、人工的な放射性物質が拡散されたと見るべきだ。そしてこの数値だが・・・いまから２２年前、この島では1時間あたり1．５～3．５マイクロシーベルトが観測されている。まともな国なら、さっさと国民に避難を呼びかけるべき数値だ」
「ちょっと待って、なら・・・いやてゆうか、マックスはこの島に来る

のが初めてじゃないの？」
　情報が整理できず混乱する宏樹だったが、どこか感じていた違和感が整理できた。やはりマックスは、今回のファロ島上陸が初めてではなかったようだ。
「２６年前。オレがオーストラリア陸軍特殊部隊に入隊した年だ。前年にフランスが太平洋の領域で核実験を強行させたことを受け、世界的に核の脅威が高まりつつある機運を、我々軍人は痛感していたよ。そんなときだ。米陸軍デルタフォースとの共同演習をここファロ島にて執り行う、と命令を受けたのは」
　あまり思い出したくないのだろう、マックスは手を口に当てた。
「ミクロネシア連邦における軍事侵攻を想定した共同演習、という名目だった。だがどう考えてもおかしかった。フランスの核実験を受けて浮き足立ったのはインド・パキスタンや北朝鮮だ。いずれもその後核保有を宣言する国ばかりだが・・・。そんな緊張感の中、特に資源もなく他国からの侵攻など想定し難いミクロネシアを舞台にした戦争を想定するなど、どうにも不可解だったが、我々軍人は命令を受ければ絶対にこなさなくてはいけないからな。この暑さに僻遠しながら、島への上陸から山岳戦闘まで訓練をしたのだが・・・」
　マックスはグッと水を含んだ。宏樹は喉が乾くのも忘れ、マックスの話に聞き入った。
「デルタフォースの連中は、厳重に囲われた棺のような荷物をこの島に持ち込んできた。このように険しい山岳地帯を抱える島を正確に観測するＧＰＳだのののたまっていたが・・・いや、もしかしたら彼らでさえ、末端の兵士はそれが何か知らされていなかったのかもしれないな。年に２回、その後もファロ島での訓練が繰り返され、その度に不気味な棺を持ってきては、島のどこかへ設置するのを手伝った。どこかはわからない。荷物運びは手伝ったが、設置場所は米軍の機密事項だかで、同盟国である我々にすら知らされなかった。そして島を離れるころ、なぜか大地が震える感覚を味わった」
「・・・その、棺？ていうの？それはいったい・・・？」
「最初はオレもよくわからなかったさ。地震か、あるいは火山活動な

のかと思ったもんだが。あるとき、仲間の兵士が小用だかで、崖下へ下っていったんだ。そうしたらたまたま見たらしい。米軍兵たちが棺を洞穴の中へ運び込もうとしているのを。不思議に思って声をかけたところ、米軍の指揮官が血相変えてこう怒鳴ったそうだ。『さっさと自国の持ち場へ戻れ、この野郎!』ってな具合にな。ソイツは・・・オレと同い年で、仲の良いヤツだったんだが・・・上官にその旨を報告した。母国へ戻ってすぐだ。ソイツが部隊を外され、南極観測隊への異動を命じられたのは。どうだ、誰がどう考えても、米軍がやろうとしてたことはキナ臭さを感じないか?」

宏樹は答えられず、ゴクリと唾を呑んだ。

「翌年だ。ちょうど22年前、ミレニアムだかで世間が騒いでた頃だったな。通例でまたファロ島への演習に派遣された。だがオレは、南極に飛ばされた仲間の言葉を鵜呑みにしたよ。『米軍の奴らはおかしい。もしかして、公にできないことをあの自然豊かな島でやらかしてるんじゃないか』てな。オレも同感だったし、ひとつ内密に調べてやろうと思った。おかげさんで、軍の兵站装備課にも仲間がいてな、オレの考えをオフレコで話したところ、ソイツはこう言い放ちやがった。『ウワサでしかないが、米軍は高性能且つ小型化した戦術核兵器を実用化させた。それはあたかも棺のような黒い箱にカモフラージュさせてるらしい』。そこでオレは、ソイツからガイガーカウンターって放射線測定器をこっそり拝借して、島の放射線量を計ってみることにしたよ」

なんとなく、マックスがやろうとしていることがわかってきた。

「上官や仲間の目を盗んで島のあちこちを計ったところ、どうやらオレたちの想像が裏付けられたと確信した。通常ではあり得ない放射線量だったからな。米軍の奴ら、島嶼訓練の名目で、この島で秘密裏に戦術核兵器の地下実験をやってやがる。そしてオレたちは理由も知らされず、その片棒を担いでいることも理解した。こんな事実をつかんで、オレは上官に報告すべきか考えあぐねたよ。無論、オレの正義感は黙ってられるか!そう叫んだんだが・・・その前年、オレは結婚してな。娘も産まれていた。正直に話して、家族を露頭に迷わせて

しまっては・・・そんな懸念と葛藤に苛まれていたときだ。米軍の奴らが、大慌てで逃げてきたんだ。『撤収！撤収！急いでこの島から離脱する！』て怒鳴りながら、な。ワケもわからず、オレたちも島嶼上陸用のホバークラフトに飛び乗り、島を後にした。そのすぐ後だ・・・島から大轟音が鳴り響き、大きな土煙が舞い上がったのは」

「それって・・・２２年前、でしょ？まさか・・・」

「そうだな。よく話に上がるだろ。ファロ島で大地震が発生した、と。だが帰ってからわかった。ファロ島及びその近海では、大地震が起きた形跡がない。どの地震計も地震を観測していなかったんだ。いいかヒロキン、これはオレの推測でしかない。だが限りなく真実だと考えている。どういう理由かはわからんが、米軍の奴らは、通常より浅い深度で核兵器を起動させた。そのため島は、核爆発によって激しい地殻変動が巻き起こり、地形を大きく変えてしまったのだと・・・」

宏樹は二の句が告げなかった。

「そんなバカな、と言いたいか？なら、この島の連中がなぜオレたちを敵視するか、考えてみろ。彼らは以前は友好的でな、道案内や物資の搬送にも協力してくれた。ところがオレたちが逃げ出した直後、島が大きく崩れて環境が激変してしまったんだ。金の髪に青い目をしたヤツらが何かしでかしやがった・・・そう考えても不思議ではなかろう。母国へ戻ったオレは、この件の徹底調査を上へ具申したよ。だがにべもなく突っぱねられた。それでも粘り強く訴え続けた結果・・・内陸のきいたこともないような街の駐在に回されたよ。かえって確信したさ。オレはよほど、痛い腹を探ろうとしてるんだとな。砂漠のど真ん中の街は、シドニーから半日かかる。ある日休暇を取ったオレは、妻と娘を残してシドニーへ出かけたんだ。知り合ったジャーナリストに、この件を話してやろうとしてな。だが、ジャーナリストは現れなかった。携帯に連絡しても出なかった。もしやと思い・・・オレはシドニーを後にした。いつも厄介になってる借家のばあさんが、泣き腫らした目で抱きついてきた。あんたの奥さんと娘が、暴走族に撥ねられて病院に担ぎ込まれたってな・・・・」

ふいに、マックスは寂しそうな目を湛えた。懐から写真を取り出し

た。以前、宏樹がチラッと見た写真だ。スーツ姿のいまよりやや若いマックスに、アジア系のはっきりした顔立ちの女性、そして2人に抱かれている、目の大きな少女。
「妻のシャオミンと、娘のリサだ。今ではこうして、写真の中でオレに笑顔を見せてくれている・・・」
　マックスは写真を懐に仕舞い込んだ。
「妻と娘は、その日の晩に亡くなったよ。意識が戻らないまま。オレは大切な家族を轢いた連中を探し出し、全員顔の形がなくなるまで殴り続けた。奴らの親玉がボソッと言いやがったよ。『オレたちはハメられたんだ』とな・・・。以来オレは、ほとぼりが冷めるまでオーストラリアの奥地に身を隠し、公には行方不明ってことになった。いまの会社を立ち上げたのは・・・まあ、食ってくためでもあるが・・・いつかファロ島を訪れようとする連中がいたら、警備担当として同行し、これまでの謎を明かしてやろうと思ったからだ」
　一気にしゃべると、マックスは水を飲み干した。
「すまんな。お前たちの行動を利用させてもらう形になったが。だが、お前たちには感謝している。こんな滅多にない機会を与えてくれた上、島への上陸も果たせたんだからな」
「いや・・・そういうこと、だったんだね。あの・・・いろいろ訊きたいんだけど・・・」
　宏樹は慎重に、頭の中を整理した。
「なんだ？」
「その、22年前、なんでアメリカ軍は浅いところで核兵器を使ったのかな？」
「それはわからない。島の連中により詳しく話をきければ良いんだが、こんな状況だ。あるいは、当時を知る島民は限られているんだろう」
「それと・・・あ、いや、なんでも」
　宏樹は首を横に振った。マックスがなぜアモのことを気にかけているか、本人に訊くまでもなかった。マックスの娘とアモは、どことなく似ているのだ。もしもマックスの娘、リサが大きくなれば、こん

なふうに成長していただろうな・・・・・。

ー最近、忙しくてごめんなさいー

「そんなことがあったのか」
黄色い木の実、ファロラクトンεの探索とサンプル採集は早々のうちに終わり、集落に帰ってきたのは15時前だった。昨日のキングコング寝床探検に比べれば、身体の負担ははるかに軽かった。
宏樹が帰る頃には、神鍋も飯島もすっかり元気になっていた。持ち込んだ発電機にコードをつなげ、パソコンを開いてこれまで撮影していた動画の編集を始めていたのだ。宏樹が撮影してきた本日の映像はSDカードを抜き出し、そちらも編集に回す。
パソコンをいじりながら、宏樹はマックスと話したことを2人に話したのだ。傍らではたっぷり汗をかいたチェ支社長が、だらしない腹を出してビールをうまそうに喉に流し込んでいる。
「人生いろいろ、あんなことこんなことありますよ。わたしだって本社のエリートコースをひた走るつもりだったのが、ちょこっと上司とモメたら南の海のひとり管理職だ」
話を聞きながら、4本目のビールを開けたチェ支社長がぼやいた。彼なりに良い運動だったのだろう、持ち込んだビールの消費具合が見事なものだ。
「それに、今回なぜ島へすんなりと上陸できたのか、そこも引っかかってたんだが・・・本当に幸運だったんだな」
飯島がパソコンに向かいながらぼやいた。
「雷が鳴ってなきゃ、オレたちもエビラに喰い殺されてたかもしれないって考えると、神様っているんだなあ、やっぱり」
やはりパソコンに向かいながら、神鍋が言った。
それからしばらくは、3人とも動画の編集作業のためしばらく無口でキーボードを叩く時間が過ぎた。チェ支社長はいい加減ビールの効果が出てきたようで、赤い顔をして居眠りを始めた。

ふいに、チェ支社長の同僚2名が入ってきてチェ支社長を起こした。曲がりなりにも支社長なのだが本人いわく「本社から派遣されたヤツらの方がエライ」らしく、微睡を叩き起こされて不機嫌ながらも彼らの質問に答えていた。
「どうかしたんですか？」
言葉がわからなくても高圧的な2人がでていったところで、宏樹はチェ支社長に訊いた。
「いやあ、例の黄色い泉まではどうやっていったんだ、とか、雷が鳴るとエビやコンドルのバケモノは大人しくなるとは本当か、とか・・・。まったく、こっちは寝入りバナだっていうのに」
その後も韓国語で何やら愚痴をつぶやくチェ支社長。
「よくわかんねーけど、なーんかいけ好かない連中だよな」
神鍋が背伸びをしながらぼやく。
「オレたちに興味も示さないもんな、最初から」
飯島も同調した。たしかに、始めはぶっきらぼうだったがやがて打ち解けたマックス一行とはまた異なり、最初から宏樹たちに興味もなしにただ同行してきただけのような感じが否めないのだ。
「まあ韓国の大手財閥だ。この島の資源開発やら、裏で考えがあるのかもしれないな。だからわざわざ本社から人をよこしたとも考えられる。なあ、ヒロキン」
飯島は編集作業がひと段落した様子の宏樹に声をかけた。だが宏樹はパソコン画面を注視するばかりで、飯島の声に反応する素振りがない。
「ヒロキン？」
怪訝に思った飯島がなおも声をかけると、弾かれたように宏樹は顔を上げた。
「あ、ああ、ごめん・・・ちょっと、用足してくる」
軽く咳払いをすると、宏樹は小屋を出て行った。神鍋はそんな宏樹を見送って大きくあくびをする。飯島は宏樹が編集した動画を覗いてみた。
宏樹のｉＰｈｏｎｅを片手にはしゃぐ、島の子どもたちが映ってい

た。

ファロ島は夕刻を迎えた。

明日に戻る予定の宏樹たちを見送るべく、いつも以上に豪勢な食事を村人が振る舞ってくれることになった。

集落の真ん中にある広場に篝火が焚かれ、火の粉が時折爆ぜる中、村人たちに囲まれて宏樹たちは食事をとっていた。

「慣れるとトカゲの肉も美味いもんだな」

そう言いながら、神鍋はもしゃもしゃと大トカゲの骨つき肉を貪る。

「でも毎日こんな歓迎会してくれて、なんだかもうしわけない気分にもなってくるよ」

おっかなびっくりトカゲ肉に手をつける宏樹。

「まあ、他に娯楽がない島だ。オレたちみたいな客人をもてなすこういう機会がこの上ない楽しみなんだろうな」

やはりトカゲ肉を頬張り、飯島が言った。

いつのまにか、キングコングは眠りから覚めたようで集落から姿を消していた。ゴロは村外れの崖下で突っ伏している。赤い実を溶いた汁で上機嫌になったチキロ酋長がやってきて、宏樹たちと肩を組みながら何かを話す。

「もうみんな、ずっとこの島にいなさい。歓迎する。そう言ってマス」

コンノ三世がすかさず通訳する。チキロ酋長はとりわけ宏樹がお気に入りらしく、宏樹の背中をバンバン叩きながら笑顔で何かをまくしたてる。

「嬉しいけど、来月稲刈りだもんなあ」

肉をパクつきながら、村人に注がれた赤い汁を口にしている神鍋が言った。

「そうだな。オレも、１２月には南アフリカ探訪の企画控えてるからなあ」

飯島が言った。村の子どもたちが宏樹に寄ってきた。またｉＰｈ

ｏｎｅを貸してとせがまれているらしい。
宏樹は少し苦笑いしながらも、子どもたちにｉＰｈｏｎｅを渡す。動画撮影モードにすると、画面に映る自分たちの姿に興奮しながらｉＰｈｏｎｅを掲げてはしゃぐ。言葉はわからないが、「僕にも貸して！」とせがむ子をからかうようにｉＰｈｏｎｅを持って走り出す子を追いかけ、みんなで祭壇の方へ駆けていく。
「なんか良いよなあ、子どもたちが元気な姿って」
ほのぼのと微笑みながら神鍋が言った。
「・・・ごめん、ちょっと用足してくる」
宏樹は少し神妙な顔をして、その場を離れた。
「いってら」
神鍋はそう言って見送り、しばらくして「なんかヒロキン、今日トイレ近いよなあ」とつぶやいた。
「いろいろ、吐き出したいことがあるのかもしれないな」
そういう飯島に、神鍋は不思議そうな視線を向ける。

集落からやや離れ、宏樹は祭壇のわきにある小屋にもたれかかり、満点の星空に顔を向けていた。
ｉＰｈｏｎｅは子どもたちに貸したままだったが、それでも良かった。空いっぱいに輝く星空は、少しずつ宏樹の心をほぐし始めていた。
「宏樹サン」
ふいに声をかけられ、宏樹は肩をビクつかせた。アモが小屋の陰から声をかけてきたのだ。
「ああ」
それだけ声にした。嬉しいという感情が顔に出たのが、自分でもわかった。アモは目が見えないハズなのだが、そんな宏樹の表情を見透かしたかのように微笑んだ。
「どうしたんですか。宏樹サン、元気ナイ」

「ん？い、いや、別に・・・」
　アモは首を振った。
「宏樹サン、わかります。いまの宏樹サン、元気ナイ。私、どうして宏樹サン元気ナイか、知りたいデス。宏樹サン、元気になってほしい」
　宏樹は少し身構えた。島の魔神に仕える巫女とはいうが、まるで本当に神様の使いだと思ってしまう。宏樹が考えていることを、すべて見通しているようだ。
「・・オレさ、ＹｏｕＴｕｂｅｒっていって、動画撮影したものをネットにアップする仕事してるんだけど」
　言いながら、宏樹は自分が使う単語をアモがどこまで理解できるか考えあぐねた。だがアモは、単語はわからずとも不可解さを顔に出さず、微笑みを浮かべたまま頷く。
「最近、楽しくないんだ。気分が乗らないっていうのか・・・。人のネタをパクって動画作ることに、なんだか飽きてきたっていうか・・・これが、オレが本当にやりたかったことなのかなって、思っちゃうことが多くてさ。鍋ちゃんや聡くんはすごいよ。自分なりのネタを仕上げて楽しそうに動画撮影してるから。オレは、ちょっと違うかなって思っていたところにさ・・・」
　宏樹はアモの反応を窺った。変わらず、微笑んだままだ。
「そんなとき、あの子たちが楽しそうに動画映して楽しんでる姿見て、もっと思ったんだ。動画を撮る楽しみって、なんだろうって。楽しいって、そう思えなくなってきた自分が悔しいし、寂しいっていうか・・・。なんだか、ね」
　悲しさと寂しさを隠すように苦笑いする宏樹の腕に、アモはそっと手をかけた。
「宏樹サン、わかります。宏樹サン、みんなが観てるからやらなきゃ、そう考える。宏樹サンがやりたいこと、本当は違うカモしれナイ。だから、こころとからだが離れて、宏樹サン悲しくなっちゃう」
　優しい口調だが、ズバリと当てられた。宏樹は照れ隠しで鼻の頭を掻いた。
「宏樹サン、どうしたいか、どうなりたいか、ワカラナイ。アモも、ワ

カラナイ。でも、宏樹サン、楽しくしててほしい」
　自分の姿を映していないはずのアモの瞳は、宏樹の心を射抜くのに充分だった。
「ねえ、アモ」
　宏樹が言うと、アモは微笑みを消した。
「もしかしてアモ、真祐ちゃん？」
　そう訊いたが、不思議そうな顔をするアモ。
「あ、いや、違ってたらごめん」
「まゆ、チャン・・・。よくワカラナイ。でも、なんだか懐かしい。まゆ、チャン？そう呼ばれるの」
　ふいに涼しい風が辺りを包んだ。湿気に満たされたそよかぜは、２人を優しく包み込んだ。

「ずいぶん長い用足しだなあ」
　フルーツをガブつきながら、神鍋がぼやいた。宏樹のｉＰｈｏｎｅで遊んでいた子どもたちは遊び疲れたのか、何人か眠ったまま母親がおんぶして帰っていった。宴も酣をやや過ぎ、そろそろお開きムードが漂い始めた。
　集落に涼しい風が吹き始めた。遠くからは雷鳴が聞こえてくる。
「うわ、こりゃ雨降るかなあ」
　そうつぶやく神鍋に「ダイジョーブ」とコンノ二世が答えた。
「あの雲、雷だけ。雨、降らナイ」
　コンノ二世が指差し先には、帯電するかの如く紫色の稲妻に包まれた黒雲が近づきつつあった。遠巻きに雷鳴も聞こえてきた。
　すると山の方から、ＬＥＤのライトを灯した一行が近づいてきた。明らかに村人ではない。
「おお、マックス」
　神鍋が声をかけた。動けるようになったブンチャヤとボロロを連れて、陽が沈むまで島を調査すると言って出かけていたのだ。
「ちょっとこれを見てくれ」

そう言ってマックスが手にしたものを見せてきた。
「こりゃあ・・・金属片？」
「これがどうしたっていうんだ？」
神鍋と飯島が口々に訊いた。
「島の奥、ジャングルに引っかかっていたんだ。いまは冷めたが、オレたちが発見したときはもっと熱を帯びていた」
どういうことだ、と首を傾げる神鍋だったが、飯島は顔を強ばらせた。
「・・・もしかして、ヘリのローダー？」
「ああ、そのようだ」
「ちょっと待ってくれ、それが熱を帯びていたとなると・・・」
「そうだ、つい最近、何者かがヘリでこの島に接近していた、ということが考えられる」
飯島はマックスが言わんとすることを察した。神鍋は不思議そうに、そんな2人を見比べている。
「まさかとは思うが、明日ここを離れるまで、オレたちは交代で警備する。オレたちの他にこの島を訪れる、いや訪れようとしている連中が存在するのか、そしてそいつらは果たして友好的なのか、まったく確証が持てないからな」
「それはまさかだと思う。しかしマックス、あんたの過去を聞いたからには、そのまさかもあり得る事態だと思う」
飯島は顔を強ばらせたまま、言った。

マックスと飯島の予感は当たっていた。
ちょうどその頃、ファロ島の海岸の一角、誰もいない岩場に、黒い水上艇が着岸していた。
暗視スコープと黒い潜水服に身を包んだ数名の一行は、雷鳴響く中島へ上陸した。それぞれ手にはスーツケースほどの大きさの荷物を抱えていた。

そして島には、そんな一行を待ち構えている者たちがいた。

ー怪しい者ではございません、というヤツは、１００％怪しい。間違いないー

「アモさん」
未だ雷鳴と雷光が夜空を震わせ、闇夜を紫色に染め上げる中、祭壇わきの小屋にいるアモに声をかける存在が複数現れた。
アモは床についていなかった。まるで睡眠という行動を知らないかのように、彼女は眠ることを知らなかった。
「どなたですか？」
日本語で話しかけられたため、アモは日本語で応じた。宏樹たちと話すようなたどたどしさは微塵もない、冷たく透き通った声色だった。そしてアモ自身、そこまで日本語を違和感なく話せることに内心驚いていたが、表情にも声色にも出さなかった。
「私たちは宏樹さんたちと共に島へ来た者です。怪しい者ではない」
なるべく警戒されないように、アモに声をかけた男はぎこちない笑顔で歩み寄った。アモは男に向き直り、男の心を見透かすようにじっと見つめてきた。
男は歩みを止めた。アモの視線は射抜くように鋭く強かった。この女、目が見えないと聞いていたのだが・・・。
「その方が何の用ですか？」
アモの口調は静かで、冷たい。
「宏樹さんから、あなたを呼んできてほしいと言われました。暗いからお手伝いします。さあ」
兎にも角にも、男はアモを連れ出すべく手を差し出した。アモは男を一瞥すると、身を下がらせた。
咄嗟に男の背後から、もう1人が身を乗り出した。男はそれを制すると、作り笑顔をいっぱいに浮かべた。

「大丈夫ですから、ほら」
少し強引にでも手を引こうと、男はアモの右手を握った。アモはそれを振り払うと、敵意溢れる目で男、その背後にいる男を睨みつけた。
「あなたたち、イヤな感じがします。悪いこと、考えている。宏樹サンの友達なんかじゃ、ナイ」
アモは小屋の際まで後ずさっている。雷鳴が遠ざかりつつあり、まごついている時間はない。
男は一気にアモへ詰め寄ると、その身を確保しようと覆いかかった。だがアモは男を蹴り飛ばし、踏み台にして天井を舞った。
「ちくしょう!」
母国語で毒づくと、もう1人の男が着地したアモの背後から抱きついた。だがガッチリ掴んだはずの身体はいとも簡単にすり抜けられ、アモは出口へ突進した。だがそこにはもう3人が待ち構えていた。
その気配に気づいた刹那、1人がアモの顔目掛けてスプレーを吹き付けた。本能的にアモは身を引いたが、ハッとしたときにはスプレーの成分を吸い込んでしまっていた。そのまま意識をまどろませ、アモは床に崩れた。
「たった1人に手間取りやがって」
スプレーをしまった男が、母国語で毒づいた。
「勘が鋭い上にすばしっこくて」
アモに蹴られた男がうめきながら、立ち上がった。
「急ぐぞ。雷雲が去りつつある」
スプレーの男がアモを抱え上げた。
「しかしわからないな。雷が鳴ればキングコングが勢いづくんだろ。危険じゃないのか」
蹴られた腹を押さえながら、男は訊いた。
「だがキングコングがいきり立つと、海に棲むエビの化け物が大人しくなるそうだ。ひとまずは雷が鳴ってるうちに、この島を離れることを最優先だ。それにこの島にはバカでかい恐竜もいるらしい。そいつに目をつけられる前に、急ぐぞ」
男はアモを抱えたまま、しゃべりながら動き始めた。他の連中も慌

ててそれに続く。時間的に明け方だ。島の住人が起き出さないとも限らない。この様子を見られたら、厄介なことになる。
それにしても、本部からの命令とはいえ、男は今回派遣された男たちの扱いに難儀していた。国の事情として男性には兵役が義務付けられており、集められた連中もみな一連の兵役過程をこなしているはずなのだが、島への上陸時といい、この少女を確保するときといい、素人も良いところだった。
無理もないかもしれない。リーダーを務める自分だけが、陸軍特殊部隊出身だ。とはいえ軍を離れても皆が切った張ったの世界に身を置いているのに、こいつらの緊張感の無さといったら話にならない。島へ上陸を試みた先遣隊が全滅しているというのに、上陸前までスマホゲームに興じるとは。
気を取り直し、周囲を伺いながら一気に海岸線へ走り抜ける。島民も、キングコングも、はたまた恐竜も動き出している気配はない。唯一、集落の周囲を交代で警戒しているらしい傭兵が気になった。だがこちらは暗視装置で暗がりでもかまわず行動できる。島を離れるまで余計な騒ぎを起こすつもりはないが、万が一のときには、射殺するつもりで男は準備していた。
幸い島民にも傭兵にも恐竜にも気づかれることなく、海岸線まで走り抜けることができた。海岸には朝進グループ本社の人間と偽ってグループに同行している2名が待機していて、灯が少ない中気を揉むようにタバコを蒸していた。
「おお、来たか」
そう言って近づいてきた男を、アモを抱える反対側の手でひっぱたいた。咥えたタバコは砂浜に落ち、男は足でもみ消した。
「タバコといえどこの暗闇では悪目立ちする。むやみに吸うモンじゃない」
ひっぱたかれた男は不服そうに口を窄めている。
「とにかく、この女の身柄を確保した上、黄色い泉のサンプル採集と爆薬設置まで完了した。我々は帰投するが、おそらくキングコングがじきに追ってくるだろう。お前たちは日本から来たＹｏｕＴｕｂｅｒ

と護衛の傭兵を上手く始末して、ここを脱するんだ」
手短に言うと、ひっぱたかれた男は頷いた。
「支社長のチェはどうする?」
「少しは頭を働かせろ。始末する対象に例外はない」
ぶっきらぼうに答えると、アモを黒いホバークラフトに乗せてエンジンを始動させた。このまましばらく海上を走行し、沖合に停泊している高速船に乗り換えるのだ。問題は、その高速船に乗るまでにキングコングを振り切れるか否か・・・。
そう思っていると、島から耳をつんざくような雄叫びが聞こえてきた。昔耳にした、ゾウが地響きを鳴らして闊歩する轟音。あの数十倍はあろうかという、大地を揺らす音が響いてくる。
案の定、離れていく島の海岸に凄まじく大きな影が現れた。時折空を照らす雷光に照らされたその影の顔面は、大きく口を開けてこちらに向け吼えている。
ホバークラフトのスロットルを最大限に振り絞っていると、高速船が見えて来た。大きな影はひときわ大きく吼えると、海面を白立たせてこちらへ猛進してきた。
「ちくしょう!」
慌てて大宇アサルトライフルを構える者もいたが、距離がありすぎて弾道が届くはずもない。
「ヤツは海に入ってこないんじゃなかったのか!」
「慌てるな。この女を連れ去った時点で充分想定していたことだ」
冷静に答えると、高速船のタラップにホバークラフトを着船させ、荷物とアモを引き揚げる。アモは薬剤の効果が薄れてきたのか、唸り声を上げ始めた。
すかさず注射を打つと、アモは夢うつつの世界へと引きずり戻された。
高速船が動き始めた頃には、波が高く荒れるようになった。キングコングがこちらへ迫っているのだ。
「おい、追いつかれちまうぞ!」
そう焦る声を無視し、男は船尾へ進むと、レバーを押し倒した。船

から何かが海面に投下され、しばらく浮いた後に黒く時折青い海面に沈み込んでいく。
「おい、フルスロットルだ」
操船士に短く指示すると、男は外で慌てる連中に声を張り上げた。
「おい、伏せろ！」
そう言い終わるかどうかの刹那、海面が大きく盛り上がった。水柱が天を衝く勢いでそそり立ち、打ち上げ花火を何倍も大きくしたような音が鼓膜を叩いてくる。
男が投下した機雷に、キングコングが触れたのだ。
水中での爆発は幾度か続き、海が平静を取り戻す頃には向こうの空が明るくなりつつあった。
爆発が鎮静化すると、白波をかき分けて追いかけてくる存在は確認できなくなった。
「すげぇ！何をやったんだ！」
「米国製の高性能指向性機雷だ。厚さ１０メートルのコンクリートも吹き飛ばす威力を持つ。いかに巨体を誇るキングコングといえど、致命傷ものだろうな」
男が言った通り、高速船が通過した後の海面は平静そのものだった。
「邪魔者はいなくなった。あとは・・・」
男は黒いケースを開けると、中央の赤いボタンを押した。もうファロ島は水平線はるか先にうっすら見える程度にまで離れたが、今ごろ島にある黄色い泉は木っ端微塵に吹き飛んでいることだろう。
「これでオレたちの仕事は終わったな」
緊張感なく顔を綻ばせる連中を嗜めるように、男は睨みつけた。
「まだだ。この女を生きたまま連れていくまでだ」
「めんどくせぇなあ。いっそのこと死んでもらった方が運びやすいんじゃないのか」
「お前はこの仕事の中身をまるで理解してないな。良いか、ファロラクトンεの効果効能は生きた人間のサンプルが必要なんだ。かといってその辺の島民では連れて行くにあたりエビの化け物に襲われ

るリスクがある。だからこそこの女を連れ去ることで、怒り狂うキングコングにエビが恐れ慄き、結果的に我々の護衛となるアイデアを活かしたのだろうが。まあ、不要となったから機雷で始末させてもらったがな」

そう言うと男はスマホを開いた。このまま最寄りの島まで1時間弱。そこから航空便をいくつか乗り継ぎ、目的地へ向かうまでが仕事なのだ。

「そうかよ。そうそう、オレたちは日本のどこまでこの女を連れていけば良いんだっけ？」

相変わらず呑気な連中だ・・・男はうんざりしたように頭を振ると、スマホでグーグルアースを開いて見せた。

「おお、すまんな。何なに、愛知県海部郡飛鳥村・・・へええ、名古屋市の手前か」

ーゴジラ復活すー

集落が騒がしくなり、宏樹は夢うつつから目を覚ました。陽が昇りつつあり、小屋を編み上げている樹木の隙間から木漏れ日が差し込んでいる。

目をこすりながらｉＰｈｏｎｅを手繰ると、時刻は朝７時を指していた。チェ支社長の会社から迎えの船舶が来るのが１２時なので、まだ時間はある。だが外の喧騒は、どうやら尋常ならざる事態が起きたらしいことを告げていた。

「おお、起きたか」

小屋を出た途端、マックスと鉢合わせた。反対側の小屋にはコンノ三世が声をかけて、神鍋と飯島を起こしていた。

「ねえ、どうしたの？ずいぶん騒がしくない？」

「ついさっきのことだ。キングコングが怒り狂うようにして海へ飛び出していったんだ」

そう言われても、イマイチピンとこなかった。聞けば、雷が鳴るとキングコングはイキリ立ち興奮するそうではないか。

「そして、だ。朝からアモの姿が見えないらしい」

次の一言で、広樹は事態の深刻さを悟った。

「おい、ヒロキん」

神鍋と飯島もやってきた。

「話はきいたか。どうも不穏な事態になってるようだ」

飯島が言うと、宏樹は昨日アモと話をした小屋へ視線を這わせた。

「宏樹サン、小屋にはもちろん、集落どこにもアモ、いないデス。キングコングのところですか？オトーサンにそう訊きましたけれど、それならばキングコングが海へ入っていったのがワカラナイ、そう話してまシタ」

宏樹が考えていることを読み取ったコンノ三世が言った。

「キングコングは、自分から海へ飛び込んでくことはしないんでしょ？」
「そうデス」
今度はコンノ二世がやってきた。
「ボー、海に入れば海の悪魔・・・神鍋サンが呼ぶエビラに勝てないの知ってマス。お相撲さん、プロレスのリング上がると弱い。ルール違うカラ。同じことです。それでもボー、海を越えようとしている。これが意味すること、なると・・・・」
コンノ二世は固く目を閉じた。
「ま、まさか・・・・」
「アモは、連れ去られたと考えるべきか」
想像はついても口に出すことができなかった宏樹に代わるように、マックスが訊いた。
「その可能性、高いデス。一応、村のみんなでアモ、探してますが・・・」
「しかし、いったい誰がアモを連れ去る？何の目的があって？」
飯島の問いかけは、ショックに打ちひしがれた一行の思考を冷静にさせる力があった。
「・・・そんなのわかんないよ。でも・・・アモって、不思議な力っていうか、人を見透かす能力みたいの、感じるんだよ」
宏樹の言葉に、ピンと来る者は少なかった。
「あるいは・・・アモを餌にキングコングを誘い出すことが目的なのかもしれないな・・・しかし、そうだとすればいったいなぜ・・・」
言いながら考え込む飯島。
「とにかく、アモ探そうぜ。島からいなくなったとも限らないんだから」
じれったそうに、神鍋が言った。
「コンノ二世、チキロ酋長に島民は全員安否が取れるか、いなくなったものはいないか訊いてほしい。島民が何らかの手引きをした可能性もある」
マックスは冷静に話したつもりだったが、それを聞いたコンノ二世は顔を紅潮させた。

「わ、わかりました・・・しかしマックスサン！島の人間に、アモに危害加えようとする人なんか、イナイ！」
「気分を害したのならすまない。だがこうも考えてほしい。アモが自分の意志で海へ出たなど考えられない。明らかに第三者の介在があったことと考えられる。そうなれば、少なくとも島に上陸した誰かの仕業によるものなのは間違いなさそうだからな」
「酋長には訊いてみますが・・・あなたタチの仕業じゃないって保証はナイですよネ！」
　コンノ二世は怒りを隠さず、捨て台詞を吐いて酋長の元へ駆け寄っていった。
「マックスサン、オトーサン、すみません。でも、私も島の誰かが犯人だなんて、思いたくナイ」
　コンノ三世が言うと、マックスはもうしわけなさそうに両手を上げた。
「うるさいなあぁ・・・いったい何の騒ぎですか？」
　するとチェ支社長が、だらしのない腹をボリボリかきながら起き出してきた。昨日気分が良くなってビールをしこたま飲んだのだった。吐く息が恐ろしく酒臭い。
　この大事なときに、そう言いたくもなったが、宏樹たちはかくかくしかじか、事情を説明した。
「はあ・・・なんだってしかし、帰る日にそんなことなっちゃったモノだか・・・そういえば、本社から寄越されたあいつら、どこで何してんだか・・・」
　汗まみれの後頭部をボリボリ掻きながら、チェ支社長はぼやいた。
「・・・ちょっと待て。支社長、本当にあの２人、今どこにいるんだ？」
「マックスさん、それは私もわからないよ。本社の人間だからって、エラソーにふんぞり返って島中ほっつき歩いたかと思えば、ビールカッ食らって居眠りしたり・・・・」
　チェ支社長は周囲が自分を見る目が険しくなったことに気づき、言い淀んだ。
「確認する。あの２人は、朝進グループの本社から派遣されたんだっ

たよな」
　マックスが訊いた。
「あ、ああ」
「それは、間違いないのか？」
「そ、そんな・・・だって、本社から来ましたと言われれば、ハイそうですか、としか言えないのが支社の身分だよ。確認なんていちいち取らないモンだけれども・・・あのう、まさか、アモがいなくなったのは、あの２人が原因だとでも？」
「それはわからない。だが彼らが近くにいて、身許が保証できない以上、現時点でもっとも怪しまれる対象だろうな」
　ちょうどコンノ二世がやってきて、島の住人はほとんど集落にいる、あるいはキングコングの寝床をたしかめに５人走らせたと報告してくれた。
　マックスに怒りを顕にするコンノ二世だが、いまの話をしたところ顔を曇らせた。
「そういえば・・・あいつら良く海岸行ってたな。ギリギリ衛星電話通じる、とかいって」
　チェ支社長の言葉に、もはや疑いは強まるばかりだった。
「あの２人、名前は？」
「イとソンだ」
「よし。どうだろう、海岸を探して、その２人に話をきいてみるのは」
　マックスの提案に、一瞬怖気づくが、宏樹は頭を振った。
「うん。わかった。みんな、一緒に来てほしい」
「ようし、もしそいつらがアモに何かしたんだったら、筋トレ２時間やらしてやるぞ」
　悪く言えば単純な性格の神鍋は鼻息荒く、拳を握った。
「気をつけよう。もしその２人が誘拐の張本人なら、武器を持ってる可能性がある」
　飯島は顔を引き締めた。ブンチャヤはアサルトライフルの弾倉をたしかめ、いつでも撃てるようにしている。
　コンノ親子を通していまの話を島のみんなに伝えると、槍や弓を

持った男衆がついてきてくれることになった。だがもしも相手が銃火器を所持していれば、力の差は歴然である。事実上、ブンチャヤが持っているＧ３６アサルトライフルくらいしか対抗し得る武器はない。

一行が海岸へ向かい始めた。雲の隙間から朝日が顔を出し、島に強烈な日差しが差し込んだとき、一行を追い縋る住人が走ってきた。

「どうかしたの？」

宏樹がコンノ親子に訊いた。

「た、大変ダ・・・」

それっきり、コンノ二世は言葉を失った。

「エライこと、なりまシタ！黄色い泉、崩れ去った！」

コンノ三世が答えた。

「黄色い泉って・・・・まさか、ファロラクトンεの？」

宏樹が訊いた。昨日、足を運んだばかりだったではないか。

「そ、そうデス。さっき、キングコングが海へ向かう前に、泉の方からものすごい音がしたんデス。だからチキロ酋長、たしかめてくるようにって、男衆行かせたんデス。そうしたら、泉ごと吹き飛んで、崩れていたって・・・」

宏樹たちは顔を見合わせた。自分たちが調査、そしてサンプル回収を依頼されたあの黄色い液体、ファロラクトンε。もしかすると、自分たちの想像以上に重要で危険な存在だったというのか・・・。

「これ、泉が吹き飛んだのと、アモがいなくなったことって、何か関係あるのかな・・・」

宏樹が誰にともなく訊いた。

「わからない。だが状況的に、何らかの関係があると考えれば自然だ・・・・」

飯島が答えた。

「ファロラクトンεだっけ？ソイツ、そんなにヤバイのか・・・」

神鍋が頭をかきむしったとき、海岸の方から銃声がした。コンノ親子の報告を聞くべく、宏樹たちは足を止めていたのだ。そして、海岸へはマックスたちが走っていったのだ。

３人とも、黙り込んだ。じっとりした汗が顔ににじんでいくのがわかった。様子をうかがえない島のみんなは半分が怯えた顔で後退り、もう半分は果敢にも武器を強く握って銃声がした方を向いている。

「・・・進もう」

勇気を振り絞り、宏樹は言った。気圧されるように神鍋と飯島が頷いた。もちろん命の危険は感じている。だがそれ以上に、宏樹はアモのことが気にかかって仕方がなかったのだ。

ふいに、足元が揺れ始めた。緊張のせいだろうか。

すり足のようにして音を立てぬように海岸へ向かうと、何かが焼ける臭いがしてきた。鼻の奥に刺さるようなこの不快な臭いは、ゴムタイヤを燃やす臭いに似ていた。足元の震えはさきほどより強くなっている。そこまで自分はビビっているのか、宏樹はそう思い、気合いを入れるべく両頬を叩いた。

黒い煙が漂ってきた。岩陰から海岸の様子をうかがうと、海辺で何かが燃え盛っていた。あれは・・・島に上陸するとき乗ってきた、ホバークラフトだった。

その傍らでは、小銃をかまえた男性が２人・・・間違いなかった、チェ支社長と一緒にやって来ながら、言葉が通じないながらも横柄さと傲慢さを存分に湛えた本社派遣だかの、イとソンだった。２人が銃口を向けているのは、両手を頭に乗せた状態のマックスとボロロ、そしてブンチャヤだった。ブンチャヤの足元には、アサルトライフルが横たわっている。状況から、よくハリウッド映画で目にする「動くな！銃を捨てろ！」と言われた後らしいことは容易に推察できた。

「ああっ！あいつら」

義憤にかられたのだろう、神鍋が岩陰から飛び出そうとしたところを、飯島がすんでのところで止めた。

「ダメだよ鍋ちゃん、あいつら銃を持ってる。君が飛び出たところでどうにもならない」

「だからって！このまま黙ってられるか！」

「ちょっと、声大きいよ！」

３人で押し問答する様子を、島の男たちは何事かと眺めてくる。

「あぶないから、岩陰から出てはいけない」
飯島の言葉を、コンノ三世が忠実に通訳した。
「ちっくしょう、いくら元軍の特殊部隊でも、銃を向けられたらダメかあ」
神鍋は悔しそうに歯ぎしりを始めた。
飯島はスッと顔を覗かせた。
「2艘のうち片方を焼いてるらしい。もう片方で、あの2人は自分たちだけ逃げ出そうとしてたんだろうな」
状況を把握した飯島がつぶやいた。
「じゃ、じゃあ、オレたちを置き去りにするつもりか？」
「そうらしい。それにしても、なんだこの揺れは？」
「えっ？聡くんも感じる？」
思わず宏樹は訊いた。
「ん？ヒロキンも？」
「うん。てっきり緊張で足が震えてるのかなって」
「おいおい、震えってなに？」
「鍋ちゃん、感じない？」
「言われてみれば・・・農作業用管理機かけてるような震えみたいな感じするなあ」
表現が独特だが、どうやら宏樹たち以外、すなわち島民たちも足元の揺れを認識し始めたようだった。
そしてそれは、次第につよくなりつつあった。
断壁から小石がいくつか落ちてくるころには、不気味な地響きが怒り始めた。
「なんだこれ？地震？」
神鍋がつぶやいた。落ちてくる石はだんだん大きくなり、一行は断壁から距離を取った。
突然、大きな咆哮が周囲を轟かせた。
「い、いまのは？」
怯えた声で、宏樹は訊いた。
「ゴロ、ゴロ！」

コンノ二世が答えた。山の向こうにいるであろうゴロが活発に動き始めたのだろうか、にわかに騒がしくなった。今度は空からも、雄叫びが伝播してきた。大きなコンドルが島の上空を旋回し、何かを威嚇するように何度も哭いているのだ。

そしてそれらに呼応するかのように、地響きはどんどん強くなる。

ふと、海岸の様子が気になった。銃を持つイとソンだが、島の中から聞こえる異変に顔をこわばらせている。そんな状況でもマックスたちに銃口を向けたままだが、マックスたちも向けられた銃口より、巨大な獣たちの不穏な動きに神経を尖らせているのがわかった。

ズン！

ものすごい音がして、断壁からスイカ大の岩がいくつも転がってきた。

「ヤバイ！逃げろ！」

飯島が叫んだ。言葉がわからなくても、島のみんなも飯島の発した言葉の意味を理解したようだ。みんなで一斉に海へ走る。さきほどまで宏樹たちがいた浜辺は大小多くの岩で埋め尽くされた。アチラにこっちの様子を知られたようだが、どうやらそれどころではなかった。

軽自動車くらいはある岩が転げ落ちてきて、焼けてないもう片方のホバークラフトを押し潰していた。慌てるイとソンだったが、そのスキを突くように、マックスが動いた。

電光石火、目にも止まらぬ速さで2人に突撃すると、両手を広げて2人の喉仏に食い込むようにラリアットを喰らわせた。たまらず砂浜へ仰向けになり、気道が潰れかけたことで激しく咳き込む。

それでも小銃を手放そうとしていない。マックスはイと揉み合いにあり、激しく砂浜を転げ回る。ブンチャヤとボロロもマックスに倣い、ソンに襲い掛かった。ソンの腕を踏みつけ、銃を離さんとするブンチャヤとボロロ。傍らではマックスの鉄拳がイの頬に食い込み、イはたまらず銃を放り出す。

それを奪い取ろうと手を伸ばしたマックスだが、涙目になりながらもイは腰から短剣を抜き、マックスの背中に突き立てんとする。

「こんのクソッタレええええ!!」
すると神鍋が地響きに負けない怒声を上げた。砂浜を駆け出すと、全身でイに体当たりしたのだ。身長１８０センチを誇る神鍋は、普段から筋トレと農業でビルドアップされており、全体重をかけた体当たりにイはたまらず弾き飛ばされた。
神鍋のタックルで無抵抗状態になったイに、マックスはヘッドロックをしかけた。一気に力を込めることで、イはたやすく意識を失った。ソンもブンチャヤとボロロに締め上げられ、顔を紫色に染め上げていた。
「いいか殺すんじゃない」
マックスは言うと、ベルトを外してイの両手を縛り上げた。
「大丈夫!?」
宏樹たちが駆け寄った。イとソンは村人に捕まり、縄で縛られ始めた。
「ああ。危ないところだった」
汗を拭うと、マックスは興奮状態の神鍋に顔を向けた。
「良いタックルだった。感謝する」
「い、いや・・・」
冷静になれば、よくもまあ銃を持った相手に突撃していったものだ。神鍋は照れ笑いの下に、動揺を必死に押し殺した。
「それにしても、妙な地震だった」
マックスが言った。
「あれ?収まってる?」
宏樹がつぶやいた。
「本当だ・・・やっぱり地震だったのか?」
飯島が言い終わらないうちに、今度はもっと大きな地響きがした。地面にはじかれるように、宏樹たちの身体は数センチだが宙に舞った。
１度目ほどではないが、似たような地響きが３度、続いた。
「おかしい・・・地震じゃないぞ?」
飯島がつぶやいた。いつも冷静な彼にしては珍しく、顔色が青く

なっている。
ふと見ると、コンノ二世が頭を覆ってしゃがみ込んでいる。コンノ三世が父に何かを声かけているが、コンノ二世は聴こえてないかのように震え出した。
「どうした、怪我でもしたのか？」
心配したマックスが駆け寄った。
「違う、そうじゃナイ。オトーサン、さっきから様子が変ですネ」
コンノ三世がそう答えた途端、またも大地が弾けた。島のみんなが驚きの声を上げ、断壁からは土砂が崩れてきている。
そのときだった。宏樹たちの耳に、おぞましいまでの咆哮が飛び込んできたのは。
「お、おい、いまの・・・・」
神鍋が脂汗を浮かばせつつ、つぶやいた。
「ゴロの雄叫びじゃ、ないな・・・」
飯島は相変わらず、顔色が悪いまま答えた。
さらに一度、あの咆哮が響いた。
「あああああああっ!!!」
コンノ二世が絶叫し、砂浜をのたうち回った。
「オトーサン！オトーサン！」
コンノ三世が必死に父を落ち着かせるべく声をかける。
またも、突き上げるような地響きと咆哮が島を揺らした。集落から何人か走ってきて、一行に怒鳴り声を上げた。
「コンノ、なんだって？」
宏樹が訊いた。
「あ、悪魔・・・悪魔が現れた、と」
震えながら、コンノ三世が答えた。
すると大轟音と共に向こうの断壁が崩れ落ち、山を割って何かが倒れ込んできた。ゴロだった。岩まみれのまま雄叫びを上げて転げ回り、海へ雪崩れ込んだ。
そしてそんなゴロを追うように、崩れた山から何かが姿を現した。
「ゴロ、もう一匹？」

神鍋が茫然と言った。
「違う、あれは・・・・」
より近くで、あの恐ろしい咆哮を上げる存在。キングコングやゴロが発する、大きく野太く迫力に溢れた雄叫びなどではない。
恐怖。
その感情に直接作用し、身体を震わせるばかりの、おぞましく恐ろしい咆哮・・・。
それがいま一度、宏樹たちの身体を震わせた。
「・・・・ゴジラ・・・・ゴジラ!!!」
宏樹は、怒鳴った。

ー海内無双ー

ゴジラ・・・・・無論宏樹たちは、学校の授業でしか習ったことがない、もはや空想上の生物だった。

過去、東京と大阪を焼き滅ぼし、６０年前にはキングコングと大暴れしながら東日本を縦断、静岡県熱海市で相模湾へ落下した後、姿を現さないことから死亡したものと思われていた。

その空想上の怪獣が、いままさに宏樹たちの眼前に現れた。いやファロ島へ来てからというもの、ゴロや大コンドル、そしてエビラ、キングコングといった怪獣たちを目の当たりにしている以上、何をいまさらと思わないワケではない。だが、その威容はこれまで目撃してきた怪獣たちのそれとはまるで異質なものだった。

海岸線に倒れ込んだゴロを睨みつけ、重く低い唸り声を上げながら様子をうかがうその姿は、宏樹たちを戦慄させるに充分だった。背筋に冷たい汗が流れるのを宏樹は感じた。

ゴロは起き上がると、負けじと吼える。呼応するようにゴジラも吼えた。突進するゴロ。

体格はゴジラの方がやや大きいが、ゴロの踏み込みは素早く、ゴジラの右腕に噛み付いた。皮膚に鋭い歯が突き刺さる。ゴジラは甲高く啼くと、なんとか引き離さんと腕を振り回した。重量はゴジラの方が圧倒的らしく、ゴロは振り回されながらも文字通り食らいついている。

「おい、下がろう」

マックスが一行を促した。後退りこそするものの、一行の動きは鈍い。目の前で起きている凄まじい光景に目を奪われているのもあるが、足がすくんで言うことをきかないのだ。

はたと気がつくと、コンノ二世はしゃがみ込んで歯をガタガタ鳴らしている。コンノ三世が呼びかけ、背中をさするも震えが止まらないのだ。

「と、とにかく下がろう」
神鍋は三世に手を貸し、二世の脇から持ち上げる。飯島はあろうことか、ｉＰｈｏｎｅでゴジラとゴロの競り合いを撮影し始めた。
「聡くん何やってんの！逃げよう！」
「不思議だ・・・こうして画面を通すと、恐れを感じない。きっと災害現場を撮影して被災する人も、こうしたところから危機感欠如して・・・」
「いいから！ほら！」
宏樹は飯島の肩をつかむと、強引に引き寄せた。
「それにＹｏｕＴｕｂｅｒたるもの、この様子を撮影せずにおくべきか」
なおもｉＰｈｏｎｅを手放さない飯島。
必死に食らいついていたゴロだったが、とうとうゴジラに引き離された。乱暴に岩壁へ叩きつけられ、雄叫びが木霊する。
宏樹たちに大きな影が覆いかぶさった。空に大コンドルが現れ、ゴジラを威嚇し始めたのだ。
新たな怪獣に顔を向けるゴジラだったが、そこへゴロがタックルを仕掛けた。大きくみじろぎするゴジラに、滑空してきた大コンドルがゴジラの頭部に鋭いクチバシを突き刺す。
頭上の相手に怒りの咆哮をあげるが、再度突進してきたゴロの頭突きがゴジラの土手腹に叩き込まれた。ゴジラは仰向けに倒れるも、すぐさま起き上がりゴロとがっぷり組み合う。
そこを大コンドルが両脚でゴジラの頭を引っ掻き回す。大きく頭を跳ね上げて抵抗するも、一度飛び去ってはまた掻き回すヒット＆ラン戦法にゴジラの怒りは増すばかりだ。
ゴロを押し出すと、再度飛来してきた大コンドルに強烈な尻尾の一撃を食らわせるゴジラ。
「ああ！」
宏樹が叫んだ。撥ね飛ばされた大コンドルは険しい岩壁に激突し、羽毛を撒き散らしながら力無く砂浜に崩れ落ちた。
トドメを刺さんと大コンドルに滲み寄るゴジラだったが、横から突

進してきたゴロが両脚を跳ね上げた。横倒しに吹き飛ばされ、海へ転げ回る。
激しい戦闘はファロ島の地面を打ち鳴らした。宏樹たちは身の危険を感じてより後退しようとしたが、山からはサッカーボール大の岩がいくつも落下してきている。しかたなくその場に身を屈めるしかなかった。その状況に拘束から離れようとする韓国の悪漢2人だったが、ブンチャヤがいささか乱暴に頭を叩きのめし、大人しくさせた。
起き上がるゴジラに、ゴロはもう一撃カンガルーキックをお見舞いした。波打ち際から大きく吹き飛ばされ、ゴジラの身体が海へ沈む。食い下がろうとするゴロだったが、なにかを察したようにその足を止めた。
海面を破って起き上がったゴジラは、甲高く叫んでいた。右肩付近に大きな赤いハサミが食い込んでいたのだ。
過去類を見ない大きな「エサ」に反応した、エビラだった。
すかさずもう片方のハサミでゴジラの左腕を掴み上げる。ギリギリと力を込めると、ゴジラは大きく吼えた。右肩のハサミを一度離し、反撃に転じようとするゴジラの頭をしたたかに殴りつけた。それなりに堪えたらしく、ゴジラは前のめりに倒れ込んだ。
身を捩って転げ回り、どうにかエビラを引き剥がそうとするゴジラだったが、飢えた海の悪魔は決してハサミを離そうとはしない。水飛沫を激しく打ち上げつつ、ゴジラは陸へ上がろうとする。するとエビラの動きが鈍り始めた。陸は自身の活動領域ではないのだ。
そこへ、虎視眈々とチャンスをうかがっていたゴロが再度カンガルーキックを叩き込む。ゴジラはエビラに左手を挟まれたまま吹き飛んだ。エビラも巻き添えとなったが、それでもハサミはゴジラの左腕を捕らえたままだ。
エビラはゴロのキックで海へ戻ったことで、そのままゴジラを海中へ引きずり込もうとした。だが、ゴジラの怒りはとうとう頂点に達したようだった。
エビラには油断があった。水中では自在に動ける自身に分があると考えていたのだが、それはまた、ゴジラも同じだったのだ。

地面という枷がなくなり、ゴジラの長い尻尾はエビラの尾に絡まった。自身も下半身の自由が奪われつつあることをエビラが認識したとたん、甲高い悲鳴を上げた。

エビラの尾に巻き付いたゴジラの尻尾は、一気に力を込めることでエビラの尾を形成している甲殻を粉砕してしまったのだ。

苦痛に全身が震えるエビラは、ゴジラを挟む力を緩めてしまった。仕返しとばかりに尻尾をエビラの顔面に叩き込むと、ゴジラは海面から浮上した。

すかさずゴロが走り込み、得意のカンガルーキックをお見舞いしようとしたが、ゴジラはお辞儀するように身を屈めると、空を切ったゴロに振り上げた尻尾を当て込んだ。

カウンター攻撃を受けたゴロは派手に吹き飛び、波打ち際を転げ回った。起きあがろうとしたところを、背後から迫ったゴジラが踏みつけた。大きく口を開いて苦痛を絶叫にして吐き出す。

２度、３度と図太い脚をゴロの背中に喰らい込ませると、ゴジラはゴロの脇腹を蹴り上げた。ゴロゴロと勢い良く転がり、岩壁に衝突する。ガラガラ声の悲鳴を上げると、やがて口から白い泡を噴き出してゴロは動かなくなった。

邪魔者を始末したゴジラは、２度大きく吼えるとその身を北の方角へ向けた。島から離れるように海へ進んでいこうとしたとき、海面から何かが飛び出してきた。

エビラだった。下半身を砕かれてなお、強大な「エサ」にありつかんとする貪欲なまでの食欲が身体のダメージによる戦意喪失を払拭していた。

突き出したハサミがゴジラの土手腹に刺さる。皮膚こそ破らなかったが、痛みに後ずさるゴジラ。またもハサミを振り上げ、ゴジラを殴りつけようとするエビラだったが、ズタボロの下半身はその威力を減退させてしまった。

空ぶった左のハサミは砂浜に突き刺さり、そこをゴジラの蹴りが直撃した。甲殻が砕かれ、剥き身が溢れ出す。悲鳴を上げるエビラの顔面を、ゴジラは右手で殴りつけた。顔面が陥没し、エビラが横倒しに

なる。
　ゴジラの背鰭が沸騰するように熱を帯びた。青白く光ると、ゴジラはその口から青白い炎、放射火炎を吐き出した。赤かったエビラの甲殻は一瞬で白くなり、次いで黒焦げになった。上半身をゴジラの放射火炎で焼かれたエビラは、激しく白煙を身に纏いながら海へ沈み、２度と海面から姿を見せることはなかった。
　ゴジラは天を震わせるような雄叫びを上げた。そして北の方角を再度仰ぎ見ると、全身を海へ沈めた。始終を目撃していた宏樹は、北へ向かわんとするゴジラの明確な意思のようなものを感じていた。

ー人は過酷な体験をすると、精神安定のため記憶に鍵をかけるー

「あれは・・・あれは、良太郎さんが奥さんと娘サンをお連れして、ワタシと一緒にこの島へきたんです。そのトキ・・・」

ゴジラが去ったファロ島にて、どうにかコンノ二世を落ち着かせた。島の人々は怪獣たちの激闘で崩れた山の様子を見に行ったり、集落は安全か確認したりとバタついている。そんな中、ショック状態だったコンノ二世がポツリ、ポツリと話を始めたのだ。

「島の雰囲気、おかしかった。普段なら山の上で見張ってる人、イナイ。集落から迎えも、コナイ。これ、おかしい。そう思って、良太郎さんと島の奥地へ様子を見にいったんデス」

良太郎おじさん・・・懐かしい名前がコンノ二世の口から飛び出し、宏樹は内心感情が大きく揺さぶられた。

「集落にも、誰もいない。オカシイ。そう思って山の奥、行こうとしまシタ。そうしたら、ボーが、島の王者が・・・ボロボロになって現れたんデス」

よほど恐ろしい思いをしたのだろう、話しながらも時折、身体が震えてしまう。そんなコンノ二世に、息子の三世は背中をさすり、ココナッツのジュースを飲ませる。

「ボーは、これまでも、島に上がってきたタコの悪魔や、島の奥地に潜み、島の人を食べてしまう大蛇をやっつけてしまう、とても強い存在でした。そのボーが、傷だらけで山から転げ回ってきたんデス。そんなボーを・・・あざ笑うように、山の陰から現れたあの怪獣・・・あれが、ゴジラだと、良太郎サンが顔面蒼白・・・言葉に詰まって話し

てくれまシタ」
「コンノ二世、それじゃあ、２２年前にこの島にゴジラが現れて、キングコングと戦ったっていうのか？」
　飯島はコンノ二世が動揺しないよう、努めて落ち着いた声で訊いた。
「ハイ・・・。ゴジラ、恐ろしい存在だということは、オトーサンから聞いてました。そのゴジラが、どうしてこのファロ島に現れたのか、なんでなのか、わからないデス。でも、ボーをやっつけてやろう、そんな雰囲気がたっぷりでした。ボーは、ゴジラが口から吐き出す、青くまぶしい光に身を焼かれ、尻尾で何度も叩かれて・・ゴジラに、やられてしまいそうでシタ。そんなときデス、突然、島に地震？起きたのは」
　宏樹は首を傾げ、マックスを仰ぎ見た。マックスも同じことを考えていたようで、宏樹の視線に頷き返した。マックスの話では、当時ファロ島近辺では地震計に記録がなかったということだったはずだ。
「島の大地、底から崩れました。山が横に倒れて、地面の土が盛り上がりました。そこへ・・・そこへ・・・ああ！」
　激しく動揺するコンノ二世。三世は「オトーサン」と呼び掛けて励まし、神鍋は頭を抱える二世の肩を支えた。
「良太郎サンの娘サン、よちよち歩きで、やってきたんです。良太郎サン、娘サンに駆け寄りました。その二人を、崩れた山が呑み込んでしまって・・・姿が見えなくなったんデス・・・！娘サンを追いかけてきた、奥サン・・・良太郎サンの奥サン・・・睦実サンが、私の目の前で、大きな岩に・・・岩に・・・」
　コンノ二世の慟哭が収まった。代わるように、涙を流し始めた。二世の迫力に、神鍋はたまらず目を拭った。飯島は顔を俯かせ、宏樹は必死に歯を噛み殺し、溢れようとする涙を堪えた。
「地面が、地面が沈んでいく渦に、ゴジラが呑み込まれていくのを、見ましタ。ボーも、続いて土砂に沈んでいき・・・戦いを見守っていた、島の男の人たちも、何人も地面に・・・」
　そこまで言うと、二世は号泣し始めた。三世と神鍋が必死に抱きし

め、共に泣いた。宏樹はとうとう、涙を溢れさせた。
「おそらく・・・おそらくだけど」
宏樹の肩をポンポン叩き、飯島が口を開いた。
「二世は、凄惨な光景を見てしまって、記憶の奥底に封じていたんだろう。今日まで。そして、理由はわからないが、この島の地中に沈んでいたゴジラが再び現れ、そのときの記憶がフラッシュバックしたんだろうな」
「その・・・その後、デス」
泣きじゃくっていたコンノ二世が、むせびながらも口を開いた。
「ボーが、土の中から帰ってきたんです。全身血まみれ、ゴジラに肌を焼かれ、ひどい有様でした。そんな有様なのに、やはり血まみれの小さな女の子・・・良太郎サンの、娘サンを手に収めていたんデス。チキロ酋長はじめ、生き残った島のみんなで、女の子を治療しました。何日かして、息、吹き返しまシタ。島に残ったワタシたち、ボー、みんな喜びました。その子・・・アモ、です。島のみんなから、島に伝わる伝説の女神の名前をとって、アモ、名前、つけられました。怪我のせいか、目は見えなかったケド・・・ボーと通じ合い、ボーと仲良くなれる・・・不思議なチカラ、持っていたんデス」
やはり・・・宏樹は痛感した。アモはやはり、真佑ちゃんだったのだ。
「ボー、ひどく怪我してました。でも、アモ、一生懸命、励ましました。ボーの怪我、アモが島の言葉、ワタシが教えた言葉、話せるようになった頃には、すっかり元気になりました。でも、その頃からデス。島の中、あとは、島の海域、いままで見たことないような、悪魔が現れ始めたの。最初、島の奥から現れたの、ゴロでした。あんな大きな怪物、これまで島に出てきたことありません。ボーと違って、集落、襲いました。ボー、力いっぱいゴロを殴りました。ゴロも、飛び上がってボーを蹴りました。やがて、とうとうゴロが力尽きました。ボー、島に危害加える悪魔、容赦しませン。でも、アモが不思議な音色の笛を吹くと、ゴロ、アモに懐きました。ただの貝殻、アモ、上手に吹いたんデス」

宏樹たちはすっかり見通しが良くなった島の向こうへ目を馳せた。集落から海へは岸壁が立ちふさがり、ここから海は見えなかったのだが、いまでは山が崩れ、海岸線を見ることができる。現れたゴジラが山を突き崩したのだ。

視線の先では、ゴロが横たわっていた。目は醒ましたようだが、泡混じりの力ない呼吸をするばかりだ。

「それからも、ゴロほどではないものの大きなトカゲ、大きなコウモリ、コンドルもそうです。次々と、島に現れました。みんな、ボーがやっつけました。アモの笛で大人しくなる獣もいましたが、海に現れた、赤い悪魔・・・エビラですか。神鍋サン、名前、つけてくれましたネ。アレだけは、獰猛でした。島に近寄る船、みんな沈めてしまいました。ボー、海に入れば、勝ち目ない。エビラも、島に上がったらボーに勝てない、わかってまシタ。だから、時折お互いを追い払う程度に争ってまシタ。エビラ、地形が変わって湧き出てきた黄色い泉・・・アレは、黄色い木の実の成分が溶け出した泉デス。その泉の水、ウンと嫌いデス。海に流すと、島に近寄ってきませんデシタ。アモが、島の長老から大人になる儀式を受けた頃には、エビラ以外、島に悪魔も出なくなりました。ゴロと、コンドル。ボーと仲良しでした」

「なあ、コンノ二世」

おもむろに、マックスが話し出した。

「その、島の地形が崩落したことと、島の住人たちがオレたちを嫌悪することに、もしかして関係があるのか・・・？」

そう訊くと、コンノ二世は大きく頷いた。

「マックスさん、気、悪くしたら、ごめんくだサイ。島にゴジラが出てきて、地震が起きて、山が崩れたのは、金色の髪に白い肌の奴らが島の奥地へ何かを埋めたからだ・・・生き残ったみんな、口にしてました。ワタシ、現場みてナイ。本当のところ、ワカラナイ。でもそれで、金色の髪をしたヤツラ、みんな大嫌い、なりました」

コンノ二世の話を聴き、マックスは深くため息をついた。宏樹も、自身の髪をいまからでも黒くした方がいいか・・・と、思わず頭を撫

でた。
「ひとつの仮説だが」
そう前置きして、マックスは話し始めた。
「米軍は地下核実験をこの島で実施している可能性が高い、という話はしたよな。まさしく、ゴジラがこの島に現れた際も、実験を行おうとしていた。ところが島に上陸し、争い始めたゴジラとキングコングを見て、早々に撤収した。このとき、連中がどういう目的で核を起爆させたのかはわからない。単に慌てていたのか、はたまた、非公式にせよ核を以てしてゴジラをキングコングを葬り去ろうとしたのか・・・とにかく、通常より浅い深度で核を起爆した結果、島の地形を大きく変えてしまった。キングコングはどうにか抜け出したが、ゴジラは多量の土砂に埋もれ、今日まで眠り続けていた・・・」
「たしかに。そう考えると、この島に今日ゴジラが現れた理由を綺麗に説明できてしまう。だがそれはマックス、あんたが意図してなかったとはいえ、この暴虐に手を貸したということにもなるぞ」
飯島は冷静だが、やや怒気のこもった口調で言った。一瞬ムッとした顔をしたマックスだが、否定し得る要素もない。神妙な表情で目を閉じた。
「でもさ、なんで今日になっていきなりゴジラが目を醒ましたんだろ？アイツ一度眠ると２０年以上起きない爆睡体質だとか？」
神鍋が誰にともなく訊いた。
「なんともいえんが・・・朝進グループの２人、アイツらがカギを握ってそうだな。ブンチャヤとボロロが見張っているが、話をきいてみるとするか」
マックスがそう言ったとき、島の住人たちが血相を変えて山から降りてきた。その様子を見て集落のチキロ酋長を含む長老たちが出てきて、しばらくすると長老たちも怒声を上げ始めた。
すかさずコンノ三世が駆け寄り、事情をうかがう。
「・・・どうかしたのか？」
マックスが訊いた。宏樹たちは呆気に取られて声も出せなかった。あの温厚で朗らかなコンノ三世が、般若のように険しい表情をしてい

たからだ。
「・・・黄色い泉、なくなった話した。そこから、何か大きなものが地中から這い出た形跡がある、って・・・」
それだけつぶやくと、ハッとしたようにコンノ二世が顔を上げた。
「黄色い泉、簡単になくならナイ」
宏樹たちは押し黙り、互いに視線を交わした。マックスが指笛を鳴らすと、監禁していた小屋からイとソンがブンチャヤとボロロに連れられて出てきた。義憤から事情を訊こうとしていたチェ支社長も一緒だった。
「コイツら、なんにも話しやしない！オレのこと、バカにしてる！」
そう憤るチェ支社長を嘲笑うように、イとソンは口元を醜く歪めていた。
風船が割れるような音が、集落に木霊した。宏樹はあまりの音量に肩が思わずすくまった。
マックスがイの頬を思い切りひっぱたいたのだった。
「いいか、次にまたナメた顔をしてみろ。今度はこの拳を固めて貴様を殴る」
マックスから放たれた言葉は、英語でも日本語でもなかった。だが何を話したかはおおよそ見当がついた。ひっぱたかれたイは驚愕の表情を浮かべ、傍らのソンも顔を引き攣らせている。チェ支社長は意外そうにマックスを見遣るのだった。
「わかるよな。お前たちの言葉を操れるのはチェ1人だけじゃないってことだ。ではオレの言うことにきちんと答えろ。お前たちは何者だ？そして、どういう意図があってこの島へ同行した？」
マックスは2人の胸ぐらを乱暴につかみ上げた。だが2人のとも子どもの使いではない。そう問われてすんなり答えることはしなかった。
「話さないのなら、話したくなる手を使うぞ。覚悟しろ」
今度はソンの頬を軽くひっぱたいた。イの左頬はさきほどの一撃でミミズ腫れを起こしている。たかが平手打ちとはいえ、マックスのソレは相当強力らしい。

グッと息を呑むイの左手をおもむろにつかむと、乱暴に親指をつまみ、ズッとひっぱった。瞬時にイの手が鮮血に染まり、一拍の後イの絶叫が集落をゆらした。マックスは親指の爪を引っこ抜いたのだ。
「もう一度訊く。貴様らは何者だ?この島にどんな目的でやってきた?」
言いながら、マックスは爪が剥げた親指の部分をグリグリ押し回す。喉を枯らさんばかりに悲鳴を上げるイだが、それでもマックスの質問に答える気配がない。
マックスは躊躇せず、人差し指、中指の爪を引っこ抜いた。あまりの光景と悲鳴に宏樹は目を背け、神鍋はマックスを止めようと思わず手を伸ばした。
「もう一度訊く。貴様らは何者で、どんな目的がある?」
涙と鼻水を流しつつも、イは頑なに口を開こうとしない。マックスは隣で震え始めたソンに目を向けた。身をこわばらせ、逃げ出そうとするも、ブンチャヤにがっしり捕らえられて身動きが取れない。
マックスはソンの頬を右手で握った。思わず口を開けたソンだったが、マックスはおもむろにナイフを握り、数本の前歯を歯茎ごと抉り出した。
「あぎゃあああああ!!!おごごごご・・・・・!」
猛烈な痛みに悲鳴を上げるソンだったが、溢れ出る血で喉が埋まり、溺れたような声を出した。
「どうだ、お前の相棒はしばらく話せない。お前しか話ができる人間はいなくなったぞ。もう一度訊く。貴様何者だ、そしてどういう目的がある?」
イは目こそマックスを睨みつけているが、その目からはいまにも涙がこぼれそうで、顔には玉のような脂汗を浮かべている。
「どうあってもしゃべらないか。もっと痛い目を見よう」
マックスは低くつぶやくと、ナイフの切っ先をイの左手首に突き刺し、見事なまでの速さで切り裂いた。勢い良く血が噴き出し、痛みと正気を失うほどの出血に悲鳴ともうめき声ともつかぬ怒声を上げるイだった。

「オレはこういう出血を止める方法を心得ている。だが何も施さなければ、貴様はもう３０分と持たず失血死を迎える。何なら、右手も同じようにしてやっても良いんだ。そうすれば、もう半分の時間でお迎えが来る。これからどうするかはお前次第。いいか、もう一度訊くぞ」
　マックスは顔をグイッと近づけて、ゆっくりとそして大きく訊いた。
「貴様らは何者だ？何の目的があってこの島へ同行したのか？」
　だがマックスの迫力と失血で意識が飛びそうになったのか、イは白眼を剥いて頭をだらけさせてしまっている。
「もう同じ質問はしないぞ」
　そんなイのズル剥けた爪を強く握って意識を覚醒させるマックス。ひどく耳障りな悲鳴をあげた後、なにかを言い始めた。
「聞こえるようにもう一度言うんだ」
　そう言われてブンブン頷くも、多量の汗が顔を伝い唇が青くなったイはなかなか二の句を継ぐことができないらしい。
「オレはすこぶる機嫌が悪い。右手も切るか」
　マックスはイの右手首にナイフを当てた。
「オン・・・パ・・・」
「もう一度だ」
　マックスは敢えて切っ先を手首に食い込ませた。もう数ミリ突き刺せば、動脈を切り裂いてしまえた。
「ジン・・・グォン・・・派・・・」
「・・・・ジングォン派？」
「ちょっと、ジングォン派と言ったか？」
　チェ支社長が母国語でマックスに訊いた。
「ああ。たしかにそう聞こえたが」
「ちきしょう！カットゥギか！」
「おい、カットゥギだって？」
　今度は飯島が反応した。
「なに？カットゥギって？」

宏樹が訊いた。
「組暴（カットゥギ）。韓国の反社会的勢力のことだ」
飯島が言うと、顔を紅潮させたチェ支社長が振り返った。
「ジングォン派！韓国でも最大規模の組暴だよ！表向きも裏でもやりたい放題！うちの会社にも良悪両方影響あるし、韓国政界にも強い影響力持ってる！あんまり言いたくないがな、南太平洋でウチを含めた韓国企業が牛耳ってるエリアは必ずナワバリにしてるダニのような連中だぁ！」
怒り心頭のチェ支社長はそれから、血まみれの口を押さえてのたうち回るソンに母国語で怒鳴り始めた。マックスは事情を含んだ上で、イの右手に突き刺しているナイフの力を強めた。
「左手の動脈を掻き切ってから４分と５２秒が経過してる。残り２５分・・・いや止血の時間を考慮して、残りの１０分ですべてを洗いざらい話すんだ」

一方その頃、ソロモン諸島サンタ・イザベル島のブァーナ市。
ファロ島から高速船で北へ１時間ほどのところにある小島から、韓国企業保有の小さな飛行場をセスナ機で経ち、ソロモン諸島の中でも比較的大きな都市であるブァーナ市の空港に降り立った３人の男と、抱えられた１人の若い女性。
ファロ島から目当ての女性、アモを連れ出し、ここまで延べ４時間。一連の工作を手掛けた韓国陸軍特殊部隊出身で、現在は裏社会で殺しと破壊工作を請け負っている男、ファン・イグソンは額の汗を拭うと、アモを抱えたまま韓国企業が保有する貨物機へと足を進めた。
時刻は昼下がり、もっとも気温が高い時間帯だ。もうすっかり仕事が終わったとばかりに、同行しているジングォン派のゴロツキ２名はすっかり空にした数本のビールで酩酊してしまっている。あきれながらも手筈通り貨物機へ乗り込むと、自身はもちろんのことアモにも律儀にシートベルトを着用させた。

ここへ向かうセスナの中で2度ほど目を覚ましかけたため、少し多めに薬を注射しておいた。目的地までそうそう目を覚ますことはないだろう。
「なあ～！もっと薬打っといた方が良いんじゃないのかぁ？」
ゴロツキの1人がビール臭い息で話しかけてくる。
「もう十分だ。それに多ければ良いというワケじゃない。多過ぎて呼吸器まで眠らせては死んでしまうからな」
「日本まで生かせろだったもんなぁー！めんどくさい話だよ」
言うだけ言うと、ゴロツキはアルコールの作用で眠りこけてしまった。貴様にこそ致死量の薬を注射してやろうか、そう毒づきたくなった。
「そろそろ離陸するぞ」
貨物機は韓国企業の朝進グループが保有するもので、これから日本の中部国際空港を経由して韓国・釜山へ向かう貨物チャーター便だ。
日本と韓国へ運搬する貨物に加え、取引先の社員を日本の名古屋まで送り届けなさいという本社からの指示とはいえ、むさ苦しい男3人にエキゾチックな南洋の眠れる美女という一行を怪訝に感じつつも、朝進グループの乗務員は珍妙な乗客にシートベルト着用を促した。
「おい、名古屋までどれくらいかかる？」
ファンはこちらを疑わしく見てくる乗務員に訊いた。
「8時間てところだな。現地時間で夜の10時頃にはなるだろう」
「わかった。頼みがある。彼女を起こさないでくれ、死ぬほど疲れている」
そう言われた乗務員は、ぐったりとしている南洋の美女に良からぬ想像を働かせつつも頷いた。
ひとまずファンも眠りにつくことにした。同行するゴロツキどものようにアルコールの作用は必要ない。眠るべきときに眠れるのもプロなのだ。
とにかく、日本の名古屋までこのアモという女性を送り届ければ自分の仕事は終了だ。あとはこの女がどうなろうと知ったことではない。今回のクライアントであるジングォン派しか与り知らぬところ

だ。
使えない同行者たちにはうんざりしたが、とにもかくにも血相を変えたキングコングに恐れをなしたのか、エビの化け物に襲われることもなくアモを島から連れ出せた上、アモを追ってきたキングコングを米軍が開発した最新型の高性能機雷で屠去ることができた。仕事の出来具合としては上出来も上出来だった。
報酬は名古屋で渡されることになっている。裏社会の常で、幾度かにわたる為替とやり取りの末、すっかり洗濯された金を現金で受け取ることになっている。今回提示した報酬額は米ドルで６０万ドル。相場からすれば極めて高額だが、今回は多大なリスクを伴う分、現実的ですらある。何せ相手は武装した軍隊でも、厳重な護衛に警備された上級国民でもない。怪獣なのだ。
満足気に大きく息を吐くと、ファンはそのまま微睡に引き摺り込まれていった。

ちょうどそのころ、サンタ・イザベル島近辺の名もない小島にて、現地の住人たちが白波を煽り立てて北へ猛烈な速度で泳ぐ巨大な猿を目撃していた。
だがこれといった通信手段もない島では、その出来事を外部へ発信することができず、はたまた外部へ発信するという意識すら持ち合わせていなかった。
インドネシア海軍が米軍の通報によってパプアニューギニア近海を警戒し始めるのは、いま少し後のことであった。

ー無駄な知識など、この世に存在しないー

「許せねえ！」
　話を聞いた神鍋が、噴飯やる方ないといったふうに声を上げた。
「お前らのせいで、島はメチャクチャになった上にゴジラまで復活しちまったってことだろがーて!!」
　マックスの拷問で虫の息になっているイの胸倉を、神鍋が掴み上げた。イの足が宙に浮き、だらんとした首がもたげた。
「鍋ちゃん」
　そんな神鍋を宥めつつも、宏樹はイに厳しい視線を向けた。
「彼らの所業はひとまず棚上げしよう」
　ずっと考え事をしていた飯島が口を開く。
「オレたちはどうやって、ファロ島から出られるかを考えよう。ホバークラフトはあの通り、一艘が焼かれ、もう一艘は岩の下敷きだ。朝進グループの船も沖合にいるだろうが、島の地形上ここまで船を進められない。そもそも、ジングォン派が手を回して、オレたちを亡き者にするつもりだったなら、船が離れた可能性もある。衛星電話も岩に潰され故障。ｉＰｈｏｎｅは圏外。いや、電波があったところで・・・」
　忌々しげに、自分たちが暮らしていた小屋を見遣る飯島。集落は無事だったのだが、不運にも小屋だけゴジラに踏み潰されてしまったのだ。
「発電機が御釈迦になって、充電が持ちそうにない。電波が圏外だと、絶え間なく電波を探して電池の消費が激しいからな」
「おまけにＹｏｕＴｕｂｅｒのサガで、さっきまでの争いを撮影しまくったから余計に電池使っちゃったよね」
「それは言うな」

３人の電池残量を確認したのだが、いずれも１０％を切っている。しかも何もせずとも、数分に１％ずつ消耗していってしまうのだ。マックスやチェ支社長も例外ではなく、文明の及ばぬ島では如何に文明が無力なのか、普段文明の利器に囲まれて暮らす生活が一変すると如何に不便極まりないか、３人は深刻に受け止めた。
「あんまり考えたくなかったけど」
勢いよく息を吐き出して、神鍋が言う。
「この島から出られないし、救援を呼ぶ手段がねぇってことでがーて」
「そうだな」
「でも、せめてゴジラが出たことをどこかに通報っていうか、しらせるくらいはしといた方が良いんじゃ・・・でも何もできないか・・・」
そう言い消沈する宏樹の肩を、飯島は励ますようにポンポン叩く。
「そのことなんだが、少し時間をもらえないか？」
顔中血まみれになって苦しむソンを縛り上げたマックスが、ふいに言った。
「２２年前だ。オレたちは二艘のホバークラフトでここに上陸した。隠密行動故に、洞窟に侵入してな。で、慌てて撤退したもんだから、一艘で鮨詰め状態で逃げ出した」
「・・・ということは？」
ハッとしたように飯島が顔を上げた。
「ああ。もし洞窟にホバークラフトが残っていれば・・・そして、動かせることができれば・・・」
それをきいて希望に満ちた顔を浮かべる宏樹と神鍋。だが対照的に飯島の顔は曇った。
「お前の言いたいことはわかる。ホバークラフトが動いたところで、最寄りの島まで燃料が持つかどうか・・・その島にも、人や通信設備がなかったら・・・」
「そうなったら、オレたちずっとこの島で暮らすのか？でも悪くないな。食べ物には不自由しないし、なんなら果物も栽培できそうな環境だ・・・あ、でも１０月の稲刈りあるもんな・・・」
どこかのんきな神鍋だったが、そんな神鍋の腕を宏樹は叩いた。

「鍋ちゃん、僕らこのままじゃ行方不明者扱いだよ。それにゴジラもキングコングも、島の外へ出たんだ。特にキングコング、このままじゃ日本に上陸しちゃうだろ」
　イとソンから訊き出した話だと、アモを利用すべく韓国の組暴は日本の愛知県にある拠点へ連れ出したようだ。もしもキングコングがアモを探しに日本へ現れたら、手がつけられない騒ぎとなってしまう。彼らの話では、追って来るキングコングを屠るべく高性能機雷を用いたそうだが、それがどれほど効果があるものか・・・。現に、６０年前に修じいちゃんが手引きして日本へ連れて来られる際、運搬中に暴れ出すという非常事態でＴＮＴ火薬を爆破させたことがあった。
　その際も、キングコングはほぼ無傷で日本に上陸。九十九里から東京都内に侵攻したことで甚大な被害を及ぼしたのだ。
「そうだな。せめて、ゴジラとキングコング出現をどこかに通報しないとな。どこへ向かうかわからないが・・・」
　飯島が顎に手を当てていると、ブンチャヤがマックスになにかを話した。英語を理解する飯島は驚いた顔をした。
「おい、どうしたんだ聡くん」
　神鍋が訊いた。
「衛星電話、なんとか修理できるかもしれないって。それができれば、今回の一件を連絡できるし救援も呼ぶことができる」
「そういうことだ。修理はブンチャヤに任せるが、この島は衛星電話も電波が微妙だ。少なくとも海上へ出る必要はある。あのエビの化け物はくだばったと信じたいが・・・」
　マックスがつぶやいた。
「ねえねえ、それなら」
　チェ支社長が残り少ないスマホのバッテリーを気にしながら話しかけてきた。
「ここから南東へ１海里のところに、ウチの会社の通信拠点があるんだ。小さな無人島だが、少なくとも衛星電話の範囲だし、通信施設コードがあるから救難信号出してもすぐ発見できるはずだ」
「１海里・・・ホバークラフトでたどり着けるか」

飯島はマックスに訊いた。
「ガソリンの残量次第だ。そもそも現存するのか、動くかどうか、やってみなければわからん。とにかく、オレはボロロと一緒にホバークラフトをたしかめてくる。ブンチャヤにはなんとか衛星電話を修理させる。なんとかしてここを出よう。で、そこから先だが・・・」
マックスは3人を見遣った。
「お前たちは、日本へ戻るんだろ?」
「もちろん。アモが心配だ」
宏樹が即座に答えた。
「もしキングコングが日本に現れた場合、ヤツを止められるのはアモだけだ。何としてでも彼女を救い出す必要がある」
飯島も語気を強めて答える。
「その、ジングォン派だったか?一発ブン殴ってやらなきゃ気が済まねぇろ」
丸太のような腕に力をこめて、神鍋が言った。
「乗りかかった船だ。オレも日本に行こう」
思わぬマックスの言葉に、宏樹たちは目を丸くした。
「簡単に考えてるようだが、アモを拉致したのは裏社会の奴らだ。素人だけで対峙できると思うな」
そうは言うが、なぜマックスがここまで決意を固めたのか、宏樹は理解できた。
「私も一緒だよ」
チェ支社長も乗ってきた。
「私、コケにされたも同然。それに同胞の犯罪、見逃せないよ」
あれやこれやと仲間が増えたが、相手の言語がわかる人物がいてくれるのはありがたい。
「三世、お前、宏樹サンたちと日本、行きなサイ」
ようやく具合が戻ってきたコンノ二世が、息子を呼び寄せた。
「アモ、ファロ島の大切なひと。ファロ島にゆかりある人間、いなきゃいけナイ。お前、しっかり仕事果たしてきてほシイ」
「ウン、オトーサン。オトーサンも、どうかお大事に」

コンノ三世は二世の手を固く握り、親子はしっかりと頷き合った。

それからしばらくして、マックスがボロロと戻ってきた。
「良い報せだ。ホバークラフト、ちゃんと残っていたぞ。ガソリンも、なんとか1海里走る分はありそうだ。そしてよしんばガス欠になったとしても・・・」
マックスはブンチャヤから衛星電話を受け取った。
「どうやら電話が修理できたらしい。海に出てみないことには電波を拾えないが、いざとなっても海上へ出て救難要請を出すこと程度はできそうだ」
それだけ言うと、マックスは宏樹たちとチェ支社長、そしてコンノ三世を見遣った。
「わかっていると思うが、危険な目に遭うかもしれん。覚悟はできているか？」
各々、頷いた。無論、その危険がどのようなものか、想像しきれない部分もある。だがしかし、それぞれがそれぞれの信念、考えで決意を固めていた。もっとも力強く頷いたのは、宏樹だった。
「よくわかった。オレの仕事はそんなお前たちの安全を確保することだ。任せておいてくれ」
「ありがとう。マックスが言ってくれると心強いよ」
宏樹が言うと、マックスは若干はにかんだ。
「いざとなれば、ワタシだって力になるよ。こう見えて、ウチの国はみんな兵役ついてるからね」
チェ支社長がたるんだ腹の肉を叩いて豪語した。
「みんな、スマホの電池具合は？」
飯島が訊くと、全員バツの悪そうな顔をした。言葉に出さずとも、全員の表情が物語っていた。
「あと、ジングォン派のコイツら、どうする？」
チェ支社長が訊いた。２人とも満身創痍だが、治療する義理もな

い。行動を共にする義理もない。
「コンノ二世、チキロ酋長に伝えてくれ。彼らの処置は任せる、とね」
飯島が言った誰からも異論はなかった。チキロ酋長はコンノ二世の訳語を聴いて大いに頷くと、島の若い衆に何かを命じた。彼らは乱暴にイとソンを担ぎ上げると、奥歯をガタガタ鳴らす2人をどこかへ運んでいってしまった。
チキロ酋長は宏樹の頭上に手をかざした。不思議に目をパチクリさせる宏樹。
「コレ、島に伝わる祝福と加護の儀式。宏樹サン、島の神があなたたち守る。アモ、よろしく頼む、言ってマス」
宏樹が得心したように頷くと、チキロ酋長は宏樹を抱きしめた。背中をバンバン、痛いほど叩いた。同じように神鍋と飯島も抱き締め、背中を叩く。
「また、島、戻ってきてほしい。アナタたち、ずっと私タチの仲間、トモダチ、言ってマス」
チキロ酋長の目に、うっすら涙が浮かんでいるのがわかった。ふいに、宏樹も同じように涙が込み上げてきたのがわかった。なんだろうか、このひどく懐かしい気分は・・・。
飯島は笑みを浮かべたまま頷くのみだったが、神鍋はたまらず涙を流した。
「今度来るとき、この島でも育つ稲持ってくるよ」
チキロ酋長と握手しながら涙をボロボロこぼす神鍋に、「それ種苗法と検疫法的に大丈夫なのか?」と冷めたツッコミを入れる飯島。
酋長たち一行はホバークラフトが起つ浜辺まで見送りに来てくれた。全員から暖かく、そして強く意志のこもった視線を受ける。何せ、島の神的存在を救い出すために島を出るのだ。
「なんだか、魔王を倒しに出かける前の勇者になった気分だな」
鼻をズビズビさせながら、神鍋がつぶやいた。ホバークラフトは問題なくエンジンがかかった。多少燃料が劣化しているのか妙な臭いも鼻をつくが、マックスの話だと1海里程度は問題なく進めるだろう、とのことだった。

ホバークラフトが発進すると、チキロ酋長始め島のみんなが大きく手を振ってくれた。宏樹たちも負けじと振り返す。
「さて、しばらく進むと衛星電話の範囲だろう。まずはソロモン諸島の沿岸警備隊に救援を要請するとして・・・どうやって日本まで帰る？本来、お前たちが乗るわけだったシドニーのカンタス航空機は、もう間に合わないだろう？」
マックスが訊いた。宏樹と神鍋は顔を見合わせ、飯島を共に見遣った。
「・・・チェ支社長、ここからブーゲンビル島のブインは近いかな？」
そんな飯島は、チェ支社長に向き直った。
「ま、まあ比較的・・・しかし、なぜ？」
「あそこは週3回だが、チャイナエアラインが台北に向けて便を飛ばしてる。たしか月、木、土の21時頃発だった。そして、今日は土曜日・・・」
「そうか、台湾経由で日本目指すか！」
「台北からなら、同じくチャイナエアラインが中部国際空港まで飛んでるからな。あとは救援がそれに、間に合うかどうか、だ」

宏樹たちがホバークラフトで出発後、燃料ギリギリで朝進グループの無人通信拠点にたどり着いたのは、ファロ島を出てから1時間と少し経過した頃だった。

移動している上に海上ということもあり、しばらく衛星電話が通じないことには苛ついたが、拠点に着く手前にはソロモン群島の沿岸警備隊に救難信号を報せることができた。通信拠点には施設番号が割り振られており、そのシリアル番号を伝えたところ、すぐにでも救難機を飛ばすとのことだった。

実際、さほどかからず救難航空隊がヘリコプターでかけつけ、ブーゲンビル島への移送を頼んだところ承諾してくれた。通訳はコンノ三世が買って出てくれたのだが、チェ支社長の肩書きが何より物を語った。朝進グループの名前は、殊ソロモン諸島においては強烈な神痛力を持ち合わせているらしい。

救難出動したことで事情聴取が必要となり、要員としてブンチャヤとボロロが残ることとなった。そこから台湾行きの便があるブイン空港までタクシーを利用し、チャイナエアラインのチケットを人数分購入した頃には、日が沈みかけていた。

「どうにか日本へ戻る段取りついたのは良いとして・・・参ったな」

出国審査を終え、簡素な搭乗待合室に入るなり神鍋がぼやいた。

「万能充電器、故障してたとは・・・」

空港のコンセントに差し込んでも、うんともすんとも言わない万能充電器。電圧の異なる海外へ旅行しても問題なく充電できる代物であり、特に飯島のように旅を生業とする人間には必需品ともいえる道具だ。今回旅立つにあたり、宏樹も神鍋も飯島のアドバイスで事前に準備していたのだが、いかんせん宏樹たちがファロ島で生活していた小屋が破壊されたのが痛かった。その際、全員分の荷物を小屋に置

きっぱなしだったことが痛かった。
「そりゃあ、あれほど小屋が崩れてしまえば、な・・・」
飯島は忌々しそうに頭を掻いた。
「よしんばあったところで、この設備では・・・」
宏樹たちが飛び立とうとしているブイン空港は一応国際線が運航しているのだが、少なくとも先進国の標準的な国際空港が備えている機能は望むべくもなかった。ＵＳＢコンセントもふたつしかなく、忙しそうにどこかへ電話を続けるビジネスマンによって占領されてしまっていた。第一、充電器のケーブルが中で断線していた場合はお話にならない。
「こういうとき、文明のありがたさを実感するばかりだな」
大きくため息をついた飯島が言った。
「太田さんとか二宮さんとか・・・あっちこっち電話するにも、番号わからねぇんでは話になんねぇすけよ」
神鍋はなんとかｉＰｈｏｎｅの電源が入らないか、ずっと電源ボタンを押しては放していた。だがわずかばかりの電池もとうとう消耗したらしく、ウンともスンとも言わなかった。それは宏樹も、飯島も同じだった。
「ワタシもです。電話番組はおろか、スケジュールから資料から全部、スマホ入れてましたから。一応、ワタシもビジネスマンなもんで」
チェ支社長が口をはさんできた。
「参ったなあ、どこにも何にもできないなんて」
宏樹が弱り果ててつぶやいた。
「どれ、ＵＳＢケーブルを見せてみろ」
再び調子の悪くなった衛星電話を修理していたマックスが声をかけてきた。飯島が手渡すと、ケーブルのコードを歯で食い破り、中身を剥き出しにした。
「見てみろ、こことここが断線している。うまいことつないで、テープやら何やらで巻き直せば大丈夫だ。ここは任せろ」
「本当か？頼りになる」
マックスは飯島からコードを受け取ると、テープを借りるべく空港

職員に話しかけた。職員は英語が苦手なのか困惑気味の表情を浮かべていると、すかさずコンノ三世が通訳に割って入った。意思の疎通ができたらしく、空港職員はセロハンテープを取りに向かった。
「衛星電話は修理できたようだが・・・やはり番号がわからないんじゃ意味がないな」
　飯島がつぶやいた。
「それに電池も気になるよね。修理できたとしても、コレ充電する装備ないでしょ？」
　宏樹が言った。
「ああ。スマホの充電器がすぐ復活すれば良いんだが・・・」
　飯島はマックスとコンノ三世に目をやった。ミクロネシア時間といって、こちらの人々は何事にもゆったりでおおらかだ。セロハンテープを持ちに行った職員はまだ姿をあらわさない。
「おおああ!!」
　突然、神鍋が大声をあげた。宏樹たちはおろか、大きくない搭乗待合室の全員が素っ頓狂な声を上げた神鍋に注目した。
「どうしたんだ鍋ちゃん、いきなり大声出して」
「いつも電話してる農協の電話番号、オレ暗記してたんだ！」
「農協？だからなんだって・・・」
「だからよぉ、農協に電話して、伝通とパシフィック製薬の番号調べてくれるようお願いしてみれば良いろ!?」
「・・・なるほど。この状況では、たしかに」
　得心したように頷く飯島。
「でもさ、そんな用事頼んじゃって大丈夫なの？」
　宏樹が訊いた。
「農協はオレたち組合員の味方だし、何でも屋だすけさ。大丈夫がて」
　そう言うと神鍋は衛星電話を飯島から受け取り、飯島に国際電話のかけ方を習って、あとは暗記している番号を押した。
「もしもし、神鍋だすけ・・・おおみさきちゃんか！おう！ファロ島最高だったすけさぁ！内海のばあちゃんや渡辺のとおちゃんら、みんなして羽田まで見送り来てくれたすけよぉ！そーそー！自然豊かで、島

の人もみんな良い人ばっかだったすけさぁ！オレいつかファロ島でも農業やりたくなったっけよ！営農指導の橋本さん連れて今度ファロ島行ってみて・・・」
雑談もそこまでだ、とばかりに、飯島は神鍋を肘でつついた。
「そうだそうだ！みさきちゃん悪イ！あのさ、変な話するようだすけども、伝通本社と、パシフィック製薬の、ええっと・・・・宣伝部か！宣伝部の番号教えてくんねろ？折り返しでなくて良いから、このまま！ワケ話せば長くなるすけども、うん、大急ぎで！頼むがーて」
居ても立っても居られず、神鍋に近寄った宏樹と飯島の耳に、電話の保留音が聞こえてきた。
「衛星電話、折り返し電話できねぇの忘れっとこだったすけ」
「どうでもいいけど鍋ちゃん、さっきから方言出まくってるよ」
宏樹がツッコんでるうち、飯島は別の問題を気にかけていた。搭乗時刻が迫っているのだ。これから搭乗するチャイナエアラインの便は搭乗口のさきに駐機しており、カウンターにはチャイナエアラインの制服を着た現地係員がスタンバイしている。
神鍋が宏樹と飯島の肩をたたき、ペンを走らせる仕草をした。すかさず飯島はポーチからメモとペンを出すと、神鍋に手渡した。
「よし！みさきちゃんありがとう！今度またクッキー持ってくすけさぁ！」
電話を切ると、神鍋は農協職員から聞き取ったメモを飯島に見せた。
「僕が電話する」
そう言って衛星電話を手にする飯島。早速番号を押し、まずは太田へ連絡するべく番号を押す。そうこうしているうちに、ケーブル修理に悪戦苦闘するマックスと、何やら慌てた様子のコンノ三世が戻ってきた。
「ミナさん、もーすぐ搭乗始まる！それと・・・」
電話をしている飯島に気を遣い、コンノ三世は声を潜めた。
「空港のラジオ、おかしなコト言ってる。カロリン諸島、津波、襲った」

間もなくして時間が訪れ、搭乗するに当たり一度電話を切らなくてはならなかった。
「参ったなあ、もうすこしだったのに」
座席に座るなり、神鍋が心底悔しそうにつぶやいた。あんたが余計な話をするからだ、とは言うまい。宏樹も飯島も咳払いした。
「何にせよ、伝通は代表番号で太田さんの部署へ廻されるまで時間かかってしまったからね。どちらにせよ、太田さんも二宮さんも不在。第一、ゴジラもキングコングも現れてファロ島飛び出したって話に、ファロ島の巫女が拐われて日本へ渡ったなんて話、相手も不審にしか思ってないだろうし」
飯島がフォローした。幸い機材は最新型で、ＵＳＢケーブルを挿して充電できるタイプだ。着席するなり飯島はマックスが直してくれたＵＳＢケーブルで充電を始めた。やがて機は宙を舞い、安定高度に達するとすぐさまｉＰｈｏｎｅの電源を入れた。
「思ったとおりだ。連絡がつかないことで、太田さんと二宮さんからメールやらメッセージやら・・・大量に送られてきてるぞ」
隣席の宏樹と神鍋が覗き込む。たしかに、３人の身を案じるものから、旅程を案内した韓国の朝進グループから３人がファロ島の事故に巻き込まれ、生死不明という未確認情報を寄せられた旨のメールもあった。
「僕ら、死んだと思われてたのか」
「連中、本気でファロ島に置き去りにするつもりだったらしいね」
「ちっくしょう、アモを連れ去るし・・奴ら、ロクなモンじゃねぇろ」
とにかく電話ができないため、飯島は現状をメールで伝えることにした。こういうときは、商社勤めだった飯島の文書作成力が頼りになる。
「あとは、いつ２人が気がつくかだが・・・日本時間で午後６時。ボチボチオフィスに戻る頃だろう。さして時間もかからず、メールを見てくれると思うが・・・」
メールを送り終えると、世の中の状況を探るべくネットニュースを

検索し始める飯島。
「こんな風にスマホを触りまくる生活、考えてみれば久しぶりだな」
ひとりごとを言いながら画面を操作していく。
「それにしてもさ鍋ちゃん、太田さんも二宮さんも、ゴジラが復活したなんて信じるかな」
「映像撮ったからそれ見せれば・・・って、ああ！映像メールにくっつけて送ってやれば２人も信じるか！」
宏樹は顔を大きく綻ばせた。
「そっかあ！良かったなオレら、ＹｏｕＴｕｂｅｒのサガで撮影して！」
「その必要はなさそうだ」
飯島が宏樹と神鍋に、スマホ画面を見せた。一気にニュースの通知が届いたのだ。
【カロリン諸島に高さ１０メートル強の津波襲う　地震観測されず原因不明】
【ミクロネシア海域で海難事故相次ぐ　救難信号と共に『海が沸騰した』という通報も】
【米海軍、グアム島沖合で未知の勢力と交戦状態か】
【速報　グアム準州のモアナ知事、グアム全土に非常事態を宣言】
【速報　米国防総省会見　グアム沖合の未確認勢力をゴジラと確認】
【グアム　アンダーセン空軍基地より対艦戦闘機Ｆ１４が緊急発進】

ーグアム壊滅ー

・米領グアム　アプラ・アメリカ海軍基地　米海軍空母「マーヴェリック」

「出撃だ、出撃！」

空母「マーヴェリック」を母艦とする米海軍航空隊の副隊長を務めるカザンスキー少佐の号令で、ブライアン・タガワ大尉を始めとする海軍航空機隊のパイロット８名が甲板に整列した。

カザンスキーの号令こそあれど、航空隊隊長であるウェルズ中佐の登場までやや時間がかかった。艦の通信司令室であるＣＩＣルームへ向かったきり、なかなか上がって来ないのだ。

「戦況が思わしくないのかな」

タガワは隣に立つ、同僚のショーン・タケカワ大尉に話しかけた。年齢が近い上に同じ日系人ということもあり、隊で一緒になってからというもの、公私ともに行動を同じくする機会が多かった。

「わからん。ちょうど南洋で演習中だったペンサコーラとデモインが、先んじて攻撃を始めたって話はきいてたが」

ペンサコーラとデモイン。いずれもアプラを母港とする海軍の巡洋艦であり、たまたまグアム島南海にて演習中だった。ところが南太平洋に突如としてゴジラが出現、周辺諸島に甚大な津波被害を及ぼしつつ太平洋を北上し始めたということで、本国の国防総省よりグアム防衛を目的とした攻撃命令が発令。米海軍巡洋艦による初の怪獣攻撃と相成った。

６０年前、北極海で復活したゴジラは探索用潜水艦「シーホーク号」を撃沈させ、北方にある連合国軍基地を襲撃。目と鼻の先に位置している旧ソ連への対応を目的として、主に米国とカナダの陸軍部隊が駐屯していたのだが、基地防衛を主眼に迫り来るゴジラへ対して砲撃を

加えた。
　だが当時、基地の総力を挙げた砲撃はゴジラに対してまったく効果がなく、爆煙漂う中北極海から難なく上陸したゴジラに基地は完全に破壊されてしまった。そうした反省を受け、当時の西側諸国を中心にゴジラに対する戦術及び使用兵器の検討が行われた。とりわけ、主にゴジラは海を渡ってやってくるということから、海軍による対怪獣戦術の必要性が叫ばれた。
　以後、ゴジラもキングコングも、あるいは類似した怪獣が出現しなかったため、兵力と戦術のみ模擬戦や訓練において温存された状況が続いていた。事実、今回の巡洋艦演習も、海面下を進行するゴジラを想定した軍事訓練であった。
　具体的には、レーダー探知により2隻の巡洋艦でゴジラを進行方向から包囲。左右両方向より爆雷投下による飽和攻撃を実施後、海面に浮上したゴジラを両方向より囲い込み、主砲ないしは巡洋誘導弾による連続攻撃を加え、上空の海軍戦闘機隊による順次爆撃によって圧倒することを目的とした訓練だった。
　もちろん、本訓練において突然実戦となることは誰も想像だにしていなかった。南太平洋で地震が起きていないというのに、周辺島嶼へ大津波が襲来したという不可解な現象が起きるまでは。
「ヤツらが戦闘を始めたんなら、オレたちすぐ出撃の指令が下されるハズだろ。すいぶんとお預けを喰らってるようにも思えるんだが」
　傍らで日系人2人の会話に聞き耳を立てていたワラス大尉が口を挟んできた。黒い肌が膨れ上がるほどに筋肉隆々、海軍航空隊ではなく海兵隊へ入隊した方が良さそうな体格の持ち主だ。
「そうだよな。巡洋艦とのコラボで、ゴジラだろうが何だろうが多重爆撃で海の底へ叩き落とすのが基本戦術のハズだよな」
　タケカワが言った。
「もしかしてオレたちが離陸するまでもなく、ゴジラ撃沈しちまったんじゃねえのかな。イヤ、だとすれば出撃命令が出るハズもないし・・・」
　ブツクサつぶやくワラス。この隊にはタガワを含め3名の大尉が

主力として勤務している。他の5名はいずれも階級が下であり、大尉3名の会話に耳を傾けるのみ、みなじっと歯を食いしばっている。
するとＣＩＣルームからウェルズ中佐が出てきた。その姿を見遣ったカザンスキー少佐の「気をつけ！」という号令で全員に緊張感が走る。
ウェルズ中佐が正面に立ち、気をつけの姿勢を取る。
「敬礼！」
カザンスキーが号令をかけると、全員が敬礼をする。ウェルズの表情は固く、唾を勢いよく飲み込まんとするほど顔面が汗でたぎっている。
「ＣＩＣより報告があった」
それだけ告げると、ウェルズは軽く咳払いをした。ほんの少しの間なのだが、整列している一同はその時間が1時間にも2時間にも感じられた。
「いまより３０分前、本島より南東に１０キロ、太平洋上にてペンサコーラ並びにデモインが、海中を侵攻中のゴジラに対し爆雷攻撃を実施した。爆雷の効果が認められ、ゴジラは浮上。ところが当方の予想をはるかに上回る水中機動力で以てして、ペンサコーラとデモインは轟沈。海面に姿を現したゴジラは目下、ここ本島を目指して進撃中」
律儀に気をつけの姿勢を崩さなかったタガワたちに、一気に動揺が広がった。
「本隊は精密誘導爆弾の集中投下により、ゴジラ撃滅を期すべく命令が下された。各員、一層奮起し事態に当たるように。以上！」
「敬礼！」
そう命じたカザンスキーの声が震えていた。
信じられない思いだった。本来の訓練では、海上の巡洋艦と共同でゴジラへの爆撃を敢行。飽和集中攻撃によりゴジラ撃滅は可能、そう耳にしていた。何せ、６０年前とは兵器の威力も、敵の探知能力も、戦術運用もまるで異なるのだ。
だがしかし・・・タガワは海軍航空隊に入隊後、最初に仲間たちと浴びるようにバドワイザーをかっくらった日のことを思い出した。

「軍は何を根拠に、この戦術でゴジラを撃退できるなんて言いやがるんだか」
「誰もゴジラと戦ったことないってのに、よくもえらそうにこんな教科書作ったもんだな」
だが、そう文句を言い合った新兵時代はとうにすぎた。いつのまにか、この戦術を基に新兵へ訓練を施す立場となり、新兵たちの文句を諌める立場となっていた。
カザンスキーに促され、一行はそれぞれの愛機・・・Ｆ１４トムキャットへ搭乗する。レーザー精密誘導爆弾がそれぞれ２発、両翼下に搭載された状態だ。
空母「マーヴェリック」上でエンジンを焚き、タガワを筆頭に可変翼を閉じた状態で発進していく。エンジンの轟音と空気を切り裂く音がイヤーマフ越にそれぞれの鼓膜を揺らす。今日の空は抜けるように青い。なぜかそれが、むしろ不気味にすら感じられた。
グアム本島を離れると海上に２筋の黒煙が空へ伸びているのが目に入った。筋の元へ視線を這わせていくと、うっすらとだがオレンジ色の火柱が確認できた。
『中佐の話はマジらしいな』
ワラスの声が無線を通して、コクピットに響いた。
「まさか、巡洋艦を一撃で・・・」
もはや６０年前のおとぎ話としか考えられない状況だったのだが、改めてゴジラの恐ろしさが背筋を凍らせた。
「・・・目標、確認!」
先頭を飛行していたタガワが言った。燃え盛る艦船が２隻。その間を縫うように、海面を移動する存在が視認できたのだ。
タガワはＦ１４の可変翼を開いた。後続の７機もタガワに倣い、可変翼を開かせる。空気抵抗が一気に機を震わせ、飛行速度を減速させる。
『全機、攻撃を許可する。絶対にヤツを上陸させるな!』
カザンスキーの声が轟く。ゴジラの進路上には、米空軍の太平洋における最重要拠点、アンダーセン基地がある。ここを叩かれた場合、

米国の太平洋～西アジアへおける影響力が大きく減退してしまう。世界の安全保障、軍事バランスが一変してしまう可能性が大きくなる。
何よりその先、デデト、タムニン、ハガニアといったグアムが誇るリゾート地帯及び人口密集地がある。
軍が用意した宿舎に住まう、妻と娘のことを想いつつ、タガワは操縦桿を前へ傾けた。やや前傾姿勢となったＦ１４は、機首からレーザーを発射した。
標的から反射されたレーザーを探知すると、液晶パネルが赤く点滅する。
「フォックス１！」
『フォックス１！』
『フォックス１！』
後続機からも、同様のコードが発せられる。一瞬前方に見えた精密誘導爆弾は、一気に海上の対象へ引き寄せられるように落下していった。
エンジン音響く機内にも、爆弾が連続して炸裂する音が聞こえた。しばらく飛行して操縦桿を右に傾け、一気に逆方向へ進める。
『おい、傷ひとつついてないぞ！』
タガワが視覚でそのことを認識するのと、無線越しにワラスが怒鳴ってくるのが同時だった。計８発の精密誘導爆弾が直撃しても、ゴジラはまったくの無傷だったのだ。
『全機転身！着弾角度を深くとり、第二波攻撃をせよ！』
カザンスキーの声が聞こえてきた。各々、搭載した精密誘導爆弾はもう一発ずつ。この攻撃も通じなかった場合、空母へ帰還し再武装して出撃しなければならない。だがそうしている間に、ゴジラは確実にアンダーセン空軍基地へ上陸してしまうだろう。
「各機！侵入角を取り、再度爆撃」
タガワの指揮に、それぞれが『了解！』と返す。機首変更のため一度閉じた可変翼を広げ、隊列を組んだままゴジラへ向かう。
もしもここで、艦隊からの砲撃が加わればどれほど頼もしいこと

か・・・。ふと思った。ゴジラとアンダーセン基地が、同じ視界に飛び込んでいる。
「フォックス1！」
なにがあっても基地には上陸させぬ！そう決意を込めて怒鳴った。他の機も同様、ほとんど叫び声に近しかった。
精密誘導爆弾は吸い込まれるようにゴジラへ落下していき、その強固な皮膚に密着した。
幾度かの猛烈な炸裂音に続き、爆煙が大気に拡散する。激しい爆発は海上を震わせ、白い波飛沫が一帯に舞い上がる。
黒い爆煙が晴れぬうち、大気が揺れた。ゴジラの、怒りに満ちたような咆哮だった。
「誘導爆弾、効果を認めず！」
歯ぎしりしながら、タガワが怒鳴った。基地のカザンスキーが漏らしたため息が無線越しに聞こえてくる。
『くそったれ！ちっとも効いてねえ！』
ワラスの怒号が各員に聞こえてくる。
「中佐、以後の指示を願います」
沸き上がる焦りと怒りをどうにか抑え、タガワが指揮官に問う。
「通常装備のサイドワインダーは両翼下に健在です」
自分でも、とんでもないことを言っているという認識はあった。
『ソフトの書き換えはすぐです。準備が整い次第、攻撃は可能です』
タケカワの言葉で、隊の空気はまとまった。
『せめてあと一撃、あのクソ恐竜にブチ込んでやりましょう！』
ワラスが言った。ゴジラはアンダーセン基地の南東側へ侵攻。もう数歩進むだけで基地へ上陸してしまう。
『全機、サイドワインダーを対地攻撃用に変換の上、ゴジラ攻撃を続行。少しでも本島上陸までの時間を稼ぎ出せ！』
ウェルズの声が全機に届いた。決意を込めた表情のタガワだったが、それは後続の7機も同様だろう。
赤外線探知式空対空誘導弾、通称サイドワインダーは米国を始めとする西側諸国の空軍戦闘機に標準装備されている兵器だ。本来は戦

闘機同士の闘い、ないしは航空機の撃墜用に開発されたもので地上攻撃用ではないが、発射ソフトを書き換えることで空対地攻撃用誘導弾としての運用も可能になる。

だがそれは、本来高高度から地上爆撃を敢行するという戦闘機の安全優位性を失うことを意味する。これまでより地表近くを飛行し、目標に接近した上で赤外線を対象に照射。そのポイントを狙って誘導弾が放たれる。すなわち、対地サイドワインダーによる攻撃はゴジラに接近して行わなくてはならない、ということを意味する。

当然撃墜されるリスクは大幅に高まる。だが・・・。

タガワは眼下に広がるグアムの主要リゾートエリア、タムニンを仰ぎ見た。リゾートホテルやマンションから大勢の住民が道路に溢れ出て、どこへ逃げれば良いのかわからず右往左往している様子が見てとれる。

もはやゴジラのグアム上陸は避けられそうにない。となれば・・・少しでも時間を稼ぐことができれば・・・。

主翼が開き、減速したまま地表から２００メートルほどの低空飛行に移る。アンダーセン空軍基地の広大な滑走路が見えてきた。基地守備隊によるゴジラ攻撃が始まったようだが、せいぜいが対空機関銃や２０ミリ砲弾による攻撃で、ゴジラに対しては転け脅しにもなっていない。

ゴジラが基地滑走路に侵入した。

「全機、発射！」

タガワの号令で、片翼下のサイドワインダーがゴジラに向けて放たれる。滑走路のコンクリート面に亀裂を走らせながら進むゴジラの正面に、続々とサイドワインダーが炸裂する。発射直後からそれぞれ左右に操縦桿を倒し、ゴジラ正面を回避するようにして飛び去っていく。

太平洋上で大きく旋回したタガワは、遠目にゴジラが攻撃に意も介さず侵攻している姿に歯噛みした。

「正面に回り込め！もう一度攻撃だ！」

タガワが全機に指示した。いずれもサイドワインダーは残り一発。

「ゴジラの足元を狙え！」
正攻法が通用しないなら、せめて足元を穿ち、転倒させることで時間を稼いでやろう・・・！そう考えたのだが、ゴジラも黙っていなかった。
短く吼えると、背後から接近するＦ１４に向き直り、大きく口を開けた。
『うわぁぁぁぁぁぁ!!!』
隊の新入りであるジョンソンが悲鳴を上げた。通りすがりざまに、放射火炎を浴びせ掛けたのだ。
「ジョンソン！」
タガワが叫んだ。右翼を燃え上がらせ、ジョンソン機は海面に落下した。脱出する暇もなかった。
「全機、旋回！距離を取れ!!」
とにかく一度態勢を立て直さなくては・・・タガワは怒鳴った。だが今度は右手に向くと、再び放射火炎が大気に広がった。
『きゃあああああ!!』
ひと呼吸旋回が遅れたクーパーの機体が、放射火炎に包まれた。一気に発火し、炎の筋を描きながら滑走路に激突、爆炎が上がった。
『野郎！ふざけやがって』
真っ先にゴジラを向いたワラスが怒り任せにサイドワインダーを放った。背鰭に命中するも、ゴジラは正面に飛び込んでくるワラス機に怒りの表情を見せる。
『クソ野郎があ！』
ワラスはなおも機銃を撃ち始めた。
『ワラス、退避しろ！』
そうタガワが怒鳴るのと、急旋回したワラス機がゴジラの尾に叩き落とされるのが一緒だった。
怒りに満ちた咆哮をあげ、ゴジラは基地の格納庫を踏み潰し始めた。管制塔が尾のひと振りで叩き壊され、落下した瓦礫が格納庫に降り注ぐ。やがて格納庫から火の手が上がり、少し間を置いて爆発した。格納庫内のＢ５２爆撃機が爆発したのだ。

『くそぉ！』
タケカワが隊列から抜きん出て、ゴジラにサイドワインダーを放った。火の手が上がる倒壊した格納庫を背に、放射火炎で基地の燃料備蓄タンクを焼き払うゴジラに命中する。我慢ならぬとタケカワも機銃を放ちながら、ゴジラに接近していく。
「回避しろ！やめろ！」
タガワが叫ぶと、タケカワは横ではなく真上へ急上昇した。見事ゴジラの火炎直撃を避けたのだ。
だが急激な上昇は機体とパイロットに容赦なく重圧となって襲いかかった。まるで空気に全身を引きずり下ろされるような圧を感じ、タケカワは肺が締め付けられるような感覚になった。
苦しさのあまり、警報がけたたましく鳴り響くのもかまわずボンベを外す。肩で呼吸しても、満足に酸素を取り込むことができない。
「ショーン！ボンベをつけろ命令だ!!」
タケカワ機の様子を察知したタガワが叫ぶ。大きく息をすると、意識が朦朧としてきた。気がつくと、地表に接近する警報が鳴り響く。
どうにか意識を振り絞って操縦桿を握ったとき、正面にゴジラの姿が飛び込んできた。
「ショーン!!」
一瞬だった。ゴジラはまるでハエを叩き落とすように、タケカワ機を右手で薙ぎ払ったのだ。機体が粉砕され、滑走路に散乱する。
放射火炎を吐きながら基地と周囲を焼いたゴジラは、そのままデデドの市街地へ進み出した。幹線道路いっぱいに車両で埋め尽くされ、次々と人が車両から飛び出して逃げ惑っている。
「各機、残存兵力を集中させ少しでもゴジラ侵攻を阻止しろ！ただし！無茶だけは絶対にするな!!」
タガワが半分となった隊に指示した。アパートメント群を踏み潰し、もうもうと破片と埃を巻き上げて進むゴジラに、タガワ隊は最後の攻撃を仕掛けた。
だが健闘空しく、吐き出された放射火炎でサイドワインダーは一掃された。敵意剥き出しに迫り来るＦ１４を睨み上げると、放射火炎を

空に向けた。
「退避、退避！」
充分に距離を取って、機体を傾けたはずだった。ところがゴジラの放射火炎がこれまで以上に伸びた。
一瞬で右手へ回避した2機が爆散し、転じてこちらへ迫ってきた放射火炎がタガワ機の底に火をつけた。金属が焼ける臭いがしたかと思うと、左翼の燃料が発火した。
すかさず射出レバーを引き、機から脱した際、先行していたアークエットの機体が炎に包まれるのが見えた。
パラシュートが開くのと、タガワが地面に激突するのに時間差がなかった。充分な落下高度が保てなかったのだ。激しい衝撃にタガワは眼前が雷を打ったようにまぶしくなり、次いで視界が暗黒に包まれた。
しばらくして、朦朧とする意識を振り払うように頭を振る。道路の真ん中へ落下したようで、乗り捨てられた車両に手をかけ、なんとか立ちあがろうとする。
左足に激痛が走った。どうも足首を骨折したらしく、ひどく疼いている。
道路の先を仰ぎ見た。
やや夕闇が迫りつつある青い空は、一面黒い煙の筋に染め上げられていた。視界の先、タムニン方面から立ち昇っている。パトカーや救急車、あるいは消防車のサイレンが何重にも響き渡っている。
激痛に歯を食いしばりながら、タガワは足を引きずってタムニンを目指し始めた。妻と娘の無事な姿を、ひと目たしかめたいのだ。

ー女を拐うヤツにロクなヤツはいないー

・愛知県　渥美半島上空

「中部国際空港より着陸の許可がおりました。あと２０分で空港滑走路へ進入します」

貨物機のパイロットがアナウンスしたことで、ファンはまどろみから目を覚ました。同行しているゴロツキ連中はしこたま呑んだビールと焼酎の影響で、すっかり眠りこけている。

舌打ちすると、ファンは客人である南国の美女に目をやった。追加で打った薬の影響か、相変わらず首をもたげてぐったりしている。

大きく背伸びをしたが、固い座席のせいで満足にリラックスできない。まあ貨物機なので、旅客機のような快適性は望むべくもあるまい。

だいたい、予定通り進めばとっくに名古屋へ到着しているはずだった。ところが日本の中部地方に大型の台風が接近しているということで、貨物機は途中給油のため着陸したフィリピンの朝進グループ拠点で概ね８時間の足止めを喰らってしまった。

台風は日本の中部地方を北進、日本海へ抜けつつあるという情報を受け、貨物機は現地時間の７時過ぎにフィリピンを離陸。およそ５時間かけてようやく日本上空に達した。

台風による欠航の影響は現在も続いており、着陸待ちをしていた商業便を続々と着陸させる都合上、３回ほど知多半島上空を旋回して着陸待ちを行い、ようやく許可が下りたのだ。

本来なら昨夜のうちに名古屋へ着陸、そのまま隣にある飛鳥村の朝進グループが保有している倉庫へアモを運び込み、サンプルとなる血液を採取し終える頃には朝を迎えているはずだった。

こうなれば致し方あるまい。当初予定していた本国への帰還ルートはもう間に合わないが、ここはスマホの電波もまともに入らない南洋の孤島ではない。海路でも空路でも、韓国へ戻る手段はいくらでもある。そう割り切り、とにかく早いところ仕事を終わらせて、このワ

ケのわからないゴロツキどもと離れたい気分だった。
着陸へ向けて高度を下げているのか、次第に耳が詰まってきた。白い灯台が印象的な、伊良湖岬が視界に飛び込んできた。激しく白波が立っており、波が岸壁にぶつかると白い飛沫となって弾ける様子が、この高度からでも見て取れる。
睡眠を貪っていたが、どうやら台風一過の影響か、灰色の厚い雲が空を一面に覆っている。この気圧の影響で鼓膜を圧迫する圧が強く、唾を飲み込み少しでも耳抜きをしようと努める。
アモも強烈な気圧のためか、顔をしかめ気味だ。ここで目を覚まして暴れ出すことはないか、ファンは通路を挟んだ彼女に視線を送り続けた。高度は建物の輪郭が見えるほどに降下しており、わずかばかり窓から見える先には、中部国際空港の誘導灯が輝いている。
ややあって、白い飛沫を上げながら輸送機は中部国際空港に着陸した。よほど後がつっかえているのか、静止したと思ったら即座に貨物機の誘導路へと回された。飛行中は気がつかなかったが、細霧のような雨が空気を支配している。貨物エリアに誘導されると、すぐさま空港の職員から入国・税関手続きが行われた。人間以外荷物のないファンたちは入国手続きはさして時間はかからなかった。
唯一、意識を失ったままのアモだが、組織が用意した偽造パスポートの精巧さと、飛行機酔いによる体調不良を理由に手続きを押し通すことができた。そこから旅客ターミナルへ進み、あらかじめ待ち合わせの打ち合わせを行なっていた現地の協力者と合流した。
いずれも金田と木村と名乗り、口数少なくファンたち一行を駐車場のハイエースへ案内した。ファロ島より同行しているゴロツキどもは手配していた別のレンタカーに乗り込み、都合2台で飛鳥村の倉庫を目指すことになった。雨は止んだが、台風通過後の生暖かい風が強く、高速道路から見える伊勢湾は波がずいぶんと高い。
金田も木村も、くっついてきたゴロツキとは異なり、饒舌さは鳴りを潜めて必要以上にしゃべることはしない。てっきり組暴の連中が手配されているのかと考えていたが、どうも日本の反社会的勢力を構成する者たちのようだ。

そういえば、とファンは記憶を掘り起こした。日本の反社会的勢力は、朝進グループや組暴と強い結びつきがある、とかつて軍の同僚から聞いたことがある。おそらく彼らもそのツテを辿ってきたのだろう。

ハイエースは空港道路をひた進み、東海ジャンクションまであと7キロの表示が見えた。ここから伊勢湾岸道へ出れば、目的地までそれほど時間かからず到着できる。

助手席の金田が車載テレビをつけた。ファン自身は日本語を話すことはできるが、読み書きはできない。それでも、テレビ画面は何やら物々しく深刻そうな雰囲気を映し出していた。

『それでは重沢先生、グアムを壊滅させたゴジラは日本を目指す公算がお強い、とお考えなんですか?』

前のめりになっている司会者が、スーツを着た聡明そうな男性に訊いていた。

『はい。というより、戻ってくる、と申し上げた方がよろしいかもしれません。動物には、帰巣本能というものがあります。この本能に従うと、ゴジラはまず間違いなく、この日本を目指してやってくると考えるべきでしょう』

『いやあね、重沢さん。あなたの発言で日本は大きな混乱が起きてしまいますでしょ。それは本当に、確信があってのことなんですか?』

メガネをかけた、気難しそうな壮年の男性がスーツの男に訊いている。

『はい。ゴジラは過去3度とも、出現後この日本を目指してやってきました。今回も、グアムを襲撃後太平洋を北上するところまで確認されております。米軍の懸命な探索にも関わらず途中で見失ったそうですが、状況的にも日本を目指していることは明白と考えております』

『状況証拠でしかないじゃないですか。困りますなあ、もしこれでゴジラが日本に上陸しなかったら、あなたはどう責任を取るおつもりですかな?』

『如何ようにも。むしろ、私が「ゴジラは日本に来ません」とでも宣言

した方が、みなさん慌てずに済むかもしれませんが、それでゴジラが日本に上陸した場合こそ、考え得るもっとも最悪なケースでしょう。私は有事危機管理の専門家ではありませんが、最悪を想定した備えはいまから用意しておくべきだと考えてます』

『詭弁ですなあ』

苦笑いをするメガネの男だが、司会者と傍の女性は深刻な表情だ。そこへ何かの紙を持ってきたスタッフが映り込むと同時に、テレビ画面にテロップが入った。

『え、ここでニュースが入った模様です』

『報道フロアよりお伝えします。安住さーん？』

『はい、報道フロアです。ただいま臨時ニュースが入りました。さきほど中部地方の台風による高波を警戒していた海上保安庁からの情報によりますと、渥美半島沖合に巨大な生物と思われる正体不明の物体を確認したとのことです。えー、渥美半島の沖合に、巨大生物と思われる物体が確認されたとのことです。この発表を受け、徳間官房長官より、海上自衛隊に対し海上警備行動を発令すべく緊急の閣議が招集。また官邸危機管理センターに官邸対策室が設置されたとのことです。またこの物体が、果たしてグアムを蹂躙し行方不明となっているゴジラなのか・・・・・』

ふいに、金田がテレビのボリュームをしぼった。

「おい、どうしたんだ？」

「間もなく料金所だ。この女が目を覚ましてはまずい。刺激を最小限にする」

金田が答えた。たしかに、先にゲートが見える。ゲートを潜るべく、ハイエースは原則した。

「チッ！」

運転席の木村が舌打ちをした。

「ＥＴＣゲートが閉鎖されている。こんなときに」

ハイエースは有人の窓口へ進路を切った。折からの悪天候とゲート縮小により、車が列をなしている。

やがてハイエースが料金を支払う番になった。木村は窓を開け、Ｅ

ＴＣカードを係員に差し出す。早いところ進ませてくれ、そうため息をつきながら、隣の席のアモと目が合った。目が合った、のだ・・・。
アモの拳より早く、ファンはアモの首に手を回した。声を上げられないようにするためだ。ところがアモは渾身の力でジタバタと暴れ出した。
ハイエースはフルスモークで車内は見えないようになっているが、異変を感じたのだろう。料金所の係員が怪訝な目を向けてきた。
「なんでもない、なんでもないから！」
木村が慌てて言うが、それだけでは係員の疑念は払えないようだ。
「大丈夫ですか？なんだか車、揺れてますがね」
「サスペンションの故障だ。ほら、早く」
首を傾げながらも、係員はカードを返してよこした。アモを必死で抑えながら、ファンは気が気でなかった。料金所にパトカーが止まっており、警官が２人、乗り込んだところだったのだ。
ジタバタするアモをがっしり抑えながら、どうにか注射器をつかむと、やや乱暴にアモの腕に刺した。薬の効果は早く、２分も経たずアモはおとなしくなった。
「世話を焼かせやがる」
思わず母国語でつぶやいた。こんなジャジャ馬娘、さっさと血液サンプルだけ採って、海にでも投げ込んでやろう。
車は名港中央大橋に差し掛かった。そこへ、さきほどのパトカーがハイウェイパトロールを伴ってサイレンを鳴らしやってきた。
「まさか、バレたのか？」
ファンは拳を固くした。だがパトカーもハイウェイパトロールも、ハイエースを追い抜いて走り去ってしまった。
「事故かな？」
木村がつぶやいた。その頃には湾外方面からヘリコプターも飛んできた。
「海上保安庁？なにか言ってるぞ？」
金田がパワーウインドウを下げて窓を開けたときだった。海面が盛り上がりながら、こちらに近づいてくる。それは橋の支柱部分で大

きく爆ぜた。
ファンたちの目の前に、大きく開いた口、そして歯が現れた。一拍の間を置いて、車が揺れるほどの大音量。動物の咆哮だった。そして、明らかに怒りを帯びている。
橋の支柱を、毛むくじゃらの手が握った。橋が大きく揺れて、ハイエースは急ブレーキをかける。
「・・・キングコング!」
ファンはかすれた声で、目の前に現れた存在の名を口にした。
「バカな・・・機雷が通じなかったのか?」
ガクン、とハイエースが揺れた。大きな足が、橋に踏み込んできたのだ。そして、ハイエースをギラリと睨みつける、茶色い瞳。なぜここにキングコングが現れ、何をしようとしているのか・・・答えは決まっていた。
「出せ!車を出せ!」
声を振り絞る勢いで、ファンは怒鳴った。ハイエースは弾かれるように発進した。橋上で急停車した車と、車を捨てて逃れようとする人々をかわし、一気にスピードを上げる。だがキングコングは次の支柱に飛び移った。橋が上下左右に大きく揺れ、ハンドルが持っていかれる勢いだ。
走り抜けるハイエースに、キングコングが手を伸ばす。間一髪逃れたが、後ろを走るゴロツキたちのレンタカーがキングコングの手中に収まった。中を覗くが、目当ての対象がいないと悟ると、キングコングは悲鳴をあげるゴロツキたちごと、レンタカーを海面に放り捨てた。
橋をぬけて時速１４０キロで爆走するハイエースだが、なんとキングコングは追ってきた。埋立地の倉庫やその先のレゴランド・ジャパンを走り抜け、大きく吼えながらハイエースを逃すまいと迫ってくる。
必死に走っていたが、西大橋を抜けて名古屋競馬場に差し掛かった辺りで急ブレーキを踏んだ。混乱のあまり衝突事故が相次ぎ、道路を塞ぐように立ち往生していたのだ。

「車と女を捨てよう!」
こうなれば致し方ない。ファンはそう言ってスライドドアを開け、薬で眠るアモを引きずり出した。木村と金田も車を出ようとしたが、すんでのところでキングコングに車ごと持ち上げられた。
そこでファンと目が合った。アモを下ろしていたことを悟ると、木村と金田が乗ったハイエースを苛立ち気味に地面へ叩きつけ、ファンへ向かって怒りの雄叫びをあげた。
ファンはアモを地面に放ると、一目散に駆け出した。だがキングコングはそんなファンを赦すことはしなかった。左手でファンをつまみ上げると、怒声を浴びせるように吼えた後、勢いよく海面へ投げ捨てたのだ。
仇敵を葬ったキングコングは、ゆっくりと倒れているアモに寄った。右手でアモを優しく握ったが、反応がない。再会と困惑に大きく吼えたキングコングは、アモを握ったまま海を渡り、その先にあるナガシマスパーランドに腰を落ち着けた。

ー空軍出身者が多い航空会社は、悪天候に強いー

・兵庫県伊丹市　陸上自衛隊伊丹駐屯地　中部方面総監部

黒塗りのプレミオが駐屯地前に停車すると、ゲートが開き、守衛が敬礼で出迎えた。礼服姿の陸上自衛隊中部方面総監、只山正仁は軽く咳払いをして、待ち構えている困難な事態に備えて心の準備を整えんとした。

昨夜半から中部地方に上陸した台風１２号は、９４０ヘクトパスカルという勢力の割に大雨や強風の被害は少なく、中部山岳地帯に差し掛かる頃にはぐっと勢力を弱め、日本海に達するころには温帯低気圧へ変わるような勢いとなっていた。

だが台風が連れてきた低気圧はいまだ東海・中部地方の海域を波立たせ、今後雲の流れによっては線状降水帯となって深刻な豪雨を静岡県から愛知県にかけてもたらしかねない様相であった。

只山が総監を勤める陸自中部方面隊は中四国から静岡県を除く東海地方までの、極めて広範囲を管轄している。今回は台風上陸に際し、一昨日の晩から総監部に詰めていたのだが、心配性で神経質な愛知県知事に呼集されて昨日から名古屋にある守山駐屯地へ出向。来るべき危機に備えていたのだが、幸か不幸か、それは杞憂に終わった。台風による被害がないとは言えないが、自衛隊を災害派遣するレベルのものではなかったのだ。

よって駐屯地で駐屯地司令と朝食がてら会談と雑談を済ませ、午前１０時過ぎに駐屯地を出発。名神高速の京都南ＩＣを通過したあたりだった。

台風による高波を警戒していた海上保安庁から、「伊勢湾内に、巨大生物と思われる国籍不明の物体を確認。名古屋方面へ向かって高速で移動中」との報告が入った。先般のゴジラによるグアム襲撃を受け、海上自衛隊も太平洋の警戒を強化していたのだが、遠州灘は台風の影響が思いのほか大きく、結果的に伊勢湾内を警戒していた海上保

安庁に発見を先取りされてしまったことは自衛隊として忸怩たるものを感じた。
　それから数分のうちに、今度は名古屋港にキングコング上陸との報告を受けた。内閣の安全保障会議はそのまま対怪獣を目的とした防衛出動の閣議に移り、全会一致で「キングコング掃討すべし」という閣議がまとまった。只山が乗った車両が中国池田ＩＣを降りるころには、中部方面総監を指揮官とするキングコング掃討作戦を実施するとの報せが入った。
　プレミオは正面玄関に乗り入れると、指揮官である只山を伊丹駐屯地司令であり、中部方面隊Ｎｏ．２である陸上幕僚長の仁村陸将補が出迎えた。短く敬礼すると、まるでダルマのように濃い顔をしかめて一礼する。
「お疲れ様でした。早速ですが、手筈は整えてあります」
　足早に歩きながら、仁村は只山に付き添い総監部会議室へ案内する。只山は軽く頷くと、制帽を脱ぎ、再び軽く咳払いした。
　会議室へ入ると、駐屯地と総監部の重鎮がみな顔を揃えてした。只山が入室すると、全員が起立して敬礼する。恭しく只山も敬礼し返すと、全員を着席させた。興奮と焦燥が喉に絡まり、只山はまたも咳払いをすることにした。
「報告は受けているが、いま一度、現状を報告してほしい」
　自身も着席すると、全員を見渡しながら只山は言った。
「はっ。１３時２０分、名古屋港より姿を現したキングコングは、伊勢湾岸自動車道に沿って岐阜県長島まで移動。１３時５０分現在、岐阜県のナガシマスパーランドにて、行動を停止しております」
　仁村陸将補が答えた。
「キングコングの出現はいささか突然の出来事ではありましたが、中部地方では折からの台風上陸により、図らずも住民に警戒意識があったこと、及び台風一過の天候不順により、ナガシマスパーランド利用者が常時に比べて少なく、キングコング出現による混乱もほぼ見られず避難ができた点は不幸中の幸いと言えます。ただキングコングの侵攻により、伊勢湾岸道を走行していた車両を中心に少なくない被害

が出ていることも、また事実です」
　副幕僚長である吉川が答えた。
「周辺部隊の展開具合はどうか？」
　軽く頷くと、全員を見渡して只山は訊いた。
「今津の機甲科部隊が準備を整えております。ただ、琵琶湖西側から長島までは2時間強を移動に要します。その上、キングコング出現による自主避難による影響で、名神並びに新名神、名阪国道いずれも上下線ともに深刻な渋滞が生じております。周辺にある普通科の装備では、歯が立たないのは明白です」
　吉川が答えると、示し合わせたかのように仁村が口を開く。
「よって本作戦に関しては、明野駐屯地の第五対戦車ヘリコプター隊による攻撃が即応性を考慮した場合、もっとも適当と考えております」
　只山自身、同様の考えだった。
「明野の状況は？」
「ＡＨ－１Ｓ、出動態勢を完了しております」
　只山は軽く頷いた。６０年前のゴジラとキングコング日本上陸以降、陸海空3自衛隊共に命令あればすぐに出動ができるよう、準備を整える仕組みがある。
「今回、キングコング上陸が都市部ということで、ＡＨ－１Ｓ３機小隊による機関砲、及びロケットポッドを中心とする攻撃が有効と考えられます。キングコングは敏捷性があると思われますが、１機を先回りさせて前方より牽制しつつ、後方からの2機追撃ではさみ撃ちを敢行。キングコングへ確実に砲弾を撃ち込んでいく算段です」
「ゴジラならともかく、キングコングは現有兵器による攻撃は効果があると見込まれております。まずはあの巨体による移動を阻止すべく、キングコングの両脚部を集中して砲撃。これにより、キングコングの無力化を狙います」
　いずれも、今後ゴジラまたはキングコングが出現した場合に備え、自衛隊内でさんざんシミュレーションと検討を重ねた結果編み出された作戦だ。特にゴジラと異なり、キングコングは現有兵器での対処

がある程度可能と考えられている。素案を出したのはずいぶん前の陸幕幹部だが、自身の手で実行に移す重みを感じつつ、妙な話だが名誉すら只山は感じていた。
　それは仁村と吉川の腹心２名にもしっかり伝播していた。２名とも、只山が対怪獣戦闘、とりわけ対ゴジラ作戦を想定した検討会において、相当有効と思われる作戦を提案したにも関わらず、有用性と作戦展開の簡易さで他の陸将が打ち出した案に軍配が上がり、煮湯を飲んだ経緯をよく知っている。
　只山の並々ならぬ気合いは、だからこそであった。
「よし。明野の第五対戦車ヘリコプター隊に出動を命じる。なんとしても長島でキングコングを足止めし、排除せよ」
　只山の言葉で、全員が頷いた。吉川はただちに、副官へ明野駐屯地へ連絡するよう短く指示した。
　ややあって、明野駐屯地からの返答を吉川は読み上げた。
「第五対戦車ヘリコプター隊３機小隊、明野駐屯地を１４時１０分に離陸。２０分後の１４時３０分、キングコングと会敵予定」
「よし。会敵次第、攻撃を許可する」
　吉川は只山の言葉を、そっくり明野駐屯地へ報じた。
「事後の作戦展開に関してですが」
　防衛省からのファクシミリを受け取った仁村が口を開いた。
「今津の機甲科部隊を、愛知に向かわせる。作戦の推移を問わずだ」
　只山は卓上の地図で、滋賀県近江今津を指差した。無論、機甲科部隊の移動が徒労に終わる結果こそもっとも望ましいが、作戦展開が予定通り進むとは考えられない。
「空自の百里基地にも状況を問い合わせろ。場合によっては第３飛行隊のＦ２による空爆作戦実施も想定内とする」
　只山の言葉に、仁村以下総監部の幕僚一同固唾を呑んだ。キングコングの現在位置は三重県桑名市長島。れっきとした人口密集地であり、人々は退避したとはいえ、ナガシマスパーランドは中部地方屈指の娯楽施設だ。精密誘導弾を使用するにしても、周辺への二次被害は避けられそうにない。また、現在は桑名市を中心とした半径１５キロ

の地域には避難勧告が発令されているのみで、建前上は屋内退避を呼びかけている状況なのだ。
「空自百里基地とも折衝が必要ですが、必要以上の武器使用については慎重に考慮すべき状態かと考えますが・・・」
仁村は小声で只山に言った。
「無論、その際には現地と避難状況など折り合わせは実施する。ただし、あくまで主目的はキングコングの掃討だということを念頭に置いて行動すべきだ」
おそらくそのような返事であろうことは、仁村以下総監部幕僚一同感じていた。

一方その頃、中部国際空港国際線到着ロビーでは・・・

「みなさん！」
女性にしてはハスキーな二宮の声が、到着ロビーに木霊した。一連の混乱と喧騒にも負けないほどの声だった。
長い空の旅の疲れも微睡も、二宮の声で一気に消し飛んだ。宏樹は表情が引き締まるのを感じた。
「ヒロキンさん、神鍋さんに飯島さんも、よくぞご無事で！」
二宮とともに待ち構えていた太田も駆け寄ってきた。
「いやあ！太田さんに二宮さん！心配かけてすみません！」
真っ先に反応したのは神鍋だった。
「遅くなってもうしわけありません。台風一過の影響か、だいふ伊勢湾上空を旋回してしまって」
飯島が太田に握られた手を握り返し、言った。
宏樹たちが乗ったチャイナエアラインは台湾桃園空港に定刻通り到着。３時間ほどの乗り継ぎ時間を経て正午前には中部国際空港に着陸できるはずだった。
だが台風１２号が過ぎ去った後の愛知県上空は、しばしの間旅客機

を含む航空機の進入を拒み続けるように強風が吹き荒れていた。気象条件が安定しない中、格安航空会社を中心に中部国際空港への着陸を断念し、出発空港へ引き返していく便も少なくなかった。
「さすがはチャイナエアライン。台湾空軍出身者で構成されたパイロットはこの程度の天候なら着陸するはずだ」
不安を煽るようなアナウンスの中、ひとり飯島は自信に満ちた顔で語っていた。
だが宏樹たちは実に幸運だった。着陸と同時くらいに、キングコングが伊勢湾に出現したのだ。これにより中部国際空港は滑走路の閉鎖を決定。着陸前のアプローチに入った便を除いて、すべての便が引き返し、または東京羽田空港か関西国際空港へ向けて中部の空を追われてしまったのだ。
宏樹たちに続いてやってきた屈強な白人と、汗だくで腹の出た韓国人、そしてどこかトボけたような浅黒い肌の男に面くらいつつも、太田と二宮は宏樹たちの荷物をいくつか持ち、手配していたジャンボタクシーへ向かった。
これまでの経緯は、飯島が機内からのメールと台北での乗り継ぎ時間を利用した電話で太田と二宮に説明していた。行きがかり上、マックスとチェ支社長、そしてコンノ三世が同行していることも伝えていたのだが、側から見てもなんとも風変わりな一行だった。
「それで、キングコングはどうなったんですか?」
歩きながら、宏樹は訊いた。
「伊勢湾岸道でひと暴れした後、いまはナガシマスパーランドで動きを止めてるようです。しかしその、ファロ島の巫女でしたっけ?本当に日本にいて、キングコングは彼女を探してここまでやってきたっていうんですか?あ、いえ、お話を信じていないワケじゃありませんよ・・・」
太田は答えながら、逆に訊いてきた。
「あまり大きな声じゃ言えませんが、ファロ島で強硬な手を使って聞き出した内容では、彼女は間違いなく名古屋港に向かったというんです。所在こそつかめていませんが、キングコングがワケもなく名古屋

を目指したとは考えられません」
冷静な飯島が答えたことで、多少は信憑性があったのだろう。疑問が晴れたわけではないが、太田はやや間をあけて頷いた。
「そしていま、活動を停止しているそうですね。アモを探しているのなら、もっと活発に動き回って良いはずだ。これは何を意味しているのか・・・」
待ち構えていたジャンボタクシーに荷物をつみながら、飯島はひとりつぶやいた。
「あの運転手さんから、伊勢湾岸道が東海ジャンクションより先通行止めになってるって・・・」
先に行っていた二宮が言った。
「じゃあ、一般道で行くしかねぇろ」
神鍋が言うと、「いや」とすかさず飯島が口をはさんだ。
「高速道路が通行止めなら、一般道もかなり混雑してるはずだ。第一、避難勧告が出されてる上にあんなでっかいゴリラがこれからどこへ歩き出すかわからないんだ。少しでも遠くへ逃れようとするだろ、普通」
言いながら、飯島は交通アプリを起動させる。
「思った通り、ひどい渋滞だ。ヒロキン、さっき話したように、行けるところまでは行くか?」
飯島が訊くと、しばらくして宏樹は大きく首を縦に振った。
「とにかく、アモを見つけよう」
その言葉に、神鍋も飯島も、そしてマックスとコンノ三世も頷き返した。

―それにしてもキングコングって、ヘリコプターとよく戦うなあ―

・三重県桑名市　霧雨がしとしと降りしきる、ナガシマスパーランド

東海地方随一の娯楽施設、ナガシマスパーランド。

平日と折からの台風一過で、通常より入場客は少なく、アトラクションによっては降雨と強風を理由に運転を休止している施設もあった。

それでも、早朝のうちに台風が通過したその日に来園していた人は決して少なくなかった。伊勢湾岸道をはさんで、あわせて1万台駐車可能としている広大な駐車場の半数は自家用車で埋め尽くされており、ＪＲ名古屋駅と桑名駅から運行されているシャトルバスも、営業開始時間からなかなかの人手になっていた。

キングコングはそんな中、長島観光本社屋わきの空き地となっている土地に鎮座していた。尻を地面につけてあぐらをかき、手のひらに横たわっているアモを、指で優しく撫でている。アモは目を醒ます気配がなく、途方に暮れたようにキングコングは低く唸り声を上げるばかりだった。

訪れていた観光客にとっては幸いだった。キングコングが園内に鎮座して1時間になるが、それ以上動き回ることがなく、園内からの避難は比較的早いうちに済ませることができた。駐車場の車両はほぼ避難を終えており、シャトルバスで来園していた人々も、園が出したシャトルバスで園外へ脱出することができていた。とはいえキングコング出現から伊勢湾岸道は通行止めとなっており、ＪＲも名鉄も運行を停止しているため、そこから先の避難には及んでいなかった。

最寄りの桑名警察署から数台のパトカーが出動し、ナガシマスパーランド近辺の主要道路封鎖とキングコング警戒に当たっているのだ

が、警備に当たっている雨合羽姿の警察官たちも、自分たちではどうすることもできないことは百も承知している。早いところ自衛隊に来てもらい、キングコングの掃討を実施するまで、しばらくは恐怖を押し殺してしかめっ面を保つ他なかった。

キングコングはアモが濡れないように、手で覆った。アモを案じ、不安そうに俯く。だがキングコングは、ふいに顔を上げて南西の空を見遣った。厚い灰色の雲に覆われた空の向こうから、かすかに音がするのだ。それは６０年前、自分がやはりこの大地にやってきたとき、自分の頭上をけたたましく飛び回っていたものと同じだった。

アモを気遣う表情は、一瞬にして歯ぎしりを剥き出しにする険しい表情となった。うっとうしいものの歯向かってこなかった６０年前とは異なり、間違いなく、自分に害を為すべく迫ってきている・・・動物的本能で、それを察知した。

アモを右手で優しく、しかししっかりと握った。キングコングは立ち上げると、迫りくる殺気に対抗するように大きく吼えた。霧雨を吹き飛ばすほどの勢いだった。

「長島上空現着、ヒトヨン・サンロク。目標を現認。攻撃準備態勢を維持しつつ待機する。オクレ！」

陸上自衛隊明野駐屯地を拠点とする第五対戦車ヘリコプター隊で、今回の攻撃小隊長を任じられた渡邉三尉は駐屯地司令部にそう報告すると、操縦桿を上向きにして高度を上げた。後続の二機も渡邉に倣い、およそキングコングの拳が届かないであろう海面２００メートル上空まで上昇、その高度を維持したまま待機することとした。

『攻撃小隊、攻撃の編隊を組んで待機せよ。オクレ』

「攻撃小隊、了解。オワリ！」

短く返答すると、渡邉は僚機に対し呼びかけた。

「打ち合わせ通りだ。オレがキングコングの前面に回り込む。二人とも後方からはさみ撃ちの状態を作れ」

『了解。高度は維持したままか？』

渡邉から見て右手後方に位置している丹生３尉が訊いてきた。
「全機、高度は維持せよ。対面からはさみ撃ちにしつつ、総監部より攻撃命令が下され次第、発砲する」
『攻撃目標は、標的脚部で間違いないな？』
渡邉が答えると、今度は左手後方の金村３尉が訊いてきた。
「作戦に変更なし。よろしく頼むぞ」
心配性の同僚にそう答えると、渡邉はヘリを前進させ、長島から木曽川河口付近でヘリを転身。キングコングと相対する形になった。
キングコングはだいぶ興奮しているようで、渡邉を睨みつけたまま顔を前のめりにさせて鼻息を荒くしている。
渡邉は無言で、ヘリ前方下部に設置されている２０ミリ機関銃の照準をキングコングの足元に定めた。
陸上自衛隊が保有する対戦車ヘリコプターは現在２種類あるが、渡邉たちが所属する第五対戦車ヘリコプター隊には主力ともいえるＡＨ－１Ｓ、通称コブラが配備されている。同期である丹生、金村と共に明野駐屯地の対戦車ヘリコプターパイロットに選抜されて以来、このコブラを駆って実戦を意識した訓練を重ねてきた。
とりわけ渡邉は、対戦車戦闘や陸上部隊支援以上に、ヘリコプターによる対怪獣戦闘に強く力を入れてきた。世界大戦中ならいざ知らず、現代の日本においては敵国の陸上部隊が日本本土に上陸し、戦車を乗り回して国土を蹂躙するなどあまり現実的ではない。
その点、ゴジラやキングコングといったかつて日本を襲った怪獣は、ずっとなりを顰めていたとはいえいつ何時、また日本にやってくるかわかったものではない。少なくともロシアや中国の軍が揚陸艦に戦車をたっぷり詰め込んで日本に上陸するより、よほど現実性がある。
陸海空、全自衛隊の装備が乏しかった６０年前と異なり、今は多彩な装備を豊富に揃えている。火力も６０年前とは比較にならない。
とはいえ・・・数時間前に、米領グアムをゴジラが襲撃した件は非常に気にかかっていた。米軍はグアムに精鋭部隊を置いているが、その攻撃もゴジラにはまったく通用しなかったばかりか、事前の探知す

ら困難だったというではないか。怪獣上陸を想定してきた訓練が、ゴジラ相手にはどこまで通用するか・・・そう不安を抱いていた矢先、キングコング伊勢湾に出現の報せが入った。

果たしてゴジラは日本にやってくるかは未知数だが、ゴジラと違ってキングコングなら、自分たちの装備でも太刀打ちできるはずだ・・・確信はないが、自信はあった。

入隊以来の同期２人と、たまたま飛行当番だったことも幸いだった。互いに気心が知れているし、水も甘いも知り尽くしている連中だ。３機合わせての対怪獣シミュレーションも、幾度か重ねている。

『明野ＨＱより対戦車ヘリコプター小隊へ。中部総監より攻撃の許可が発令。攻撃を許可する。必ず対象を掃討せよ。オクレ』

渡邉をはじめとした３人は一気に緊張感を高めた。

「対戦車ヘリ小隊、了解。必ず対象を掃討する。オワリ」

それだけ答えると、渡邉は機を少し前進させた。

「各機、攻撃を開始する。射撃用意！」

３人ともゴクリと唾を呑み込み、ヘリの期首下部に付いている２０ミリ機関銃のトリガーに指をかけた。シミュレーション、あるいは模擬弾の使用こそ多かったが、当然実弾射撃はこれが初めてだ。対怪獣戦闘とはいえ、不用意な武器使用は自衛隊法に抵触してしまう恐れがある。

そのときだった。キングコングは大きく吼えると、まるでこちらの殺気を確信したように走り出した。丹生、金村機の真下を走り抜けると、巨体に似つかわしくない軽々しい跳躍でスパーランドが誇るコースター「白鯨」の中に飛び込んだ。「白鯨」はもっとも高い地点で地上５０メートル。それよりほんの少し低いキングコングは、蜘蛛の巣のごとく白く映える支柱の中に身を隠すようにしゃがみ込んだ。

急な動きに動揺こそしたが、渡邉は気を取り直してキングコングの後を追った。丹生、金村機は転身するだけで、キングコングに肉薄した。

「厄介なところに逃げ込みやがった」

渡邉はそうボヤくと、高度を３００メートルまで上げて前傾姿勢で

のホバリングを行った。この角度ならうまいことキングコングを狙いつつ、幾何学的に組み上げられた白い鉄柱に傷をつけることもなさそうだ。
「ヤツめ、みずから檻に入るようなマネを」
キングコングに照準を定めつつ、渡邉はぼやいた。
「オレはここから射撃する。丹生は西側後方、金村は西側前方から射角調整の後、攻撃を開始」
『了解』
ジェットコースター「白鯨」は西側が比較的高度が低く、コースターの高架越しにキングコングの背中が丸見えだ。足元を狙うことは困難だが、背中へ機関銃の弾丸を叩き込んでやることはできる。
『なんだか・・・何かを守ってるような感じだな・・・』
インカム越しに、金村の声が飛び込んできた。
「よくわからんが、おかげで背中丸出しだ。いくぞ」
金村は悪く言えば臆病、良く言えば気が付く性格だ。そんな僚機のつぶやきが気になりつつも、渡邉は正確に照準を合わせた。
だがそれを察知したかのように、キングコングは牙を剥き出しにして吼えてきた。歯ぎしりしながら立ち上がり、怒りに満ちた両目がコクピットからでもわかるほどだった。
「丹生、金村。後退しろ」
僚機は素直に従った。渡邉自身も感じていた。キングコングの、恐ろしいまでの怒りと殺気を。
「ヤツの手が届かないところから、攻撃を試みた方がよい。高度を４００メートルまで上昇させる」
言いながら、渡邉はヘリを上昇させた。コクピットには細かい水滴が絶え間なく降り注いでいるが、ありがたいことに風は弱まりつつあった。明野から飛来するときは、時折機が大きく揺れるほどの風が吹きつけてきた。
突然、短く吼えるとキングコングは「白鯨」の中から飛び出した。勢いあまってその先の大観覧車「オーロラ」に背中から激突するも、意に介せずそこから南側の駐車場へ逃れ、ホテル花水木正面に達したと

ころで身を屈めた。
「野郎」
幸い大観覧車は倒壊することはなかった。渡邉は機を転身させたが、キングコングの興奮は尋常ではない。
『いま撃てば、ホテルへの被害は避けられそうにない。どうする?』
丹生が問い合わせてきた。渡邉の答えは決まっていた。
「ここで仕留めなければ、爾後の被害は予想がつかない。ヤツはホテルを背にしてる。3機で囲み攻撃だ」
渡邉は迷うことなう前へ出た。丹生と金村もそれに続く。しゃがみこんでいるキングコングに銃口を向ける。まるで自身の手が届かない場所にいる自分たちへ激しい怒りを向けるように、キングコングは歯ぎしりしている。
「射撃開始」
渡邉の宣言で、3機すべての20ミリ機関銃が火を噴いた。4連身の銃身が高速で回転しながら弾丸を吐き出し、一直線にキングコングへ向かう。
最初の数発こそキングコングの左脚に命中したが、怒声を上げてキングコングは飛び上がった。残りの弾丸はホテルの外壁を粉砕し、建物を貫通して伊勢湾へ吸い込まれた。
着地したキングコングは、二足歩行で走り出した。三井アウトレットパークを踏み荒らし、伊勢湾岸道を飛び越えると、駐車場に残された自動車を拾い上げ、渡邉たちに向けて投げつけてきた。
「回避!・回避!・」
慌てて渡邉は怒鳴る。3機はそれぞれに旋回し、危ういところで飛んできた自動車をかわした。なおも数台を投げつけてくるキングコング。ホテルや長島温泉大浴場に落下した自動車は粉々に潰され、ガソリンに引火して激しく発火したものもあった。
「くそう、追うぞ!」
3機はフォーメーションを組み、一直線に大駐車場で暴れ回るキングコングへ向かう。3機同時に機関銃を発射する。アスファルトが直線状にめくれあがり、その先のキングコング左脚に命中した。絶叫

すると、再び背を向けて走り出した。
「まずい、川を渡るぞ！」
湾岸長島インターチェンジを蹴り壊し、木曽川に差し掛かる前に渡邉はキングコング前面に機を滑り込ませた。後方から丹生と金村が攻撃ポジションへ機を持っていく。当初のフォーメーションだった。
間髪入れず、渡邉は機関銃の引き金を引いた。それは丹生と金村も同じだった。キングコングの下腹部と臀部に２０ミリ機関弾が絶え間なく突き刺さる。怒りの咆哮を上げ、キングコングは渡邉に突進してきた。慌てて射撃を中止し、機を上昇させる。キングコングは右手を突き出して飛び上がった。ヘリをつかむことはできないが、何度も飛び上がって渡邉機をつかみかからんとしてくる。
丹生と金村が援護射撃をしたが、激しく動くキングコングに照準が定まらず、木曽川に激しく飛沫を上げる程度にとどまった。
再び吼えたキングコングは、木曽川を越えて県境をまたぎ、愛知県へ侵入した。対戦車ヘリ小隊も後を追うが、予想以上にキングコングの移動速度が素早い。
「丹生、速度を上げて先回りだ！庄内川河口でヤツを食い止める！金村は後ろからそのまま追い立てるんだ」
『了解！』
急ぎ、渡邉は出力を上げてキングコングの頭上を通り越した。それに丹生も続く。飛島村はキングコング出現時から全域に避難指示が出され、また比較的農地が多いこともあって、キングコングの移動に伴い多少の建造物倒壊といった被害はあるものの、この状態でこの先に位置している名古屋市へ侵攻させるわけにはいかない。
名古屋市にはキングコング出現時より避難勧告と屋内退避が発令されているが、人口２３０万人を誇る中部地方の中心都市にこんな巨大な動物が侵入した場合、被害は計り知れない。
渡邉機と丹生機は名古屋市側の陸地上空に陣取り、方向を転換させてホバリング状態になった。ちょうど名古屋都市高速第二環状線を叩き壊したキングコングが、日光川と庄内川が合流する河口にまで進んできた。そこで自分を待ち構えている渡邉と丹生の機を見て、進行

を止めて歯ぎしりをする。
「丹生、金村。ここは確実に仕留めよう」
『ロケット弾ポッドを使用するのか？』
「ああ。３機同時に、ヤツへ叩き込んでやろう。これ以上の侵攻を許すわけにはいかない」
『『了解！』』
３人はほぼ同時に、機体両部に備え付けられているロケット弾ポッドのスイッチを入れた。無誘導ながら対戦車用炸薬弾を連発で放たれる火力は、強固な装甲に囲われた戦車をも破壊する威力を持つ。これを一斉に叩き込むことで、キングコングの動きを封じる考えだった。事実、キングコングは機関銃を叩き込まれたところから出血している。ならばより高威力の火器であれば、充分効果を見込めるだろう。
はさみ撃ちになっている状況を察し、キングコングは前後を振り返りつつ、左手を右手で覆った。しばしキョロキョロした後、気合い一閃、大きく吼えた。
「発射！」
キングコングが吼えるのと、渡邉の号令はほぼ同時だった。勢いよく踏み込んだキングコングは、３歩目で大きく川底を蹴り上げた。パルクールのような動きで、頭を視点に身を大きく回転させ、渡邉機と丹生機を飛び越えてしまった。放たれた数発のロケット弾はすべて河口に突き刺さり、水飛沫と川底を大きく跳ね上げて破裂した。
「くそっ！なんて身の軽いヤツ！」
慌てて機を反転させた頃には、キングコングは対岸の稲永公園野球場へ上陸し、そのまま東へ走っていた。
「とにかく追うぞ！」
こうなれば、改めて攻撃が可能な地点に達するまで、ひたすら追跡する他ない。だがここから先は住宅やビルが並ぶ人口密集地だ。そのうえ、自主的に避難をしている市民も多いとはいえあくまで名古屋市には避難勧告しか出されていない。ＪＲや近鉄、名鉄といった鉄道各線も全線が運行を緊急停止している。あちこち道路いっぱいに詰

まった車両群から、慌てて飛び出す人々がここからでも確認できた。
だが疾走していたキングコングは動きを止めた。名古屋臨海高速鉄道あおなみ線の高架橋が、その行く手を阻んだのだ。そのまま突進すれば難なく突破できそうなものだが、稲永駅に緊急停車していた6両編成のあおなみ線車両をわしづかみにした。
連結一両目部分が千切れると、追ってくるヘリ小隊に力いっぱい投げつけたのだ。
「回避!」
言わずとも、3機は慌てて操縦桿を倒した。だが散開してもキングコングは怒りを剥き出しに、残りの車両をつかんでは投げつけてくる。
「上昇!上昇だ!!」
すんでのところで飛んできた列車を避けた渡邉は、インカムに怒鳴った。紙一重で逃れた丹生機が一気に高度を稼いでいく。金村機は機体を横倒しにして逃れていく。
ひとまず追手が逃れたのをたしかめると、咆哮を上げてあおなみ線稲永駅を突き崩して再び侵攻を始めた。堀川まで歩みを進めたキングコングは、川の上流を仰ぎ見た。鉛色の空の元、その先にいくつか見える高層建築群。
キングコングは堀川を走って上流を目指し始めた。都市高速4号線と東海通り、その先の東海道新幹線が通る橋を叩き壊し、なおも北上を続ける。
どうにか体勢を整えた渡邉は、僚機と編隊を組んで後を追い始めた。この先には熱田神宮が鎮座している。一瞬そちらへキングコングを誘い込むことを考えたが、かなりの数の市民が避難しているであろうことを思い出してその考えを捨てた。だがこのまま進めば、名古屋市の中枢に達してしまう。
国道1号線、東海道本線を粉砕すると、堀川は急激に川幅が狭まる。その道中のさまざまな橋をぶち壊しながら進むキングコングを、市民は建物の中から、はたまた路上から仰ぐほかなかった。本能的に走り出す者も多いが、本能にかられながらもスマホでその様子を撮影する

人も少なくなかった。
都市高速新洲崎橋が轟沈すると、キングコングは目標とする存在を再び見据えた。唸るような咆哮を上げつつ、県道６０号線納屋橋を沈めたところで、西側に転身した。そのまま６０号線、通称広小路通りに上陸し、乗り捨てられた車両を踏み潰しながら進み始めた。路上、あるいは車中にいた人々は大慌てで最寄りの建物へ逃げ込むか、無我夢中で走り回っている。
人口密集地ということもあり、渡邉たちは地上４００メートルからキングコングの様子をうかがった。この状態では攻撃することはできない。
「いったい、どこへ行くつもりだ？」
渡邉がつぶやくと、『まさか、あの先・・・』と丹生がつぶやいた。
丹生が話した先へ渡邉が顔を仰ぐと、ＪＲ名古屋駅があった。
『ＪＲセントラルタワーだぞ』
金村が声を上げた。そういえば、６０年前に東京を蹂躙した際には、国会議事堂の中央ホールへ登り上がったときいている。
名駅通りに差し掛かると、渡邉たちの不安を的中させるように北へ転身を始めた。名鉄名古屋駅前まで来ると、そびえ立つＪＲセントラルタワーを見上げた。大きく息を吐くと、高島屋を足掛かりにして、なんとセントラルタワービルオフィス棟に手と足を掛け、登り始めた。
『ウソだろ・・・』
丹生が絶句するようにつぶやいた。時折つまさき、手先をビルに食い込ませながら、器用に円錐形のビルを登っている。しばらくして、ビルの屋上にたどり着いた。どこよりも高い場所に到達したことで満足したのか、キングコングは大きな咆哮を幾度も上げた。屋上のヘリポートに腰かけると、一気に圧壊して破片が周囲に飛び散る。機関銃で撃たれた箇所は出血こそあるものの、さほどダメージとはなっていないようだ。
「むしろ好都合だ。地上とタワーの避難が確認され次第、再度攻撃に移ろう」

名古屋でもっとも高い建物にわが物顔で鎮座するキングコング上空を旋回しながら、渡邉はそう呼びかけた。
『・・・ちょっと待ってくれ』
ふいに、金村機が応答する。高度を下げて、キングコングに接近を始めたのだ。
「おい金村、急に何をして・・・」
『至急至急!人だ!』
渡邉が言い終えぬうちに、金村が叫んだ。
『人だ、キングコングは人を握ってる!』
「本当か!?」
『間違いない!左手で人をつかんでいるんだ!』
思わず渡邉も、たしかめるために機体を降下させようとしたが、不用意にキングコングを刺激して攻撃を誘発することはできない。ここは市街地も市街地、大都市の中枢なのだ。
『こちらも確認した!たしかに、人の頭が見える』
丹生からも連絡があった。かねてから「両目とも視力2．0」と吹聴している彼の報告には信ぴょう性があった。
「至急至急!こちら第3ヘリ小隊!」
渡邉は歯噛みしつつ、インカムに怒鳴った。
「JRタワーに登ったキングコング、人を手に握っている。繰り返す、キングコング、人を手に握っている!今後の行動の指示を乞う。オクレ!!」